

517  
378

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 11 12 13 14 15

始



42 4  
12

# 話物マピスクエシ

著ムラ・ズルーヤチ

譯一詳村中



綴著召泉寺  
庫文庭奥



大正  
15.9.29

版社秋齋

大正

15.9.29

内交

517-378

序

沙翁物語（テイルズ・フロム・シェイクスピア）はその名の示す如く、沙翁の劇中より悲劇十篇と喜劇十篇とを選んで、チャールズ・ラムとその姉メアリー・ラムとが、若い讀者にシェイクスピア劇の面白味を知らせ、また進んでそれを讀む手引にしようとして、姉は喜劇を、弟は悲劇をうけもつて、原作の複雑な筋を平易優雅な物語としたものであります。そして姉弟愛情の記念品であるこの物語集は、單なる梗概や筋書ではなく、英文學史上に、立派な創作の一つとしての地位を占めて居るもので、今日に至る迄多くの愛讀者をもつて居ます。

日本でも古くから讀まれ、又教科書として用ひられて居るので、翻刻書や教科書として編纂された抜萃本が各書店から出版されて居ります。譯書としては小松武治氏の「沙翁物語集」、小松月陵氏の「沙翁物語十種」（小松武治氏と小松月陵氏は同一人であるかも知れません。また上記二書を合せると二十篇の全譯になります。）鹽見清氏とエッサー夫人共譯の「セキスピヤ劇二十篇」、その他四五篇をぬいて註釋をしたものもあります。で後から譯すものゝ義務として、各譯書や註釋書を忠實に参考し、立派な譯書を作らうと思つて譯にとりかゝりましたけれど、種々な事情で譯が遅れたため、さうした

序

5  
78

序

事をする時間を得ず、小松氏、鹽見氏の譯を時々参照させて貰ふだけにとどめました。たゞ、讀者のうちには教科書の参考として讀まれる方も多からうと考へて、出來得る限り原文について譯したため、美しい原文を、(特に悲劇に於て) 大變窮屈な文章にしてしまつたのを申譯のないことだと思つて居ます。

原本はオクスフォード版の *The Works of Charles and Mary Lamb* 中に出て居るものを用ゐ、マクミラン版の註釋本(十三篇を抜萃したもの)を参照しました。ラウトレッジ發行の *Indian Text-Book* の中にあるものには註も澤山あるので参考にしたかつたのですけれど、手許にないのでそれが出來ませんでした。なるべく氣を注げて譯しはしましたけれど、譯者の研究の不足と、先輩なぞにたゞす時間を得なかつたためとて誤も潜んで居る事と思ひます。大方の御教を御願ひ致します。

大正十五年九月

譯者

目次

譯者の序

嵐 (メアリ作) ..... 一

眞夏の夜の夢 (メアリ作) ..... 二三

冬 物 語 (メアリ作) ..... 四三

からさはぎ (メアリ作) ..... 六五

御意のまま (メアリ作) ..... 八九

ヴェロウナの二紳士 (メアリ作) ..... 一一五

ヴェニスの商人 (メアリ作) ..... 一二九

シムベリン (メアリ作) ..... 一六三

リア王 (チャアルズ作) ..... 一八五

マクベス (チャアルズ作) ..... 二〇七



目	終よきはみなよし (メアリ作).....	二二五
	悍婦ならし (メアリ作).....	二四七
	間違の喜劇 (メアリ作).....	二六七
次	以尺報尺 (メアリ作).....	二九一
✓	十 二 夜 (メアリ作).....	三三二
	アシンズのタイモン (チャアルズ作).....	三四五
✓	イミオとヂユリエット (チャアルズ作).....	三六七
✓	ハムレット (チャアルズ作).....	三九五
✓	オセロウ (チャアルズ作).....	四一九
✓	ペリクリーズ (メアリ作).....	四二一

海中に一つの島があつて、そこに住んで居る者と云へば、その名をプロスパロウと云ふ老人と、その子のミランダと云ふ美しい娘だけであつた。彼女はまだ幼い時に此の島に來たので、父の顔よりほかに、人間の顔を見たといふ記憶をもつて居なかつた。

二人は岩で造られた洞窟に住んで居たが、それは幾つもの部屋に別れて居り、その部屋の一つを、プロスパロウは書齋と呼んで、主として、當時の學者が興味をもつて研究した、魔術の事を書いた書籍を藏して居たが、その魔術に關する知識が彼に大變に役に立つた。といふのは、不思議な機會で此の島に漂着した時、此の島は、彼が到着する少し前に、此處で死んだシコラクスと云ふ女魔法使のために、魔法で封じられて居たが、プロスパロウは彼の魔術の力により、その不正な命令に服従する事を拒んだといふので、シコラクスが大きな木の幹に封じて居た多くの善良な妖精を解放してやつた。これら溫和な妖精共は、それ以來、プロスパロウの意によく服従して居た。この妖精共の長はエイリエルと云ふのであつた。

快活な小さい妖精エイリエルには、何一つその性質に悪いところはなかつたが、たゞキヤリバンといふ醜い怪物をいぢめる事を、すこし楽しみにすぎた。それは此の怪物が、彼の舊敵シコラクスの息子なので、遺恨を抱いて居たからであつた。このキヤリバンは、プロスパロウが森の中でみつけたのであるが、不思議な不恰好な者で、形の點から云へば、猿よりもつと人間に遠いものであつたが彼はこの怪物を自分の洞窟に連れて歸り、話をする事を教へた。そしてプロスパロウは、彼に大變深切にしてやつたのであるが、キヤリバンがその母のシコラクスからうけついで悪い性質は、どうしても彼によい事や有用な事は、何一つ學ばせなかつたので、そのためにキヤリバンは、奴隸のやうに、薪を取つて來たり、一番骨の折れる仕事をしたりするために使はれ、そしてエイリエルは彼にこれらの務を果させるやうにする役目であつた。

キヤリバンが無性をしたり、その仕事を怠つたりすると、エイリエルは（彼はプロスパロウ以外の者の眼には見えないのであつたが）よく、こつそりとやつて來て、彼を抓り、又時々は泥濘の中に轉ばして、それから猿の姿となつて、彼に向つてしかめつ面をするのであつた。そして今度は、急にその姿を變へ、蝟とみせかけて、キヤリバンの通路に轉つて居るので、キヤリバンは蝟の刺が、その何も穿かないで居る足を刺しはしないかと心配した。エイリエルは、プロスパロウがせよと命じた仕事を、キヤリバンが怠けてしない時にはいつでも、かうした種々様々の腹の立つ策略を用ひて、彼をしばしば苦めるのであつた。

かやうな有力な妖精共をその意に従はせて居たので、プロスパロウは、彼等の力を借りて、風や海

の浪を思ひの儘にする事が出来た。プロスパロウの命令によつて、妖精共は暴風雨を起したが、その暴風雨のたゞ中に、今にもそれを呑み込んで了ひさうに見える荒浪と戦つて居る、美事な大きな船をプロスパロウはその娘に見せて、その船には彼等と同じ様な人間が一杯乗つて居るんだと話した。

『あゝ、お父様』と彼女は云つた。『もしあなたの魔術で、この怖しい暴風雨をお起しになつたのならば、あの人達の難儀を憐んでおやりなさい。御覽なさい！ 船はこなくに碎けてしまふでせう。可哀想に！ 乗つて居る者共はみんな死んで了ふでせう。もし私にさうする丈の力があれば、尊い生命を乗せたまゝであの船を沈没させる程なら、海を大地の下に沈めて了ふでせうのに。』

『さう驚く事はない、ミランダよ。』とプロスパロウは云つた。『危険は一つもない。船に乗つて居る人々が、少しの危害も受ける事のないやうに、私は手筈をして置いた。私があゝした事をしたのも、お前のためを思ふからの事だ。お前は、自身の身分も知らねば、何處から來たかも知らず、また、私がお前の父で、此の哀れな洞窟に住んで居る事より外には、私の身の上も知つて居ない。お前は、まだ此の洞窟に來なかつた時の事を想ひ起す事が出来るか。出來ないだらうね、まだ三歳にもなつて居なかつたんだから。』

『出來ますわ。御父様。』とミランダは答へた。

『何によつて？』とプロスパロウはきいた。『家の事か、それとも人の事か。どう云ふ事を想ひ出す事が出来るか話して御覽。』

ミランダは云つた。『それは夢の事を想ひ出す様な氣がします。ですが私には、侍いて呉れる四五人の女があつたのではないでせうか。』

プロスパロウは答へた。『あつた、もつと澤山あつた。どうしてそれが今迄お前の心に残つて居たのであらう？ お前は、どう云ふ風にして此處へ來たか覚えて居るか。』

『いゝえ、お父様』とミランダが云つた。『ほかには何も覚えて居りません。』

『十二年の昔、』とプロスパロウは話を續けた。『私はミランの公爵であり、御前は姫で、私の只一人の後継者であつた。私には一人の弟があつて、その名をアントゥニオと云つたが、私はその弟に萬事を托した。そして、私は務を離れ、研究に没頭する事が好きであつたから、國事は大抵の場合御前の叔父、即ち私の不實なへといふのは、實際、後になつてさうだと分つたのだが、弟の支配に任せて置いた。私は、世間的な事は一切かまはないで、書籍の中に埋れ、時間はすべて、心を研く事に捧げた。弟のアントゥニオは、かやうにして、私の政權を占有して居たので、實際自分が公爵のつもりになり始めた。私が、臣民の信用を得るやうな機會を彼に與へたので、彼の邪惡な性質のうちに、私の國を横領しやうといふ、大それた野心が目醒めて、彼は此の野心を、私の敵であり、大變勢力のあつたネイブルズ王の援助のもとに成就した。』

『その人達は、なぜその時に私共を殺さなかつたんでせうね。』とミランダが云つた。

『わが子よ。』と彼女の父は答へた。『彼等はさうする事は出来なかつた、臣下の私に對する愛は非常なものであつたから。アントウニオウは私共を船に乗せて連れ出し、海上數里の處へ來た時、無理やりに、船具も帆も帆柱もない小舟に移し、そこに残し置いて、彼の考では、さうして死なせる積りであつた。然し宮廷の貴族で、深切なゴンザロウと云ふものが、私を大變愛して居たので、水と食糧と、私が自分の國よりも重じて居た本を、ひそかに船に入れて置いて呉れた。』

『まあ御父様、』とミランダは云つた。『その時私は、どんなにか御父様に御迷惑をかけた事で御座いませうねー』

『さうではなかつた。』とプロスパロウは云つた。『御前は私を慰めて呉れる小天使であつたのだ。御前の無邪氣な微笑を見ると、私は自分の不幸を我慢する事が出來た。吾々の食糧は、吾々がこの淋しい島に到着するまで續いた。それから後の私の一番の樂は、御前を教育する事であつたが、お前は又私の教をよく學んで立派になつた。』

『有難う御座います、御父様、』とミランダが云つた。『それで、どうぞ御聞かせ下さいませ、この暴風雨を御起しになつた譯を。』

『それはかうだ。』と彼女の父は云つた。『この暴風雨のために、私の敵であるネイブルズの王と、殘忍な弟とが、此島の岸にうちあげられるのだ。』

かう云ひ乍らプロスパロウは靜かに、魔法の杖をその娘に觸れると、娘は深い眠に落ちた。と云ふのはその時妖精のエイリエルが暴風雨の顛末と、船の乗組員を如何に處置したかといふ事を主人に語るためにやつて來たからであつた。妖精の姿がミランダの眼にとまるといふやうな事はなかつたけれど、プロスパロウは、相手なしに(ミランダにはさう思へたのだが)話して居るのをきかれる事を好まなかつたからである。

『で、柔順な妖精よ。』とプロスパロウはエイリエルに向つて云つた。『御前は務をうまく仕遂げたか。』

エイリエルは、暴風雨の事や、船に乗つて居る人達の恐怖の事や、又ネイブルズ王の子ファディナンドが、どの様にして海に飛び込んだかと云ふ事や、又王が、どの様にして、可愛い息子が波に吞まれて消えて行つたのを見たと思つたかと云ふ事やを、細々と眼に見える様に話した。

『然し王子は無事で。』とエイリエルは云つた。『島の一隅に腕組をしたまゝ腰を下して、父王は溺れ死んだものと思ひ込み、父王の死をひどく悲しんで居ます。彼は髪の毛一すちも傷はれては居ず、又その美しい衣服は波のために濡れては居ますけれど、前よりもひきたつて見えます。』

『出かした。エイリエル』とプロスパロウは云つた。『此處へ彼を伴れて來て呉れ。娘にこの若い王子を見せねばならぬ。王と私の弟は居るのだね。』

エイリエルは云つた。



『私は彼等がフアダイナンドを探して居るが儘にして置いて來ましたが、彼等は王子が浪にさらはれたと思つて居ますので、彼が見つかるだらうと云ふ希望は殆んど持つて居ません。船に乗つて居た人達は各々自分一人丈が助かつたのだと思つて居ますけれど、みな無事で居ります。そして船は彼等の眼には見えませんが、安全に港に着いて居ます。』

『エイリエル』とプロスパロウは云つた。『お前は立派に任務を果した。だがもう少し仕事がある。』

『まだ仕事があるんですつて。』とエイリエルは云つた。『私に自由を與へてやると御約束なされた事を思ひ出して下さい。どうぞ思つて見て下さい。私はあなたの御役に立つやうな事を致しました。偽りを申しあげた事ありませんでした。間違ひも致しませんでした。二の足をふむ事もなく、不平も云はないで、あなたに御仕へしました。』

『これ／＼どうしたと云ふのだ！』とプロスパロウは云つた。『私が、あんな苦しみからお前を救つてやつた事を忘れたね。お前は、あの年と嫉妬とで腰は殆んど二重になる程曲つた悪性の女魔法使シヨラクスを忘れたのか。あれは何處で生れたのであつたか、さあ私に言つてごらん。』

『アルジアズで生れたので御座います。』とエイリエルが云つた。

『あゝさうであつたか。』とプロスパロウは云つた。『お前は忘れて居るやうであるが、お前がどう云ふ風にして今日に至つたかを思ひ出して貰はねばならぬ。あの悪性の女魔法使のシヨラクスは、人間に

きかせるさへ恐ろしいその魔法のために、アルジアズから追放されて、水夫等に此處に置き去りにされたのだ。してお前は優しい性質をもつて居たために、彼女の邪惡な命令を行ふ事が出来なかつたのだ、彼女はお前を木の幹に封じこめ、その中でお前が泣き叫んで居るのを私が見つけたのだ。いゝかね、お前のその苦しみを私が救つてやつたのだよ。』

『御主人、何卒御赦し下さい。』とエイリエルは恩知らずと思はれるのを恥ぢて云つた。『あなたの御命令通りに致します。』

『さうして呉れ。』とプロスパロウは云つた。『そしたらお前を自由の身の上にしてやらう。』

それからプロスパロウは次にエイリエルになすべき事を命じた。でエイリエルは立ち去り、まづフアダイナンドを残して置いた場處に行き、前と同じやうな悲しさうな様子で、なほ草の上に座つて居る王子を見た。

『あゝ若い御方様。』彼は王子を見た時に云つた。『今に私があなたを立たせてあげます。私はあなたをお連れ申さねばなりません。といふのはミランダ様が、あなたの立派な御顔を一目御覽にならなければなりませんから。さあ、いらつしやい。私についていらつしやい。』それから彼は歌ひ始めた。

汝が父は五尋の水底に横はる

骨は珊瑚の枝となり

眼は化して眞珠となる

變り得る彼のかばねのいづかたも

海水の不可思議なる力によりて變りはて

尊きくしきものとなる

海の魔女は時を定めて弔ひの鐘を鳴らす

きけ！ 今ぞ聞ゆる——デンドンドン。

見失つた父に關するこの不可思議な報知が、やがて王子を、これ迄陥つて居た一時的の精神昏迷の狀態からよみがへらせた。彼は驚天してエイリエルの聲のする方に従いて行つた。その聲は遂に、彼をプロスパロウとミランダの居る方へ導いた。父と娘は大きな樹の蔭に座つて居たのである。さてミランダは前にも云つたやうに、その父親を除いたほかの人間を見た事はなかつたのである。

『ミランダ』とプロスパロウは云つた。『向ふに見えるものは何であるか言つてごらん。』

『あゝ御父様。』とミランダは怪しみ、且つ驚いて云つた。『きつとあれは妖精でございませう。まあ！

何と四邊を見まはして居る事でせう！ 本當に美しい者ですこと、妖精ではないのでございませうか。』

『妖精ではない。』とプロスパロウは云つた。『あれは食事もすれば、眠りもし、また私共と同じやうに感じもする者だ。お前の見て居るあの若者はあの船の中に居たのだ。彼は悲しみのために少しやつれて居るが、さうでなければ、立派な男だと云つてよい。彼は連れの者を見失ひ、それを見つけるをぬにさまよひ歩いて居るのだ。』

ミランダは、男といふものはみなその父のやうにいかめしい顔をし、灰色の髻を生やして居るものだと思つて居たのに、今この美しい若い王子が現れたので大層喜んだ。又フアダイナンドも、この淋しい場所に、こんな美しい婦人が居るのを見、また不思議な聲もきいたので、驚異すべき事以外には何事をも期待して居なかつたから、自分は魔法でできた島に上陸したのであり、またミランダは、この女神であると思つた。そこで彼は女神として彼女に言葉をかけた。

彼女はをづくし乍ら自分は女神ではなくて唯の乙女である旨を答へ、それから自分の身の上を彼に語らうとした時、プロスパロウは彼女を遮りとめた。彼は二人がお互に氣に入つて居るのを見て大變嬉しく思つた。と云ふのは、彼は明かに、二人が（所謂）一と目見ると戀し合ふやうになつたといふ事を認めたからである。しかし彼は、フアダイナンドの節操を試すために、二人の間に何か邪魔を入れようと決心した。そこで彼は前に進んで、厳格な態度で、王子に向つて、自分が支配して居る此の島を奪ひ取るために、間諜としてやつて來たのであらうと云つた。

『私について来い。』と彼は云つた。『私は御前の頸も足も一緒に縛り、海水を吞ませ、貝や、乾いた根や、どんぐりの殻を食はせてやる。』

『いや／＼』とファデインンドは、『もつと強力な敵に出逢ふまで、左様なしむけには抵抗する。』と言つて刀を抜いた。然しプロスパロウは、その魔術の杖を振つて、彼を其の場に立つたまま動かれぬやうにしたので、彼には歩く力がなかつた。

ミランダは父に、とり纏つて云つた。

『なぜ御父様はそんな手荒な事をなさいますのです。憐みをかけておあげない。私がこの方の保証人になりませう。この方は私が生れてから一番目に見た男の方で、私には眞實な方のやうに思へます。』  
『だまつておいでなさい、』と父親は云つた。『此上一口でも餘計な事を云ふと叱りますよ。なに！ 欺騙者の辯護人だつて！ お前はキャリバンと此の若者以外に男を見ないので、世の中にはこれより良い男は居ないと思つて居る。いゝかね、大抵の男は、此の男がキャリバンよりも美しいやうに、此の男よりも美しいのだ。』これは彼が娘の節操を試すために云つたのである。で彼女は答へた。

『この方よりも美しい人を愛したいとは思ひません。もつと好い男を見たいとも思ひません。』

『さあ来い、若者。』とプロスパロウは王子に向つて云つた。『お前はもう私に抵抗する力はない。』

『なるほどない。』とファデインンドは答へた。魔術で抵抗する力を奪はれたと云ふ事を知らないで、

彼は、かく不可思議に、よぎなくプロスパロウに従はねばならぬやうになつたのに驚いた。見える間はミランダの方を見返り／＼、プロスパロウに従つて洞窟に行きながら、彼は言つた。

『私の力はすべて拘束されて、丁度夢の中にあるやうだ。然し、もし私の獄舎から日に一度この美しい婦人を見る事が出来るなら、この老人の恐喝も、私の心に感ずる弱さも私には物の數でもないであらう。』

プロスパロウはファデインンドを長く部屋の中に入れては置かなかつた。彼は間もなく囚人を連れ出して、殿しい仕事を課した。そして娘に、彼が王子に課した勞役を知らしめるやうにして置き、自分分は書齋に入つて行く振りをして、密かに二人を見守つて居た。

プロスパロウはファデインンドに重い丸太を積み重ねる事を命じたのであつた。王様の子といふものは、さう勞働なぞに慣れて居るものではないので、ミランダは間もなく自分の戀人が死ぬ程疲れたのを見た。

『御可哀相に！』と彼女は云つた。『そんなにつめて御働きなさいますな。父は今書齋に居りますから三時間位出て参りは致しません。どうぞお休みなさいませ。』

『あゝ御婦人』とファデインンドは云つた。『それは出来ません。私は休息する前に仕事をかたづけなければなりません。』

『ではあなたが座つて居らつしやれば。』とミランダが云つた。『私はその間丸太を運びませう。』しかしこれにはファデインランドがどうしても同意しなかつた。ミランダは手傳ではなく却つて邪魔になつた。と云ふ譯は二人はなが話を始めたので、木を運ぶ仕事は大變遅れてしまつたからである。

プロスパロウは、唯その愛の試みとして此の仕事をつアデインランドに命じたのであるから、娘が考へたやうに讀書して居たのではなくて、二人の會話をきくために、姿を見せないで二人の傍に立つて居たのであつた。

ファデインランドは彼女の名を尋ねた。ミランダは、それを教へてきかせるのは父の云ひつけに背く<sup>ミランダは父の云ひつけに背く</sup>のであつたと言譯をした。

プロスパロウは、娘のこの初めての不服順を見て微笑したのみであつた。といふのは、彼は自分の魔術で、娘がかくも急に戀をするやうにしたのであるから、自分の云ひつけをまもる事を忘れて、その愛を示した事を怒りはしなかつたのである。それから彼はファデインランドの長い話に、喜んで耳をかたむけた。その話の中で、王子は、これ迄に見た如何なる婦人にもまして、彼女を愛すると明言した。

王子は彼女の美しさを讃めて、世の中のあらゆる婦人にすぐれて居ると云つたのに答へて、ミランダは言つた。

『私は他の婦人の顔も存じませんし、またあなたと私の父以外には、どんな男の方も見た事が御座いません。ほかの國では男がどんな顔をして居るか存じません。ですが私は本當に、此世ではあなた以外には誰も欲しくはなく、又あなたの姿以外に私が愛し得る姿を心に畫く事も出来ません。ですが私はあまり打ちあけた御話を申しあげて居り、また父の教を忘れて居るやうで御座います。』

それをきいてプロスパロウは微笑し、次のごとく云ふかのやうにうなづいた。

『これで私の願通りに事が運んで行く。娘はネイブルズの皇后となるであらう。』

それからファデインランドは、上品なながい言葉でもつて、(と云ふのは若い王子達といふものはみやびた言葉で話すものであるから) 彼がネイブルズ王の嫡子であるといふ事、彼女を彼の未來の后にするといふ事を無邪氣なミランダに話した。

『あゝあなた!』と彼女は云つた。『私は嬉しい事にも涙をこぼす愚か者でございます。私はつゝみかくしのない淨い心で御答へ申しあげます。あなたが私と結婚して下さいますならば、私はあなたの妻となりませう。』

プロスパロウは二人の前に姿を現して、ファデインランドが、感謝の言葉を述べようとするのを遮りとめた。

『怖れる事はないミランダ。』と彼は云つた。『私はみんな聞いて居たのだ。そしてお前の云つた事はす

べて尤もだと思ふ。してフアダイナンドよ、私が御前に對してあまり殿し過ぎたとしたら、娘をお前に與へて十分な償ひをしよう。お前をくやしう思はせたのはみなお前の愛を試すために過ぎなかつたのだ。そしてお前は立派に試みにたえた。それで、お前の眞の愛情が買ひ得た此の娘を私の賜物として、連れて行け。そして私の娘はどんな賞讃も及ばぬ程に立派だと私が自慢するのを笑つて呉れるな。』それから彼は行つて來なければならぬ用事があると云ふ事を告げ、彼等は彼が歸つて來る迄、そこに腰を下して話して居て呉れるやうにと云つた。ミランダはこの云ひつけには、決して背くやうには見えなかつた。

プロスパロウは彼等の處を去り、妖精のエイリエルを呼んだ。エイリエルは、主人の弟とネイブルズ王とを如何に處置したかを話さうとまぢ構へて、大急ぎで彼の前に現れた。エイリエルは、彼が見させたり又きかせたりした不可思議なものに對する恐怖で、二人が正氣を失つたまゝにして置いて來たと云つた。二人がさまよい歩いて疲れ、食物の缺乏でひどく空腹を感じて居る時、彼は彼等の前に立派な御馳走を供へ、それから、彼等がまさに食べようとした時、彼は翼の生えた貧欲な怪物ハアビイの姿となつて二人の前に現れ、御馳走はたちまち消え去つた。それから彼等の驚天した事には、このハアビイと見える怪物は、彼等に言葉をかけ、プロスパロウをその公國から追ひ出し、彼とその幼き娘とを海中に自ら死ぬるやう置き去りにした残酷さを思ひ出さしめ、そのために、かうした恐ろ

しい事が彼等を苦しめるやうになつたのだと告げた。

ネイブルズの王と不實な弟アントウニオウとは、彼等がプロスパロウに對してした不正を後悔した。そしてエイリエルは主人に、彼等の後悔はたしかに眞實心から出たものであるといふこと、妖精ではあるけれども、自分は彼等を憐まざるを得なかつたといふ事を話した。

『では二人をこちらへ連れて來て呉れ、エイリエル。』とプロスパロウは云つた。『妖精に過ぎないお前が、彼等の災難に同情するとすれば、彼等と同じやうな人間である私が、どうして憐まらずに居られよう。急いで二人を連れて來て呉れ、エイリエル。』

エイリエルは間もなく、王とアントウニオウとを連れて歸り、その後から老人ゴンザロウもついて來た。彼は、エイリエルが、二人を主人の處へ導くために奏したきゝなれぬ音楽をきいて驚き乍らエイリエルについて來たのであつた。このゴンザロウと云ふのは、その昔、プロスパロウの不實な弟が、帆も帆柱もない小舟に乗せて、いづれは死ぬるものと考へて、プロスパロウを海中に置き去りにした時、深切にも書籍と糧食とを供給して呉れた老人であつた。

悲しみと恐怖とのために、彼等の意識は非常に茫然として居たので、プロスパロウを認める事が出來なかつた。プロスパロウは先づ、忠義な老人ゴンザロウを、命の恩人であると呼んで、自分の身上を知らしめた。すると彼の弟もネイブルズ王も、彼は自分達が迫害したプロスパロウである事を知

つた。

アントウニオウは涙を流し、悲しみの言葉と眞實の懺悔とを以て、兄のゆるしを乞ひ、王は、アシトウニオウを助けて、その兄の位を奪はせた事を心から後悔して居る旨を述べた。プロスパロウは二人をゆるした。そして彼等が彼に公國を返す事を誓約した時に、彼はネイブルズ王に向つて云つた。

『私もまたあなたに差しあげたいと思つて大切に置いて置いた贈物がある。』それから彼は戸を開いてミランダと將棊を指して遊んで居る彼の子ファディナンドを彼に示した。

如何なる喜びも、かく思ひがけもなくめぐり合つた親子の喜びにまさる事はなかつた。といふのは、彼等は互に暴風雨のために溺れ死んだものと許り思つて居たのだから。

『まあ不思議だ！』とミランダが云つた。『何といふ立派な方々でせう。こんな方々の住んでゐらつしやる國は、定めし美しいところでせう。』

ネイブルズ王は、殆んど王子の場合に於けると同様、若いミランダの美しさとすぐれた品位とに驚いた。

『この乙女は誰でせう。』と彼は云つた。『彼女は吾等を離したり、又かやうに一緒にしたりした女神のやうに思へる。』

『さうでは御座いません。』とファディナンドは、自分が初めて彼女を見たときに陥つたのと同じ誤に

父も陥つて居るの發見して、微笑し乍ら云つた。『彼女は人間でございます。しかし人間ならぬ神様の攝理によつて、彼女は私のものとなりました。私は、父上、あなたの御承諾を乞ふ事が出来ないうちに、彼女を選びました。あなたが生きておいでになるとは思ひませんでしたので。彼女は、有名なミランの君主であり、かねてその名聲はきいて居ましたけれど、まだ會ふ事は出来ないで居たプロスパロウの娘で御座います。このプロスパロウから私は新生命を享けました。彼はこの美しい婦人を與へて、私の第二の父となつたので御座います。』

『では私は彼女の父である筈だ。』と王は云つた。『だがまあ！ 何と妙にきこえる事であらう。父が我子の赦しを乞はねばならぬとは。』

『その事はもうおつしやらぬがよい。』とプロスパロウは云つた。『過ぎた難儀は思ひ出さぬ事にしませう。こんなに幸福に收りがついた事ですから。』

それからプロスパロウは弟を抱いて、再び心からの赦しを與へ、天の攝理はかしこくも、娘をネイブルズの皇后とするために、小さなミランの公國から彼が追ひ出されるやうにし給ふたのだ。といふ譯は、此の淋しい島で彼等は相逢つて、王子がミランダを愛するやうになつたのだからと云つた。

彼の弟を慰めようとして、プロスパロウが云つたかうした深切な言葉をきき、アントウニオウは羞恥と悔恨の情にみたされて、彼は泣くのみで言葉を出すことも出来なかつた。それに深切な老人ゴンザ

ロウも、この嬉しい和解を見て泣き、また若い夫婦の上に祝福あらん事を祈つた。

そこでプロスバロウは、彼等の船は無事に港に入つて居る事、水夫等は皆船に乗り込んで居る事、又彼と娘も彼等と一緒に翌朝故郷にかへると云ふ事等を告げた。

『時に。』と彼は云ふ。『つまりぬものではあるけれど、私のむさくるしい洞窟で差しあげる食事をおあがり下さい。それからあなた方の夜のもてなしに、私がこの孤島に初めて上陸してから、身の上につた話を致しませう。』それから彼はキャリバンを呼び、食事の用意をし、洞窟内を整頓するやうに命じた。一同はプロスバロウが自分に仕へる只一人の召使だといふ此の醜い怪物の不思議な姿や、野蠻な様子を見て喫驚した。

あの活潑な小さな妖精であるエイリエルの大層喜んだ事には、プロスバロウは、此の島を去る前に、彼に暇をやつたのである。彼はこれまでその主人に忠實に仕へては來たけれども、また、小鳥のやうに空中を、緑の樹蔭を、また美しい果物や、香の高い花の間を些の拘束もなく彷徨ひ歩くために自由の身になりたいと常に切望して居たのである。

『美しいエイリエルよ。』と彼を自由な身の上にしてやつた時、プロスバロウはその小さな妖精に向つて云つた。『私はお前が居なくなる淋しくなる。それに係らずお前に自由を與へてやる。』

『ありがたう御座います。御主人様。』とエイリエルは云つた。『あなたがあなたの忠實な妖精の御奉公

を御断りになります前に、順風を伴つて、あなたの船の御歸りを御送りする事を御許し下さい。それから、御主人様、私が自由の身となつたら、どんなに陽気に、私は暮らす事せう！』こゝに於てエイリエルは左の美しい小唄を歌つた。

蜂の蜜を吸ふところ、そこに私も蜜を吸ひ

私は九輪櫻の花のなかにふし、

梟の鳴く時そこにかりねする。

蝙蝠の背に乗り、楽しく夏を追ふて飛ぶ

梢にかゝる花がけに楽しく、

楽しく楽しく私は暮さう。

プロスバロウはその魔術の書物と杖とを地中深く埋めた。もう魔術を使ふまいと決心したからである。かやうにしてその敵に打ち勝ち、また弟やネイブルズ王とも和解したのであるから、故國に再び歸つて、公國を恢復し、ネイブルズに歸るとすぐ、盛大に舉行すると王が云つて居る彼の娘と王子フアデインランドとの幸福な結婚式を見る事以外には、彼にとつて足らぬ事はなかつた。妖精のエイリ

エルに安全に護衛されて氣持のよい航海を続け、間もなく彼等はネイブルズに到着した。

眞夏の夜の夢



アシンズ市に一つの法律があつて、その法律により、市民は己の氣に適つた者との結婚を娘に強ひ得る権力をもつて居た。それで、父親が娘の夫にと選んだ男と結婚する事を、娘が拒んだ際には、娘が死刑に處せらるゝやうにする権利を、父親は、法律によつて與へられて居たのである。けれども、父親と云ふものは、わが娘の死をさう望んで居るものではないから、時として娘達が少し氣儘だと思はれるやうな事があつても、また此の市の若い婦人達が、その両親に、怖ろしい法律の事をもち出されて、脅かされる事は、多分稀ではなかつたらうけれど、此の法律はめつたに、いや決して執行された事はなかつた。

ところが、イーディアスと云ふ老人が、その娘のハアミアに、アシンズの貴族の家柄の青年デイミイトリアスと結婚する様に命じたが、娘はライサンダと云ふ他のアシンズの青年を愛して居るために彼の命を拒んだといふ事を訴へて、シイシウズ（その當時アシンズを治めて居た公爵）の前に、實際出頭したといふ一例が起つた。

ハアミアは不従順の申譯として、デイミイトリアスは、彼女の親友ヘリイナに對して、以前己に愛を誓つて居り、又ヘリイナは氣も觸れんばかりにデイミイトリアスを愛して居ると云ふ事を申したて

た。然し、ハアミアが父の命に従はない譯だと云つて述べた此の立派な理由も、嚴酷なイーディアスを動かす事は出来なかつた。シイシウズは、偉大な情深い君主ではあつたけれども、その國の法律を變更する権利はもつて居なかつた。それ故に彼は、ハアミアに、その事をよく熟考するやうにと、四日の餘裕を與へる事しか出来なかつた。そして四日の後、彼女が尙ほデイミイトリアスと結婚する事を拒むならば、彼女は死刑に處せらるゝ事になつた。

ハアミアが公爵の面前を釋放された時、彼女は其の戀人なるライサンダの許に行き、自分の面接して居る危難の事を告げ、彼を斷念して、デイミイトリアスと結婚するか、四日の後に命を失ふかどうかにかにしなければならぬといふ事を話した。

ライサンダはこの不幸な消息をきいて大變に苦惱した。が、彼は、アシンズから少し離れた處に住んで居る伯母をもつて居り、またその伯母の住んで居る處では、この残酷な法律は、ハアミアに對して執行され得ないと云ふ事を思ひ出して（此の法律は市の範圍外には適用されなかつた）彼はハアミアに、その夜父の家を抜け出して、彼と共にその伯母の家に至り、そこで二人は結婚しやうと云ふ事を提案した。

『私はあなたと落ち合ひませう。』とライサンダは云つた。『市から數哩離れた森の中で、楽しい五月にヘリイナと一緒に、私共が屢々歩いたあの愉快な森の中で。』

この提案にハアミアは喜んで同意した。そしてこの遁走しやうといふ計畫は、その友人ヘリイナ以外には誰にも話さなかつた。ヘリイナは（乙女といふものは、戀のためには、よく愚かな事をするものであるが）甚だ無分別にも、行つてデIMITリアスに此の事を告げやうと決心した。それは、友達の秘密を裏切つて、何の利益があらうとも思はなかつたけれど彼女の不實な戀人に従つて森まで行かう云ふ果敢い楽しみのためであつた。といふのは、デIMITリアスはハアミアを追跡して、そこへ行くだらうといふ事を、彼女はよく知つて居たからである。

ライサンダとハアミアが落ち合ふ事に申し合せた森は、フェアリと云ふ名で知られて居るあの小さな妖精が好んで集る處であつた。

フェアリの王オウバロンと妃のタイテイニヤとはその大勢の小さな部下を集めて、此の森で眞夜中の宴會を催したのであつた。

此時、たまくこの小さな妖精の王と妃との間に悲しい不和が起つた。二人はこの楽しい森の葉蔭の小路に、月の光をうけて相見るやうな事は決してなく、口論許りして居たので、遂には、小さな妖精共は恐怖のあまり櫛の實の蓋に這ひ込んで身をかくして居た。

此の不幸な不和の原因は、タイテイニヤが、自分の友達の子供である小さな拐し子を、オウバロンに與へる事を拒んだからである。妃は、子供の母親が死んだ時、この子をその乳母から盗んで來て森

で育てあげたのであつた。

戀人達が此の森で會ふ事になつて居た夜、タイテイニヤが侍女達を連れてそぞろ歩きをして居た時近臣の妖精共を召しつれて居るオウバロンに邂逅した。

『運悪く月の光の下で出會つたな、高慢なタイテイニヤ。』と妖精の王は云つた。

『何ですつて、嫉妬深いオウバロン、汝でしたか。妖精共よ、跳んで此處を逃げよ。私は彼と一座しないと誓つて居る。』

『待て、向ふ見ずの妖精よ』とオウバロンが云つた。『私は汝の夫ではないか？ なぜタイテイニヤは夫なるオウバロンに逆ふのか？ 汝の小さな拐かし子を、わが小姓に與へなさい。』

『御安心なさい。あなたの妖精の王國を全部貰つても、私の子供は差しあげません。』彼女はその夫を激怒させた儘にして立ち去つた。

『よろしい。汝の勝手にしろ。』とオウバロンは云つた。『東が白まぬ前に、此の非行の報として汝を苦しめてやらう。』

オウバロンはその寵臣であり、顧問宮であるパツクを呼びにやつた。

パツクは（時としてロビン・グッドフェロウとも呼ばれて居たが）敏捷な、質の悪い妖精で、よく近所の村へ出て滑稽な惡戯をしたものである。即ち或時は牛乳搾取所へ忍び込んで牛乳を掬ひ取り、

又或時はその軽い空氣のやうな姿を、製酪器の中に投げ入れた。そして、彼が製酪器の中でその妙な姿を踊らせて居る間は、製酪婦が、クリイムをバタに造らうと如何に骨を折つても駄目であつた。又村の若者とても同様で、醸造器の中で、パツクがその酔狂を演じやうと欲したが最後、ビールは必ず臺無しにされるのであつた。二三の親しい隣人達が一所に集まつて、楽しくビールを呑まうとして居ると、パツクはよく焼いた野生の林檎の實のやうな姿となつて、ビールの大杯の中に飛び込み、誰か陽氣な御婆さんがまさに飲まうとする時、彼女の口許に引かゝつて、ぶく／＼躍り、彼女の皺だらけの頰にビールを撒き散らし、そしてすぐ後で、その老婆さんが、隣人達に悲しい陰氣な話をするために仔細らしい顔をして腰を下ろさうとすると、パツクはこつそりと、老婆さんの下から三脚椅子を取のけるので、可哀相に御婆さんは顛覆してしまふ。すると話相手の御婆さん達は腹を抱えてそれを笑ひ、これ迄こんなに面白い事は決してなかつたと云ふのであつた。

『こゝへ来い、パツク。』とオウバロンは、此の小さい夜の彷徨者に向つて云つた。『乙女達が「怠惰な戀」と呼んで居る花を採つて来て呉れ。あの紫色の花の汁を眠つて居る人の眼瞼に注げば、眼が醒めた時始めて見た者に溺れるやうになる。あの花の汁を少し、私はタイテイニヤが眠つて居る時、その眼瞼に注いでやらう。そしたら、たとへ相手が獅子であらうが熊であらうが、おせつかいな猿であらうが、せはしない尾長猿であらうが、眼を開いた時最初に眼にとまつた者を戀するやうになるだらう。そして、この魅薬を彼女の眼から取り去る前に、それは私が承知して居る他の魅薬をもつてする事が出来るのであるが、彼女がああ少年を私の小姓に渡すやうにしよう。』

この上もなく悪戯の好きなパツクは、主人の此の愉快な企みをきいて大變に喜び、走つてその花を探しに行つた。パツクが歸るのを待つて居る時、オウバロンは、デイミイトリアスとヘリイナが森に入つて來るのを見た。

王は、デイミイトリアスが、従いて來たのが悪いと云つて、ヘリイナを叱るのを洩れきいた。そしてデイミイトリアスが幾度も無情なことを云ひ、又ヘリイナが、彼の以前の戀の事や、いつまでも變らぬと誓つた事など思ひ出させて、物靜かに諫めたりした後、男は（彼の言葉をかりて云へば）野獸の餌食になれと云つて、彼女を後にして立ち去り、彼女は出來るだけ速く、彼を追かけて行つた。

常に、まことの戀人達の味方をする妖精の王は、大變ヘリイナに同情した。そしてライサンダが云つたやうに、この楽しい森の月の光の下を、彼等はよく逍遙したのであるから、デイミイトリアスに愛されて居た幸福な時代のヘリイナを、多分オウバロンは見えて居るかも知れなかつた。それはどうでもよいとして、パツクが小さな紫の花を持つて歸つて來た時、オウバロンは彼の寵臣に向つて云つた。

『此の花の一部分を取れ、この森に美しいアインズの婦人が來て居るが、その婦人は高慢な若者を戀して居る。若しお前がその若者の眠つて居るのを見つけたら、この愛の露をその眼に注いでやれ。だ

が彼女が彼の近くに居る時に、それをする様に工夫しなければいけぬ。彼が眼を醒した時最初に見るのが、この侮蔑されて居る婦人でなければならぬから。お前は、彼の着て居るアシンスの服装で、その若者の見わけがつくであらう。』パツクは此の事を巧妙にやると約束した。そこでオウバロンは、タイテイニヤに氣附かれない様に、彼女の寢室へ向つたが、そこでは彼女はもう寝る準備をして居た。妖精の妃の寢室は、麝香草、九輪櫻、香の高い堇等が咲き亂れ、上からは忍冬や、麝香薔薇や、野ばらやが天蓋のやうに垂れて居る堤の上であつた。そこでタイテイニヤは常に夜の一部分を眠る事にして居た。彼女の寢臺掛は艶を附けた蛇の皮であつて、それは小さな覆ではあつたけれど、妖精が一人くるまるには十分であつた。

王が行つて見ると、タイテイニヤは、自分の寝て居る間にどんな仕事をすべきかを部下の妖精共に吩咐て居た。

『お前達の幾人かは。』と皇后陛下はおつしやる。『麝香薔薇の蕾の中に居る尺取虫を殺さなければならぬ。又幾人かは、小さな妖精共の上着を製するに必要な、あの皮のやうな翼を得るために蝙蝠に競争をしなければならぬ。又幾人かは、夜な夜なほうくと鳴くあの騒しい梟が、私の近くに來ないやうに番をしなければならぬ。だがまづ唄を歌つて私を眠らして呉れ。』そこで妖精達は次の唄を歌ひ始めた。

舌の裂けたるまだら蛇

刺怖ろしき蝟。此處にくな

蠟蜥よ、盲蛇よ、害をすな

精の王妃の傍にくな。

節をもしろき夜啼鳥

吾等の唄に聲をかせ

お寢み、おやすみ、おやすみよ。

禍、障り、魔法なぞ

きれいな妃に近づくな

それではおやすみ、この唄で。

此の美しい子守唄で妃を眠らせてしまふと、妖精達は妃から命ぜられた重大な務を果すために彼女の許を離れた。するとオウバロンは靜かにタイテイニヤの側により、次の様に云ひ乍ら、愛の露を彼女の眼瞼の上に注いだ。

汝が目醒めた時に見たものを

汝が眞に愛するものと思へ。

話變つて、ハアミアは、デイミイトリアスと結婚する事を拒絶したために宣告されて居る死から遁れるためその夜父の家を抜け出した。そして彼女が森に来てみると、なつかしいライサンダは彼女を伯母の家に連れて行くために待つて居るところであつた。だが二人がまだ森を半分も通過しないうちに、ハアミアはひどく疲れてしまつたので、ライサンダは、自分のために生命さへも賭けてその愛を證明して居る愛人を、非常に大切にしたので、彼女に説きすゝめて、柔かな苔の生へた堤の上に朝までやすむ事にさせ、自分は少し離れた地面に横たはつたが、二人とも間もなく深い眠に落ちた。かうして二人が寝て居る處にパツクがやつて來たのである。彼は、立派な若者が眠つて居るのを見、またその衣服がアシインズ仕立であり、また彼の近くに美しい婦人が眠つて居るのを認めて、これが、オウバロンが彼を探しに遣はしたところの、アシインズの乙女と、その不實な戀人とだと思ひ込んだ。そして、そこに居るものは彼等二人きりであつたから、若者が眼が醒した時最初に見るものは、此婦人であるに違ひないと、パツクが考へたのも無理のない事であつた。そこで、彼は早速小さな紫の花の

汁を若者の眼に注ぎ始めた。しかし、たま／＼その方面にヘリイナがやつて來て、ハアミアでなく、ヘリイナを一番最初に、ライサンダは眼を醒まして見る事になつた。そして話すも不思議な事乍ら、この戀の魔藥の効果は非常に強かつたので、ハアミアに對する彼の愛は消え去り、ヘリイナを戀する様になつた。

ライサンダが眼を醒ました時、ハアミアを最初に見たのならば、パツクのやつた失策はなんでもなかつたのである。と云ふのは、ライサンダは此の貞節な婦人を、いくら愛しても愛し過ぎると云ふ事はないのであるから。だが事實はさうでなく、可哀相にライサンダが、妖精の戀の魔藥によつて、自分の眞實なハアミアを忘れて、他の婦人を追ひ掛け、ハアミアを、眞夜中に、森の中で唯一人眠つて居るまゝにして置くやうにされたのは、まつたく悲しいまはり合せであつた。

かやうにして此の不幸は起つたのである。ヘリイナは、前にも云つたやうに、デイミイトリアスがあんなに無禮に彼女の處から走り去つた時、彼について行かうと骨を折つた。だが彼女は此のかなはぬ競争を長く続ける事は出来なかつた。男は常に、長い間走る事は婦人よりも上手なものであるから。で、ヘリイナは間もなくデイミイトリアスの姿を見失つて了つた。そして、がっかりして、よるべくさまよひ歩いて居るうちに、彼女はライサンダが眠つて居る場所へ到着した。

『あゝ！』と彼女は云つた。『この地面に横たはつて居るのはライサンダだ。死んで居るのだらうか、

眠つて居るのだらうか。』それから静かに彼に觸つて、

『もし、生きて居らつしやるのなら、眼を御醒しなさい。』これをきくと、ライサンダは眼を開いた。そして（戀の魔藥が効き始めて）直ぐに仰山な愛と賞讃の言葉を用ひて話しかけた。美しいと云ふ點では鳩が鳥に優れて居ると同様に、彼女はハアミアに優れて居るといふ事や、慕はしい彼女の爲めならば、火の中も厭はぬと云ふ事や、その他かやうな戀人が云ひさうなことを澤山ならべた。ヘリイナは、ライサンダが彼女の友達ハアミアの戀人であると云ふ事や、また彼女と結婚する事を眞面目に約束して居るといふ事やを知つて居るので、かう云ふ風にして言葉をかけられた時、この上もなく怒つた。といふのは彼女は、ライサンダが彼女をなぶつて居るのだと（それも無理のないことだが）思つたのである。

『あゝ！』と彼女は云つた。『なぜ私は誰からもなぶられ侮蔑される様に生れたんだらう。澤山ではありませんか、澤山ではありませんか、あなた、デイミイトリアスから優しい顔一つされず、深切な言葉一つ懸けて貰へないだけで！ ですがあなたまで、こんな侮蔑的な態度で私に言ひよるふりをしてなければならぬのですか。私は思つて居たのです、ライサンダさん、貴方は眞にもつと立派な方だと。』大變に怒つてかう云つて、彼女は走り去つた。ライサンダは、尙ほ眠つて居る自分のハアミアの事などは打忘れて、ヘリイナの後を追うた。

ハアミアは眼を醒した時、彼女一人になつて居る事に氣づいて、驚き悲しんだ。彼女は、ライサンダがどうなつたかといふ事も、どの方向に彼を探しに行つていいかも知らずに、森を彷徨ひ歩いた。

然るに一方デイミイトリアスはハアミア及びその戀敵なるライサンダを發見する事が出来ず、その効果のなかつた搜索に疲れ果て、熱睡して居るところをオウパロンに見られた。オウパロンは、パツクに二言、三こと尋ねて見て、パツクが他の若者の眼に戀の魔藥を注いだといふ事を知つて居たが、さて今最初から目的として居た人間をみつけたので、彼は眠つて居るデイミイトリアスの眼瞼に一寸戀の魔藥を注いだ、するとデイミイトリアスは直ちに眼を醒した。そして初めて見たのがヘリイナであつたから彼は、ライサンダが以前なしたと同様に、彼女に向つて戀の言葉をかけ始めた。すると丁度その時ライサンダが、ハアミアに後を追はれて、へと云ふのは、パツクの不幸な間違のために、今度は彼女が戀人の後を追ふ番になつたのだから、姿を現はした。そしてライサンダとデイミイトリアスが聲をそろへて、ヘリイナに言ひ寄つた。二人共同強い魔藥の効能が十分に現れて居たのだから。

ヘリイナはびつくりして、デイミイトリアスとライサンダと、かつてはその親しい友達であつたハアミアとが、みんなぐるになつて彼女を弄るのだと思つた。

ハアミアもヘリイナと同じ様に驚いた。彼女は、以前はどちらも自分を愛して居たライサンダとデイミイトリアスが、なぜ急にヘリイナの戀人になつたのやら分らなかつたし、又彼女には此の事件

は戯れには見えなかつた。

前にはこの上もなく親しい友達であつた此の二人の婦人は、今は喧嘩を始めたのである。

『不深切なハアミア。』とヘリイナは云つた。『あなたなんです、ライサンダに讃めるやうな事を云つて愚弄させ私にくやしい思をさせるのは。そしてあなたのも一人の戀人デイミトリアスが、私を足蹴りにせん許りにして居た人が、私を女神だのニンフだの、比類ないだの、大切なだの、天女だのと云ふのも、あなたの指圖なんでせう。あの人に私をなぶる様にあなたがさせないならば、憎いと思つて居る私にこんなものゝ云ひ方はしないでせう。男と一緒になつて、あなたの可哀相な友達をいぢめるなんて、不親切なハアミア。あなたはあの學校時代の仲のよかつた事を忘れたのですか。どんなに一つも私共二人は一つの腰掛に座り、二人の針で一つの花を縫ひ、同じ歌を二人で歌ひ乍ら、二人で一つの刺繡をした事です。一對の櫻の花のやうに生ひ立つて、殆んど離れる事なぞなさうに思へたではありませんか。それは友達らしい事ではありません。乙女らしい事ではありません。男と一緒になつて、あなたの可哀相な友達をいぢめるなんて。』

『あなたが怒つてお出でになるので私は驚いて居ます。』とハアミアが云つた。『私があなたをいぢめるのでは御座いません。あなたが私をいぢめていらつしやる様です。』

『いゝえ。いぢめるのです。』とヘリイナが答へた。『續けてなさい、眞面目なやうな顔をして、あちら

へ向いた時には妙な口付をして嘲弄なさい。そしてお互に目交せをして御慰みなさい。もしあなたに少しでも憐みがあり、優しさがあつたら、あなたは私にこんなしむけはしないでせうに。』

ヘリイナとハアミアが、かうした怒の言葉を交して居る間に、デイミトリアスとライサンダは二人の婦人を去つて、ヘリイナに對する戀のために決闘すべく森へ入つた。

二人の婦人は、二人の青年が、自分達の處に居なくなつたのに氣がつくと、彼女達も立別れて、その戀人達を探し乍ら再び森の中を逍遙ふた。

彼女達が行つて了ふと、すぐ妖精の王は、彼はパツクと共に、彼女達の喧嘩をきいて居たのであるが、パツクに向つて云つた。

『これは御前の不注意から起つた事なのだ。パツク。それとも故意にやつた事か。』

『たしかに、王様よ。』とパツクが答へた。『間違へたので御座います。あなたは、アシンズの服装でその男が分るとおつしやいませんでしたか。けれども私はかうした事が起つたのを残念とは思ひません。と云ふのは、彼等の口論をきいて居るとよい氣散じになると思ひますので。』

『お前もきいたらうが。』とオウバロンは云つた。『デイミトリアスとライサンダは決闘するのに都合のよい場處を探しに行つた。私はお前に濃い霧で夜を覆ひ、二人の喧嘩好きな戀人達を導いて暗闇の中

に迷はせ、相手を見つける事が出来ない様にする事を命ずる。彼等めい／＼に向つてその相手の聲を眞似、ひどく腹の立つやうな事を云つて、彼等がそれを戀敵の聲であると思ひ乍らお前について来る様にせよ。彼等が非常に疲れて、もう歩けないやうになる迄それを續けるのだ。そして彼等が眠つたのを見つけた時に、この別の花の汁をライサンダの眼に注げ。すれば、彼が眼を醒した時には、彼はヘリイナに對する新しい戀は忘れて、ハアミアに對するもとの情熱を快復するであらう。さうなると二人の美しい婦人達はめい／＼その愛する青年を得て幸福となり、これ迄に起つた事はみな、くやしい夢であつたと思ふやうになるであらう。早くとりかゝれ、パツク。私はこれから行つて、タイテイニアがどんなきれいな愛人を見つけたか見て來よう。』

タイテイニアはまだ眠つて居た。そして彼女の傍に、森で路に迷つて、同じく眠つて居る一人の下郎をオウバロンは見た。『この奴を』とオウバロンは云つた。『わがタイテイニアの眞の愛人にしてやらう。』そして下郎の頭の上に驢馬の頭を被らせたが、それは彼自らの肩から生じてでもゐるやうに彼によく似合つた。オウバロンは驢馬の頭を極く靜かに置いたのであるけれども、彼はそのため眼を醒し、立ち上つて、彼に對してオウバロンが爲した事には少しも氣附かず、妖精の妃が眠つて居る寢室の方へ行つた。

『あゝ！ 何と云ふ美しい人を私は見る事だらう。』とタイテイニアは眼を開いて云つた。小さな紫の

花の露が効果を顯はし始めたのである。『あなたは美しいと同じやうに智慧もあるんでせうね。』

『いや、御婦人。』と愚かな下郎は云つた。『私に森から出る路を見つめるだけの智慧があれば、便じなければならぬ用がうんとあるんです。』

『森から出ようなぞと思つてはいけません。』と戀にうつゝをぬかして居る妃は云つた。『私はたゞの妖精ではありません。私はあなたを愛します。私と一緒にいらつしやい。さうすれば、あなたに侍く妖精をさしあげませう。』

それから彼女は四人の妖精を召しよせた。その名は「豆の花」「蛛網」「蛾」「芥子の實」と云ふのであつた。

『この美しい方を歡待なさい。』と妃は云つた。『この方のお通りになる道で御踊りなさい。此の方に見えるところで跳ね廻りなさい。杏や葡萄を差しあげ、また蜜蜂のところから、蜜囊を盗んで來ておあげなさい。さあ私と一緒に御座りなさい。』と彼女は下郎に向つて云つた。『そして私に、あなたの毛の生えた可愛い頬を弄ばせて下さい。美しい驢馬さん。それからあなたの奇麗な大きな耳にキスさせて頂戴、私の可愛い方！』

『何處に「豆の花」は居るか。』妖精の妃の愛を求める言葉にはあまり注意を拂はず、新しく従者を得た事に、大變得意になつて、下郎は云つた。



『此處に居ります。』と小さな「豆の花」は云つた。

『私の頭をかいて下さい。』と下郎は云つた。『蛛網』は何處に居るか。』

『こゝに居ります。』と「蛛網」が云つた。

『「蛛網」さん、あそこのあざみの上にとまて居る熊蜂を殺して下さい。それから蜜囊をもつて来て下さいよ。取る時にあまりあせつてはいけないよ。』「蛛網」さん。それに蜜囊をこはさないやうに注意なさい。』「芥子の種」は何處に居るか。』

『此處に居ります。』と「芥子の種」が答へた。『御用は何で御座いませうか。』

『何もない。』「芥子の種」さん。』と下郎が云つた。『だが「豆の花」さんが頭を搔くのを手傳つて下さい。私は床屋に行かすばなるまい。』「芥子の種」さん、顔が毛だらけのやうに思ふから。』

『私のいゝ方。』と妃は云つた。『何を召上りますか。私は大膽な妖精に、栗鼠の蓄財を探させ、新しい胡桃をもつて來させませう。』

『私はそれよか乾いた豆を一握り貰ひたいものです。』と下郎が云つた。彼は驢馬の頭をつけられたので、驢馬の食慾を得たのである。『だが、どうぞ家來達に私の邪魔をさせないやうにして下さい、私は眠くなつて來たから。』

『それでは御休みなさい。』と妖精の妃は云つた。『そして私の腕にあなたを抱いてあげませう。まあ何

と可愛い事だらう！ 何といとしい事だらう！』

下郎が妃の腕に抱かれて眠つて居るのを、妖精王が見た時に、彼は彼女の見える處へ進み出で、無分別に驢馬などを愛して居ると云つて彼女を叱つた。下郎はその時、その驢馬の頭に妃がさしてやつた花をかざして、妃の腕に抱かれて眠つて居たので、彼女もそれを否定する譯には行かなかつた。

オウバロンは暫らく彼女を責めた後、拐かし子を再び要求したが、彼女は自分の夫に、新しい愛人と一緒に居るのを見つけられた事を恥ぢて居たので、それを拒絶する勇氣はなかつた。

オウバロンは、かやうにして長い間自分の小姓にしたいと望んで居た少年を得たので、自分の愉快な仕組で落し入れたタイテイニアの恥かしい立場を憐んで、他の花の汁を彼女の眼に注いでやつた。すると妖精の妃は直ちに正氣にかへり、これ迄の自分の惑溺に我乍ら驚き、その妙な怪物を見るのも實に胸が悪くなると云つた。

オウバロンは、下郎の頭からも亦驢馬の頭を取り去つてやり、肩の上に自分の愚かな頭をつけて眠つてゐるまゝにして置いた。

オウバロンとタイテイニアとは、今は立派に仲直りが出來たので、彼は彼女に戀人達の事や眞夜中の喧嘩の事などを物語つた。そして彼女は彼と共に、事件の結末を見に行く事に一致した。

妖精王とその妃は若者と婦人が、互にさう離れて居ない芝生の上に眠つて居るのを見出した。それ

はパツクが以前の失策の埋合せをするために、大變骨を折つて、彼等に氣付かれないやうに、うまく皆を同じ處に集めたのであつた。さうして、妖精王が彼に與へた魔藥を以て、用心深くライサンダの眼から愛の魔藥を取り去つたのであつた。

ハアミアがまづ眼を醒し、見失つたライサンダが自分のすぐ近くに寝て居るのをみ出し、彼を眺めながら、その不思議な無節操を驚いて居た。間もなくライサンダも眼をひらき、なつかしいハアミアを認め、妖精の魔藥でくらまされて居た理性を恢復して、こんどは正氣でハアミアを愛するやうになつた。そして二人はあゝした事が本當にあつたのであらうか、それとも二人とも同じ怖しい夢を見て居たのであらうかとあやしみ乍ら、その夜の出來事を話し始めた。

ヘリイナとデイミイトリアスは此時既に眼を醒して居た。そして心持のよい眠がヘリイナの亂れ怒つた氣持を静めて居たので、彼女は、デイミイトリアスが尙ほ彼女に語る愛の言葉によるこんで耳を傾けた。彼女が喜びまた驚いた事には、その言葉は眞實であるといふ事が分るやうになつた。

氣持のよい夜をさまよふ此の二人の婦人はもはや敵ではなく、再び元の親密な友達となつた。お互に云ひ合つた邪しまな言葉は水に流し、靜かに今の身の上をどうしたら一番よからうかと相談した。それは間もなく、デイミイトリアスがハアミアに對する結婚の要求を斷念したので、彼が盡力して、ハアミアに對して與へられた殘酷な死刑の宣告を取り消させるやうに、彼女の父を説得すべきだとい

ふ事に話がきまつた。デイミイトリアスがとりなしをするために、アシンズに歸らうと用意をして居ると、ハアミアの父、イーディアスの姿が見えたので彼等はびつくりした。彼は逃走した娘を探しに此の森にやつて來たのであつた。

イーディアスは、デイミイトリアスが自分の娘と結婚しないと知つた時、彼はもはや娘とライサンダとの結婚に反對しないで、その日から四日の後、即ちハアミアがその命を失ふ事に定まつて居た日に結婚式を擧げる事を承諾した。そしてヘリイナも同じ日に、彼女が愛して居り、今は眞實に彼女を愛して呉れるデイミイトリアスと結婚する事に、よろこんで話をきめた。

妖精の王と后とは、人の眼には見えないけれど、此の和解を見物して居り、そして今、妖精王の心盡しによつて戀人達の事件が幸福に結末のついたのを見て、大層愉快に感じたので、この親切な妖精達は、妖精王國を通じて遊戯をしたり盛宴を催したりして、近々に行はれる婚禮を祝はうときめた。

さて誰か、信じ難い不可思議なものであると判斷して、この妖精とその戯れとの話を快く思はない人があるならば、さう云ふ人は、眠つて夢を見、そしてすべてかうした出來事が、その夢の幻に現れたのだと思へばよいのである。して、如何なる讀者も奇麗な罪のない「眞夏の夜の夢」を相手に怒るものはないであらうと思ふ。

冬  
物  
語

シシリイの王リオンテイズと、美しくて貞淑の譽れ高い王妃ハアマイアニとは、かつては非常に仲よく暮らして居た。リオンテイズはかう云ふ立派な婦人の愛を得て此の上もなく幸福であつたので、満されない願ひとは何も無かつた。只折にふれての願ひは、昔馴染の學校友達で今はボヘミアの王となつてゐるポリクサニズに今一度逢つてみたい、そして王妃にも紹介してみたいといふ事だけであつたこのポリクサニズとリオンテイズは小さい時から一緒に育つたが、父王達の死去の爲め、夫々の王國を治めるため呼び戻され、それ以來長い間逢はなかつた。尤も二人は屢々贈物や、手紙や、親交の使節をとり交してゐた。

とうとうポリクサニズは、幾度も招かれた揚句、友人のリオンテイズを訪問するため、ボヘミアからシシリイの宮廷へやつて來た。

此の訪問はリオンテイズにとつて、最初のうちは唯楽しいこと許りであつた。王は王妃に、自分の幼な友達の世話を特別によくみて呉れるやうに頼み、王自身も、親愛な舊友を得て幸福の極に達したやうに見えた。二人は昔のことを話したり、學校時代の事や、子供の折の悪戯などを思ひ出し、いつも楽しさうに會話に加つてゐた王妃のハアマイアニに、それらの悉しい話をしてきかせた。

ポリクサニズは逗留も長くなつたので歸り支度を始めた。がハアマイアニは夫王の希望で、ポリクサニズにも少し逗留を延ばしてくれるやうにと夫のあとについて懇願した。

此の時から善良な王妃の悲しみが始まつた。それは、ポリクサニズがリオンテイズに逗留を勧められた時には辭退して置き乍ら、王妃にもう數週間出發を延ばしてくれと、優しく説きすめられた時には、其の願ひ通りになつたからであつた。そこで王は、友人ポリクサニズが正直で立派な人格の人であることも、貞淑な王妃の性質がすぐれて立派であることも、共々よく心得てはゐたが、どうする事も出來ない嫉妬心にとらはれてしまつた。ハアマイアニがポリクサニズに心遣ひを示すたび毎に、それは夫王の特別の希望によつて、また單にポリクサニズを喜ばすためにしたのであるが、この不幸な王の心の病ひを増すばかりであつた。そして今までは愛すべき信實な友達、愛すべき善良な夫であつたのに、急に野蠻人か残忍な悪魔のやうになつてしまつた。オリオンテイズは貴族の一人であるカミロを呼んで自分の疑念を打ちあけ、ポリクサニズを毒殺するやうに命令した。

カミロは善良な人間であつた、そしてリオンテイズの嫉妬は根も葉もないといふ事をよく知つてゐたので、ポリクサニズを毒害する代りに、主人のこの命令を王に打ち開けてしまつた、そして王と共にシシリアの領土を逃れることに賛成した。ポリクサニズはカミロの助を得て無事にボヘミアの王國に到着し、カミロは此の時からずつと王の朝廷に仕へて、ポリクサニズの大切な友人とも寵臣ともな

つた。

ポリクサニズの逃亡は嫉妬深いリオンテイズを激怒させた。王は妃の居間へ行つた、恰度王が這入つて来た時、王妃は小さな王子のマミラスと一緒に居て、マミラスは母親を喜ばせるために面白い話を始めようとしてゐた時であつたが、王は王子をつれて行つてしまい、ハアマイアニを牢に打ち込んだ。

マミラスは未だ小さな子供であつたけれども、母親を非常に愛してゐた。そして母親が眼の前で辱しめを受け、牢に入れられる爲め自分の側から伴れて行かれたのを知ると深く心を痛め、次第に食慾も睡眠も減つて、嘆きにくづ折れ、悲しみの爲めに命も危まれるほどになつた。

妃を牢屋へ送ると、王はシシリアの二人の貴族クリオミニズとダイオンに命じてデルフォスに行かせ、王妃が果して不貞であつたかどうかを、アポロの神の神託によつて訊ねるやうに吩咐けた。

ハアマイアニは牢に入れられて間もなく王女を生んだ。可哀さうな妃は、美しい赤ん坊を見てせめての慰めを得た、そして言つた。

『可哀さうにね、こんなに小さくて牢に入れられて。私もお前のやうに罪がないんだよ。』

ハアマイアニには、シシリアの貴族のアンティゴナスといふ人の妻で、心の美しいポウリナといふ親切な友達があつた。ポウリナ夫人は御妃様が産をされたと聞いて、ハアマイアニが閉ぢこめられて

ゐる牢屋へ行き、ハアマイアニに仕へてゐる侍女のエミリアに言つた。

『エミリアさんお願いですから御妃様にさう仰有つて下さいませ、御妃様が思ひ切つて小さな赤様を私に御預け遊ばせば、御父上の王様の御許に御伴れ申し上げます。罪のない赤様を御覽あそばせば王様の御心も和ぐかも知れませぬ。』

『お偉い奥様、奥様の御立派な御申出を御妃様へ御傳へ申し上げます。御妃様は今日も、赤様を思ひ切つて王様の許へ御伴れ下さるやうなお友達があつたらと仰有つて下さいました。』とエミリアは答へた。

『それから』とポウリナはつづけて、

『私は王様に、大膽に御妃様の辨護を申し上げるつもりでございますと仰有つて下さいませ。』

『御恵み深い王妃様への御親切に對して、奥様の御上に永遠に御恵みがありますやうに！』

エミリアはかう云つて、ハアマイアニの所へ行つた。王妃は誰も赤ん坊を父王の所へ伴れ行つて呉れさうでないのを心配してゐた所なので、大喜びでポウリナの心配に任せた。

ポウリナは生れた許りの赤ん坊を抱いて、夫が王様の怒を怖れて止めようとしたのを振り切り、無理に王に目通りをして、父王の足許に赤ん坊を置き、勇々しくもハアマイアニの辨護をし、また王の不人情を手厳しく責め、無實の罪に泣く王妃と王女とを憐みたまふやうにと懇願した。しかしポウリナ

の勇々しい抗議も唯リオンテイズの不快を増したばかりであつた。王はポウリナの夫アンテイゴナスに命じて彼の女を退けさせた。

ポウリナは退出するときに、王も一人になつて赤ん坊を見れば、きつと赤ん坊の罪のない頼りなさに同情されるだらうと思つて、小さな王女を王の足許に残して來た。

善良なポウリナは考へ違ひをした。彼女が退出すると直ぐに、無慈悲な父王は、ポウリナの夫アンテイゴナスに命じて、子供を海へ伴れ出して、何處か人知れぬ海岸に打ち捨てて死なせるやうに吩咐けた。

アンテイゴナスは人のいゝカミロと違つて早速リオンテイズの命令に従つた。直に赤ん坊を船にのせて海に漕ぎ出し、人の居ない海岸が見附かり次第、其處に打ち捨てて考へてあつた。

王はハアマイアニの罪を信じ切つてゐたので、デルフォスのアポロの神の神託を受けにやつたクリオミニズとデイオンの歸るのを待つ事もせず、また未だ十分に肥立ちもせず、その上大切な王女を失つた嘆きから回復もしない王妃をば、貴族、朝臣の居並ぶ前に伴れ出させて裁判を受けさせることにした。國中の貴族、裁判官、諸侯が、ハアマイアニを審くため集り、恰度この不幸な王妃がその審きを受ける爲め、臣下の前に囚人として立つたとき、クリオミニズとデイオンが此の集りの中に這入つて來て、封をしてあるアポロの神託の返事を王に差し出した。リオンテイズは、封を破つて神託を

讀み上げよと命じた、其の言葉はかうであつた——

『ハアマイアニは罪なし。ポリクサニズに咎むべきところなし。カミロは眞の臣下にして、リオンテイズは嫉妬深き暴君なり、若し失へるものにして見出されざらんか、王に繼嗣なし。』

王は神託を信じやうとしなかつた。其の神託は王妃の友人によつて作られた虚構であると云ひ、裁判官に王妃の審きを續けるやうに希望した。しかし王の言葉が終らぬうちに臣下の一人が這入つて來て、王子マミラスは、母君が生死の審きを受けられると聞いて恥と悲しみに打たれ突然死去したことを告げた。

ハアマイアニは、いとし吾が子が、わが身の不幸を嘆いて命終へたことを聞き氣絶した。流石にリオンテイズも此の報知には胸を突かれて、不幸な王妃を可哀さうに思ひ始め、ポウリナ及び其の他妃の侍女達に命じて王妃を伴れ去らしめ、蘇生の手當をするやうに吩咐けた。併しポウリナは直に戻つて來て、ハアマイアニもとうとう息絶えた事を告げた。

リオンテイズは王妃が亡くなつた事を聞いて、王妃に辛らくした事を後悔した。そして自分の虐待が王妃の心臓を破つた事を悟り、妃に罪のないことを信じた。そして今は神託の言葉にも偽りが無かつた事を知り、『失へるもの見出さるるにあらざらんか。』といふのは、小さな王女を指すものと思ひ、王子マミラスが死んだ今は世嗣もないことを悟つたのであつた。リオンテイズは失つた王女を取り戻

す爲めには、王國を與へても惜しくないと思つた。王は今後は悔にくれ、悲しい思ひ出と悔いの嘆きのうちに幾年かを過した。

アンティゴナスが赤坊の姫君を乗せて海に漕ぎ出した船は、嵐のために、かの善良なポリクサニズ王の王國であるボヘミアの海岸へ吹き寄せられた。アンティゴナスは此處に上陸して、小さな赤ん坊を置き去りにした。

しかしアンティゴナスは、姫君を何處に捨てたかといふ事をリオンテイズに告げに、シシリイに歸ることは決して出来なかつた。船に戻らうとするところを、突然森の中から一頭の熊が現はれ、八つ裂きにしてしまつたからであつた。それはリオンテイズのよこしまな命令に服従した彼にとつての正當な罰であつた。

赤ん坊は高價な衣服と寶石を身につけてゐた。それはハアマイアニが、赤ん坊をリオンテイズの許に差し出すとき美しく飾つてやつたからであつた。アンティゴナスは赤ん坊の外套の端に、パアデイトといふ名前を書いた紙片をピンでとめて置いた。此の言葉は暗に赤ん坊が高貴の生れであり、不運の者であるといふ事を示した。

此の可哀さうな捨兒は、ある羊飼に見附けられた。羊飼は親切な男だつたのでパアデイトを家に伴れて戻り、其の妻もやさしくこれを育てた。が羊飼は、自分が見附けた高價な獲物を貧乏ゆゑについ

／＼隠す氣になり、また何處から富を得たかといふ事を人に悟られぬ爲めに、これまで住み馴れた土地を移つて行つた。そしてパアデイトの寶石の半分で羊の群を買ひ求め、金持の羊飼になつた。羊飼はパアデイトを自分の本當の子供のやうにして育てたので、パアデイトも自分が羊飼の娘でないなどとは夢にも知らなかつた。

小さなパアデイトは次第に成長して可愛らしい娘になつた。羊飼の娘分として、それ以上の教育は何も受けなかつたけれども、高貴な母親から享けついで天稟の優雅さは、その教育を受けない心の中にも燦として輝いたので、其の舉動を見ただけならば、誰もこの娘が父親の宮殿で育てられなかつたものとは思はなかつたであらう。

ボヘミア王のポリクサニズにはフロリゼルと呼ぶ唯一人の王子があつた。此の若い王子が偶々羊飼の住居の近くで狩をしたとき、王子は老人の假の娘を見た。パアデイトの美しさ、しとやかさ、また女王のやうな其振舞ひは、一目見た許りで彼を戀に陥らせた。王子は直にドリクリズといふ名前のもとに一平民の紳士と化けて、この老人の羊飼の家をよく訪れるやうになつた。

フロリゼルが屢々宮殿をあけることはポリクサニズを非常に驚かせた、そこで臣下どもに王子の見張りをさせてみると、王子は美しい羊飼の娘と戀に陥つてゐることが分つた。

ポリクサニズは早速カミロを呼んだ。リオンテイズの激怒から自分の命を救つてくれたかの忠義な

カミロである。そしてバアデイタの父親だといふ羊飼の家に一緒に行つて呉れるやうに頼んだ。

ポリクサニズとカミロは姿を變へて羊飼の家を訪れた。恰度羊の毛を刈る祝宴が開かれてゐるところであつた。二人は見馴れぬ人間ではあつたけれども、羊の毛を刈る祝宴には誰でも歓迎される慣はしてあつたので、二人も這入つて祝宴に加るやうに招ぜられた。

家の中には歡樂と喜びが漲つてゐた。食卓は並べられ、田舎らしい御馳走の支度も仰山に出来てゐた。家の前の草原で踊りを踊つてゐる若者や娘達もあれば、戸口のところで行商人から、リボン、手袋、それ／＼の玩具などを求めてゐる若者達もあつた。

かう云ふ賑やかな光景の中で、フロリゼルとバアデイタはもの靜かな一隅に座つて、周囲の馬鹿騒ぎや、遊戯に加るよりも、かうして互に話し合つてゐるのがずつと楽しさうに見えた。

王は巧みに變装してゐたので王子自身にも分らない位であつた。それで王は二人の會話が聞きとれる所まで近づいた。バアデイタが王子と話してゐる様子は單純ではあるが非常に上品であつたので、ポリクサニズは尠からず驚いた。彼はカミロへ言つた。

『下々には珍らしい可愛い娘だ。爲ることなり云ふ事なり身分以上に立派で、こんな所には勿體なさ過ぎるほどだ。』

『實にこの娘は乳搾り女仲間の女王でございます。』とカミロも答へた。

『おい、お爺さん。』と王は老羊飼に話しかけた。

『あそこで御前さんの娘さんと話してゐる立派な若者は誰かね。』

『ドリクリズといふさうですが。』と羊飼は答へて、

『私の娘を大好きだと申して居ります。實のところ、どちらが餘計惚れてゐるかといふ事を云ふのは難しいですよ。若しあの若いドリクリズが娘を手に入れたら、それこそ思ひもかけぬものになり付きますがね。』

それはバアデイタの寶石の残りの事を指したのであつた。羊飼は半分の寶石で羊の群を買つた後で、残りの半分をバアデイタの持參金として大切にしまつて置いた。

ポリクサニズは次に自分の息子に話しかけた。

『やあ何うです、御若い方！ 御前さんの胸は何かで一杯で、御祭りどころではないやうですね。私が若い頃には好きな人に山ほど贈物をしたものですが、お前さんは行商人を歸してしまつて、好きな人に玩具も買つてやらないんですね。』

若い王子は、父親の王に話しかけるとは夢にも思はず答へた。

『御老人、彼の女はそんなつまらない物は少しも大切に思はないのです。バアデイタが欲しがつてゐる贈物は、私の胸の中にしまつて有るんです』と今度はバアデイタの方を向いて言つた。



『よく御訊き、パアデイク、此の年を召した紳士は戀人の經驗も御ありの様だから、此の方の前で私の云ふ事を訊いて戴かう。』

そしてフロリゼルは、この見知らぬ老人をパアデイクと交はした嚴かな結婚の約束の證人に要求して、ポリクサニズに向つて言つた。

『お願いですから私共の婚約をよく訊いて下さい。』

『若い方、御前さん達の離婚のことをよく訊きませう。』と王は自分の本當の姿を現はして言つた。それからポリクサニズは、パアデイクの事を「羊飼の餓鬼」だの「羊の鉤」だのと散々に悪口を云つてこんな卑しい生れの娘とよくも婚約したと王子を叱りつけた。また若しこれから二度と再び、おめおめと王子に逢ふやうな事があれば、娘も父親の老羊飼も共々鬮り殺しにしてやると脅かした。

王は非常に腹を立てて其處を立ち去り、カミロにフロリゼル王子を伴れて來るやうに命じた。

王が行つてしまふと、パアデイクはポリクサニズの罵言のために却つて氣高い性質を呼び起されて言つた。

『私達はもうすっかり駄目ですけど、私は大して恐れませぬの。私は一度ならず二度も王様に御話し申さうと思ひましたの、王様の宮殿を照らす同じ御日様は私達の小屋にも顔を御脊けにならず同じやうに照らして下さることを、はつきりと申し上げませうとね。』

それから娘は悲しさに續けた。

『私は今はすっかり夢から醒めましたわ。もう女王様の眞似なんか止めますわ。あなた、行つて下さいませ、私は羊の乳搾りに行つて、そして泣きませう。』

親切な心を持つてゐるカミロは、パアデイクのそぶりの生き生きとして禮義に適つてゐるのを見て感心した。それに若い王子はあまりに深い戀に陥つてゐるので、逆も父王の命令で此の婦人を諦らめる譯には行くまいと見てとつた。で、一策を案じて戀人達を庇ふことにし、また同時に心に秘めて置いた大切な計畫を實行することにした。

カミロはシンリア王のリオンテイズが心から後悔してゐるといふ事を、久しい以前に聞いてゐた。

カミロは今はポリクサニズ王の御氣に入りの友人ではあるが、矢張りも一度は先王にも逢ひ、生れた家にも歸りたいと願つてゐた。で彼はフロリゼルとパアデイクにシンリアの宮殿へ一緒に行かないかと誘つた。其處で彼は何とか骨折つてリオンテイズに二人を保護して貰ひ、其の仲介を得てポリクサニズの赦しも受け、結婚の承諾も得るやうにしてやるからと言つた。

二人は此の申出を喜んで受け入れた。カミロは逃亡に就いて萬端の支度をし、老羊飼も一緒に行くことを許した。

羊飼はパアデイクの残りの寶石や、赤ん坊の折の着物、外套に付けてあつた紙片に至るまで持つて

行つた。

フロリゼルとパアデイタ、カミロに老羊飼の此の四人は航海も愉快に終へて、無事にリオンテイズの宮殿に到着した。亡き王妃ハアマイアニと捨てた王女のことを今も尚ほ嘆き悲しんでゐたリオンテイズは、非常に喜んでカミロを迎へ、またフロリゼル王子を心から歓迎した。しかしフロリゼルが自分の妃だと云つて紹介したパアデイタほど、王の注意を惹いたものはなかつた。王はパアデイタが亡き王妃のハアマイアニそっくりなのを見て、今更に悲しみを新らしくし、自分があのやうに残酷に王女を亡きものと爲なかつたならば、今頃はこのやうな美しい女となつてゐたであらうにと言つた。それからフロリゼルに向つて、

『私はまた勇敢なあなたの父上の友情と交際を失ひましたぢや。今ではどうかしても一度御目にかかりたいものと思つて居ます。』

老羊飼は、王様が一方ならずパアデイタに注意を拂はれたといふ事と、亡くなつた王女は赤ん坊の折棄てられたといふ事を聞いて、小さなパアデイタを見附けた時のことを、其の棄てあつた時の様子や、寶石や、其他高貴の生れであるらしい證據などを考へ合せてみて、パアデイタは王の失くなられた姫君と正しく同一人であるといふ結論に容易に達したのであつた。

そこで老羊飼は、フロリゼル、パアデイタ、カミロ、また忠義なポウリナが揃つてゐる王様の前で

自分が赤ん坊を見附けた折の有様や、熊に襲はれたアンティゴナスの死を目撃した事情などを申し述べて、ハアマイアニが赤ん坊をくるんでやつたことをまだポウリナが覚えてゐる高價な外套や、ハアマイアニがパアデイタの頸のまわりに結へてやつたことを矢張り彼女が見覚えてゐる寶石などを出してみせた。また彼がとり出した紙片を見て、ポウリナはこれは夫の手蹟に違ひないと言つた。もはやパアデイタがリオンテイズの王女であることに疑ひの餘地はなかつた。しかし噫！ポウリナは夫が死んだ事を知つた悲しみと、長い間失はれてゐた王の嗣子の王女が見出されて神託が眞となつた嬉れしさとの境に立つて、どんなに尊い苦しみを覺えた事であらう。リオンテイズはパアデイタがわが子であるを知つたとき、母親が生きて居て娘を見ることが出来たらと深い悲しみに打たれ、長い間言葉さへ出さず、唯、

『あゝ御前の母親は、母親は！』と言つた切りであつた。

ポウリナはこの喜ばしいかも悲しい光景を遮つて王に、自分は最近、有名な伊太利の大家ジュリ、ロマノに塑像を造つて貰つたが、それは實に王妃生き寫しなので是非御覽に自分の家へ御出でを願ひたい、王様もきつとそれをハアマイアニ様と御覽になるだらうと言つた。仍で皆打ち揃うてポウリナの家へ出かけた。王はハアマイアニの肖像を見ようと熱望し、パアデイタは未だ見ぬ母親の面影を見ようと憧れた。

ポウリナがその有名な塑像を覆ふてゐる幕を引くと、それは全くハアマイアニ生き寫しであつたので、これを見ると王の悲しみは一時に湧いて長い間もの云ふ力も、動く力も無かつた。

『殿下、御無言の方がよろしうございます。』とポウリナは口を開いて、

『それだけ殿下は御驚き遊ばした事になりますから。この像は御妃様によく似て居りますでせう。』  
とうとう王は言つた。

『あゝ、私が初めて結婚を申込んだ時も、このやうな威嚴のある様子をして居た。しかしポウリナ、ハアマイアニは此の像のやうに老けては居なかつたが。』

『それでは尙ほ更ら彫刻家の技倆が優れてゐるわけで御座います。ハアマイアニ様が今まで生きて御出で遊ばしたら、かうもあらうかと造つたので御座いますから。ですがもう幕を引きませう。直に像が動くなどと思召しては不可せんから。』とポウリナは言つた。

すると王は言つた。

『幕を引いては不可ない！ 私は死んでしまいたいなあ！ 御覽カミロ、像が息をしてゐるやうには見えないか。それに眼が動いてゐるやうに見える。』

『殿下、幕を御引き致します。殿下はあまり興奮して御出で遊ばすので、像が生きてゐるなどと御思ひ遊ばすかも知れません。』とポウリナは答へた。

『おゝ親切なポウリナ、此の上二十年間許り私にさう思はせて貰ひたい。それにどうやら像の方から微風が来るやうだ。どんな巧妙な鑿でも呼吸まで刻むことは出来まい。笑つてくれるな、自分は接吻をするから。』

『どうか殿下、御止め遊ばせ！ 唇の赤色はまだ濡れてゐます。殿下の御唇は油繪具で汚れてしまいます。幕を御引き致しませうか。』

『いや、いやこれから二十年間は引いては不可ない。』

パアデイタは此の間、跪いたまま凝と比類ない母の像を尊敬の念を以て眺めてゐたが、  
『なつかしい母上様を眺めて、いつ迄も此處にかうして居たうございますわ。』と言つた。

『御感動を御止め遊ばすか、私に幕を引かせるかさして下さいませ。で御座いませんともつと吃驚遊ばすことが起りますが、それを御承知でございましたら、私は像を動かすことが出来ます。はい、あの臺を降りて御手を執らせる事が出来ます。ですが私が何か魔法でも使ふやうに御考へ遊ばすでございませうが、決してさうではないと申し上げて置きます。』

王は非常に驚いて、

『御前がするままの事を喜んで見よう。像に口をきかせる事が出来れば、喜んできかう。口をきかせる事も動かせると同じ位の難しさだらうから。』

そこでポウリナは豫め用意して置いた靜かな、嚴肅な音楽を奏するやうに命じた。其の時一同が非常に驚いた事には、立像が臺を降りて来て其の兩腕をリオンテイズの頸にかけた。像は徐ろに口を開いて夫の上と今度見附けられたわが子のパアデイタの上に祝福あらんことを祈つた。

像がリオンテイズの頸に手をかけ、其の夫と子供を祝福したのに別に不思議はなかつた。不思議はない筈である。これこそ眞實の生きた王妃ハアマイアニ自身であつた。

ポウリナは王妃の命を助ける手段は此の他にないと思つたので、王へはハアマイアニが死んだといふ偽りの報告をして置いたのであつた。それ以來ハアマイアニはずつと親切なポウリナと共に住み、パアデイタが見出されたといふ事をきくまでは決して王に生きてゐる事を知らせようとしなかつた。リオンテイズが彼女に與へた迫害は、遠い昔既に許してゐたけれども、幼い王女にした殘酷さは許すことが出来なかつた。

このやうにして死んだ王妃は生き返り、失くなつた娘は見出されたので、長い悲嘆に沈んでゐたりオンテイズは、あまりの幸福さに耐へがたい程であつた。

あらゆる方面にきかれるものは、祝賀と愛にみちた言葉許りであつた。喜びに満ちた兩親は、卑しく育つた娘を愛してくれたフロリゼル王子に感謝し、また自分達の子供を育ててくれた親切な老羊飼に祝福を與へた。カミロとポウリナは長き生きをして、自分達がした忠義の結果がこのやうな好い實を

結んだ事を見て非常に喜んだ。

恰度此の時、この不思議な、思ひも寄らぬ喜びを、全く申し分のないやうにするには打つてつけといふやうに、ポリクサニズ王自身が宮殿へやつて來た。

ポリクサニズは、最初王子とカミロの姿が見えないのに氣が附くと、兼々カミロがシンリイへ戻りたいと願つてゐた事を思ひ出し、逃亡者はきつとシンリイに行つてゐるに違ひないと推察した。王は全速力で後を追ひ、たま／＼リオンテイズの生涯の中で最も幸福な場合に到着したわけであつた。

ポリクサニズも共々に喜んだ。彼はリオンテイズから受けた不當の嫉妬を許し、も一度昔の子供時代の友情のやうな暖かさに返つて相親んだ。彼は最早、息子とパアデイタの結婚に反對する譯がなかつた。パアデイタは今ももう「羊の鈎」でもなく、シンリイ王家の繼嗣であつた。

このやうにして長い間堪へ忍んで來たハアマイアニの徳は報ひられた。この立派な王妃はリオンテイズやパアデイタと共に、最も幸福なる母、最も幸福なる女王として長く生きた。

から騒ぎ

メシナの邸宅に、ヒアロとピアトリスといふ二人の令嬢が住んでゐた。ヒアロはメシナの太守レオナトの令嬢で、ピアトリスは其の姪であつた。

ピアトリスは活潑な性質の女で、どちらかと云へば眞面目な性格の従妹ヒアロを、面白い洒落など云つて楽しませるのが好きであつた。氣輕なピアトリスにとつては、どんな事が起つても、それは屹度愉快の種になつた。

恰度此の二令嬢の物語が始まる頃、軍隊で身分の高い青年達が、終つたばかりの戦争の歸り途にメシナを通りかかり、レオナトを訪問に立ち寄つた。青年達は此の戦争で大いに武名を擧げた。此の中には、アラゴンの王子ドン・ペドロや、其の友人でフロウレンスの貴族であるクロウディオ、またパデユアの貴族でベネディックといふ亂暴な、頓智のある青年も交つてゐた。

此の青年達は以前メシナに來た事があり、古い知己だつたので、太守は懇ろにもてなして娘や姪にも紹介した。

ベネディックは部屋に這入ると直ぐに、レオナトや王子と盛んに話し出した。どんな會話にも仲間はずれにされるのを好まなかつたピアトリスは、ベネディックを遮つて言つた。

『ベネディック様、あなたは未だ御喋りになる御つもり— どなたも聞いてゐる方は御座いませぬよ。』

ベネディックも恰度ピアトリスと同じやうなお喋りであつたけれども、此の無遠慮な挨拶は氣に入らなかつた。そしてこんな輕卒な言葉遣は育ちの良い令嬢にはふさはしくないと思つた。彼は又此の前メシナにやつて來た時も、ピアトリスがいつも自分にはかり冗談をしかけた事を思ひ出した。自分ではどん／＼冗談を云ふやうな人間に限つて、人に揶揄はれる事を嫌がるものであるが、ベネディックとピアトリスの場合も正にさうであつた。此の二人の鋭い皮肉屋は、いつも當り前の逢ひ方をした事がなく、逢へば必らず揶揄戦をとり交はしたので、いつも氣拙い思ひをして別れるのであつた。でピアトリスが、貴方の話を聞いてゐるものは誰もありませんよと談話の腰を折つたとき、ベネディックは態と今までピアトリスが其處に居たのに氣が附かなかつたふりをして、

『何ですつて、輕蔑屋さんの御嬢さん。あなたは未だ生きてゐらしたのですか。』と言つた。忽ち戦争が二人の間に開始された。長い騒々しい議論に花が咲き、其の間にピアトリスは、ベネディックが今度の戦争に武勳を表はした事は知つてゐたけれども、あなたが戦争で殺しなすつた人間位なら皆食べまして見せませうと言つた。それから王子がベネディックの話を喜んで聞いてゐられるのを見て、ピアトリスは彼の事を『王子様の道化役』とまで言つた。此の皮肉は、ピアトリスがこれ迄云つた

どの言葉よりもベネディツクの心にひどくこたへた。前に戦争で殺した人間位なら食べて見せませうと云つて、暗に臆病者である事を仄めかされた時にも、自分は勇敢であるといふ事を知つてゐたので少しも氣に留めなかつた。が此の大皮肉屋にとつて道化役と罵られた事ほど腹の立つものはなかつた。皮肉は時として、あまりに眞實に近くやつて来るものである。仍でベネディツクは『王子様の道化役』と云はれた時、ピアトリスが憎くてたまらなかつた。

謙遜な令嬢のヒアロは、高貴な來客の前では唯黙つてゐた。此の間、クロウディオは、暫く見ぬ間に令嬢が非常に美しくなつたのに氣が注いで、其の姿の優れて美しく上品な事を凝と味つてゐ、(實に見惚れるやうに美しい令嬢であつた)王子はベネディツクとピアトリスの皮肉な會話を非常に面白がつて聞いてゐた、そしてレオナトへ密つと囁いた。

『快活な氣象の令嬢ですね、ベネディツクにはもつて來いの妻君でせう。』

かう云はれてレオナトは答へた。

『いやいや殿下、結婚して一週間も経たぬうちに、二人は喋言つて氣狂ひになつてしまふでせう。』

しかし王子は、假令レオナトが釣合ぬ夫婦と考へても、此の二人の鋭い皮肉屋を一緒にしてみる考を捨てなかつた。

王子はレオナトの邸からクロウディオと歸つて來て、自分がベネディツクとピアトリスとを結び付

けやうかと考へたやうな事は、あの面白い仲間でも更にも一つ考へられてゐたのであるといふ事を知つた。と云ふのは、クロウディオが、自分の心の思ひを王子に氣取られるやうな言葉で、頻りとヒアロの事を話したからであつた。王子はそれが氣に入つたのでクロウディオに言つた。

『君はヒアロが好きなんですね。』

此の質問にクロウディオはかう答へた。

『あゝ殿下、此の前メシナへ参りました時は、唯あの人を、好きではあるが戀する餘裕はないと云つた軍人氣質の眼で見ましたが、今度は世の中も幸福な平和に立ち返りましたので、戦争の考もなくなり、其の空いた場所へ優しい、情け心がどつと湧いて、若いヒアロがどんなに美しいか、自分は戦争に行く前から愛して居たのではないかと頻りに吹き込むのです。』

クロウディオのヒアロに對する此の戀の告白は、直に王子をして、レオナトにクロウディオを婿にして呉れないかと頼ませる事になつた。レオナトは王の申出を承知した。それに高い教養のある稀なる天才貴族の立派なクロウディオの申込みに、優しいヒアロを説きふせて承諾させる事は別に難しい事でもなかつた。で、クロウディオは親切な王子の助力を得て、ヒアロとの婚禮の祝ひを出来る丈け早く擧げることにとり定めた。

クロウディオは美しい令嬢と結婚する迄に數日待たなければならなかつた。彼は此の間が長いと云

つて不平をこぼした。實際青年といふ者は、何事によらず熱中した事件が終るまではもどかしいものである。それ故王子は此の間を短く過ぎさせる爲めに愉快的暇潰しとして、ベネディックとピアトリスが互に戀に陥るやうな計畫を立てようではないかと言ひ出した。クロウディオは大満足で此の王子の思ひつきに賛成し、レオナトも助力を與へようと約束し、ヒアロさへもが従妹に良い夫を取り持つことなら應分の助力をしてもいゝと言つた。

王子が思ひ付いた計畫といふのは、男子連はベネディックにピアトリスが彼を戀してゐると信じさせ、ヒアロはピアトリスに、ベネディックが彼女を戀してゐると思はせるやうにする事であつた。

王子とレオナト、及びクロウディオの三人が先づ實行に取りかかつた。好機を狙つてゐた王子と手傳人は、ある時ベネディックが四阿で靜かに讀書してゐるのを見附けて、ベネディックに嫌でも話聲が聞える程近く四阿の後の木立の中に座を占めた。種々と無駄話をした後で王子が言ひ出した。

『ね、レオナトさん、先日の御話は何でしたつけね——あなたの姪のピアトリスがベネディックを思つてゐるとか云つた。私はあんな婦人が男を戀するなどとは思ひも寄りませんでしたね。』

『さうです、殿下、全く左様なので御座います。表面では非常に嫌つてゐるとしか見えないあのベネディックを戀してゐるなどは、實に不思議でなりません。』とレオナトが答へた。クロウディオもこれを承認して、ヒアロから聞いたところに依れば、ピアトリスはベネディックを深く／＼愛してゐる

ので、若し彼に愛されないやうな事になれば、彼女は悶死してしまふであらうと話した。しかしレオナトとクロウディオの意見によれば、ベネディックは兼々婦人の痛罵者であり、殊にピアトリスに對してさうであるので、これは逆も不可能の事らしいと言つた。

王子はこの話を、さもピアトリスに同情して聞いてゐるやうに見せかけて言つた。

『ベネディックに此の事を話してやつた方が良くはないだらうか。』

『何う云ふ目的でございませう。あの男はそれを冗談の種にして、猶更ひどくあの可哀さうな令嬢を苦しめる事でせう』とクロウディオが言つた。

『若しそんな事をすれば、あの男の首を絞めてやつてもいゝのだ。ピアトリスは非常に可愛い令嬢だし、ベネディックに戀してゐる事一つを除けば、實に利口な婦人だからね。』

王子はかう言つて、合圖をして助手連を行かせ、今洩れ聞いた事を熟考させる爲めにベネディック一人を残して立ち去つた。

ベネディックは此の話を非常に熱心に聞いたのであつた。そしてピアトリスが自分を愛してゐると聞いた時思はず獨り言した。

『そんな事が有らうか。風向きがかうなつたのか知ら。』

一同が行つてしまつた後で、彼はこんな風に考へ始めた。



『これは別に計畫があつての事ではあるまい。非常に皆は眞面目だつたし、ヒアロから本當の事を聞いても居る。それに令嬢に同情してゐるやうだつた。自分を愛するつて！それは報ひられなければならぬではないか。自分は結婚しよう等とは思ひも寄らなかつた。獨身者で死にたいものだと言つた時も、結婚するやうになる等とは思はなかつた。皆はあの令嬢は貞淑で美しいと言つてゐる。それやさうだ。それに自分を戀する事を除けば仲々利口な女だ。それだつて大して彼の女の愚かさの證據にはならない。おやピアトリスがやつて来るぞ。今日は仲々素敵な令嬢だ。何か戀してゐる印があるかどうか見付けてやらう。』

ピアトリスは近づく、いつもの鋭い調子で言つた。

『御飯に入らつしやいませつて、厭ですが御呼びしにまゐりました。』

ベネディツクはこれ迄にないほど丁寧な言葉で答へる氣になつて言つた。

『美しいピアトリスさん、御苦勞様でございます。』

ピアトリスは尙も二言三言亂暴な言葉を残して立ち去つたが、ベネディツクは、彼女が言つた不法な言葉の裏に、親切な心持の隠されてゐるのを見てとつたと思つた。彼は口に出して言つた。

『あの女に同情を示してやらなければ自分は悪人だ。あの女を愛してやらねば自分は猶太人だ。あの女の繪姿を貰つて来よう。』

このやうにして紳士は擴げられた網の中にまんまとかかつたので、今度はヒアロがピアトリスに對してその役目を演ずる番になつた。そこで此の目的のために二人の侍女のアーシユラとマアガレットを呼んで、マアガレットに言ひ付けた。

『マアガレットや、お前客間へ行つて来て頂戴。ピアトリスさんが王子様やクロウディオと話をしてゐるでせうから。そしてね密つとさう言ふんですよ。今私とアーシユラが果樹園を歩いて居て、あなたの噂さで持ちきりですと。そしてね、日の光で熱れた忍冬が恩知らずの愛玩物のやうに太陽の光を遮つてゐるあの氣持のいゝ四阿まで伴れ出して来て頂戴。』

ヒアロが今マアガレットに、ピアトリスを伴れ出すやうに命じた四阿は、つい此の間ベネディツクが熱心に耳傾けたあの同じ氣持のいゝ四阿であつた。

『間違ひなく直に御伴れ致します。』とマアガレットは答へた。

ヒアロはアーシユラを果樹園へ伴つて行つて言つた。

『でね、アーシユラ、ピアトリスさんが来たたら私達は此の小路をあちこちと歩いて、ベネディツクさんの事許り話すんですよ。そして私があの方の事を言つたら、御前の役目はあの方をこれまでどんな男の人も賞められた事のない程褒めなければならぬのよ。私はお前に、ベネディツクさんがどんなにピアトリスを愛してゐるかと言ふ事を話すからね。さあ始めませう。ピアトリスがまるでなべげり

のやうにして、私達の話を聞きに地面の上を飛んで来るのが見えるから。』

二人は話を始めた。ヒアロはアーシユラが言つた事に答へる風で、

『え、全くだよ、アーシユラ。ピアトリスさんはあまり横柄すぎるのよ。それでゐて心持は岩に住んでゐる鳥のやうに内氣なのよ。』と言つた。

『ですが御嬢様。』とアーシユラは、

『ベネデイツク様がピアトリス様を心から戀して御出でになるつて本當で御座いませうか。』

『王子様もさう仰有るし、それからクロウディオもさう云ふのよ。そして私に其の事をピアトリスに知らせよと云ふんだけど、私はさう云つて上げたわ、若し貴方がたがベネデイツクさんを大切に居らつしやるのなら、ピアトリスさんには知らせない方が良うございますつてね。』

『全くでございますわ。』とアーシユラも合槌を打つて、

『ピアトリス様はあの方の戀を御存知にならない方が良うございますわ、それを冗談の種になさるかも知れませんから。』

『本當の事を云へばね、私はベネデイツクさん程賢くて上品で、若くて綺麗な方もないものと思ふけどもね、矢張ピアトリスさんは悪く言ふでせう。』

『左様でございますとも。そんなあら探しは褒めたものでは御座いません。』とアーシユラが言つた。

『さうよ。でも誰が思ひ切つてピアトリスさんにこの事を云ふものですか。若し私でも言はうものなら大馬鹿にされてしまふわ。』

『それは御従妹様に對してあまり酷うございます。いくらピアトリス様でも、あんな御立派な紳士のベネデイツク様の御申込を拒絶なさる程、判断力に乏しい御方とも思へませんわ。』

『ベネデイツクさんはそれは、名聲のある方よ。』とヒアロは續けて、

『私のあのクロウディオは別として、伊太利でも第一流の方よ。』

それからヒアロは會話を一變するやうに。侍女に合圖したので、アーシユラは言つた。

『して御嬢様、あなたの御結婚は何時でございますの。』

ヒアロは、明日クロウディオと結婚することになつてゐるので、明日どの着物を着るかといふ事を相談したいから、新調の着物を見に一緒に來て呉れないかと言つた。これまでの會話を息を凝らして聞いてゐたピアトリスは、二人が行つてしまふと叫んだ。

『何て耳があついでらう！ 本當か知ら。輕蔑と嘲笑よ、さよなら、處女の誇よ、さらば。ベネデイツクよ愛し續けて下さい！ 貴方の愛の手に私の荒々しい心を和けて、貴方の愛に報ひませう。』

二人が今までの敵から急に變つて愛する友人になつたのを見るのは、また氣輕な王子の面白い策畧に欺されて互に愛するやうになつてから初めて出會つたところを見ることは、實に愉快な光景であつ

たに違ひない。しかし今はヒアロの悲しい運命の逆轉を記さねばならぬ。明日は婚禮だと云ふ其の日ヒアロと善良な父親レオナトの心に悲しみが湧いて起つた。

王子には一人の異母弟があり、矢張り戦争の歸り途、王子と共にメシナに来てゐた。此の弟の名はドン・ジョンと云つて、憂鬱な不平家で、其の精神はいつも悪事をたくらむ事に燃えてゐるやうに見える。彼は兄の王子を憎んでゐたので、其の親友であるといふ理由からクロウディオをも憎み、單にクロウディオと王子とを不幸に陥れて喜ばうと云ふ悪魔の心から、ヒアロとクロウディオの結婚を邪魔しようとした。それは此の結婚に對して、王子はクロウディオと同じやうに熱心になつてゐるのを知つてゐたからであつた。此の目的を果すために彼は自分と同じやうな悪人、ボラチオといふ男を莫大な報酬をやる約束で雇ひ入れた。此のボラチオはヒアロの侍女であるマアガレットに求婚をしてゐた。此の事を知つてゐたドン・ジョンは彼を説きつけて、其の夜、ヒアロが眠りに就いてから女に、令嬢の部屋の窓から話しかける事を約束させた。尙ほクロウディオに女をヒアロとよくよく思ひ込ませるやうにヒアロの着物を着て出るやうに吩咐けた。彼が此の悪巧みによつてなさうとした目的は實に此の事であつた。

ドン・ジョンは王子とクロウディオの所へ行つて、ヒアロは實に慎みのない令嬢だ。眞夜中に自分の部屋の窓から男と話してゐると言つた。しかもこれは婚禮の前の晩のことであつた、そしてドン・ジ

ョンは、自分と一緒にヒアロが部屋の窓から男と話してゐる所を見に行かないかと申し出た。すると王子とクロウディオは行く事に賛成して、クロウディオが言つた。

『若し私が今晚、結婚しては不可ないやうな理由を見付けたなら、明日婚禮を擧げる筈になつてゐる教會で、あの女に恥を搔かしてやらう。』

王子も亦言つた。

『私もあの女の事では骨を折たんだから、一緒になつて恥を搔かして遣らう。』

其の夜、ドン・ジョンが二人を案内してヒアロの部屋の近くにやつて來た時、ボラチオが窓の下に立つて居り、マアガレットが窓から身をのぞかせて、ボラチオと話してゐるのが見えた。マアガレットは、一同もよく見覚えのあるヒアロの着物を着てゐたので、王子とクロウディオは、これはてつきり令嬢のヒアロだと思ひ込んだ。

これを發見した(と思つたのであるが)時のクロウディオの怒は譬ふるものもなかつた。無邪氣なヒアロに對する彼の愛は忽ち憎しみと變り、明日は其の言葉通り、教會で彼の女の事をあばいてやらうと決心した。王子もこれには賛成であつた。明日は貴族のクロウディオと結婚しようとする其の前夜、部屋の窓から男と話すやうな不都合な令嬢はどれ程懲らしても足りないかと考へたからであつた。

翌日一同は婚禮を祝ふために集り、クロウディオとヒアロは牧師の前に立ち、牧師即ち教團僧は正

に婚禮の儀式に着手しようとした時、クロウディオは突然非常に興奮した口調で、罪のないヒアロの罪をのべ立てた。ヒアロは餘りの言葉に面食つて只優しく言つた。

『まあそんな亂暴なことを仰有つて、お気分でも悪いのぢや御座いませんか。』

父親のレオナトは極度の恐怖に囚はれて王子の方を向き、

『殿下、なぜ何とも仰有つて下さりませぬ。』と言つた。

『何と云へばいゝのです。私は愛する友を償のない婦人に結び付けようとして、面目を失いました。』

レオナトさん、名譽に誓つて申すが、私自身と弟と此の嘆きに沈んでゐるクロウディオとは、昨夜令嬢が其の部屋の窓から男と話してゐるのを確かに見届けたのです。』と王子は答へた。

これを聞いてベネデイックは吃驚して言つた。

『これは婚禮どころではない。』

『本當に、おゝ神様！』とヒアロは心も破れて叫び、哀れにも死んだやうになつてどつと倒れ、氣絶した。王子とクロウディオはヒアロが蘇生するかどうか見極めもせず、また自分達が陥し入れたレオナトの困惑を見向きもせず、教會を退出してしまつた。怒は二人をそれ程無情にしたのであつた。

ベネデイックは後に止りピアトリスを助けて、ヒアロの氣絶を介抱した。

『令嬢は何うだらう。』

と彼は言つた。

『死んだのかも知れませぬわ。』とピアトリスは、従妹を非常に愛してゐたので悲歎にくれ乍ら答へた。それに従妹の立派な性質もよく知つてゐたので、彼女を非難する言葉には耳もかさなかつた。しかし哀れな老いた父親はさうでは無かつた。彼は娘の不しだらを信じた。もういつそ生き返つて呉れなければいゝと、死んだやうになつて倒れてゐる娘の前で掻きくどく様は憐れであつた。

しかし老牧師は人間の性質も種々で見極めてゐる賢い人であつた。彼は令嬢が誹謗されたとき注意深く令嬢の顔を見た。初め羞恥の紅がパツとさし、次で天使のやうな白さが紅味を消した、そして其の眼には王子が處女の眞實を疑つた誤解が間違つてゐることを示す焰が燃えてゐるのを見たので、牧師は歎きに沈んでゐる父親に言つた。

『ここに倒れてゐる令嬢は、何か激しい誤解のために無實の罪を蒙つた御出でのものと見るが、若しさうでないのなら私を馬鹿と云つても、又は私の目、觀察を御信じにならなくとも宜しい。私の年齢も牧師の尊敬も、牧師といふ職業を御信じにならなくともいゝのです。』

ヒアロが漸く息を吹き返したとき、牧師はヒアロに向つて、

『令嬢、あなたが疑はれてお出でになる男とは誰ですか。』と訊ねた。

『皆さんは御存じで疑はれるのでせうけど、私は何も存じませぬ。』と彼女は答へて父親の方を向き、

『お、御父様、私が時ならぬ時分に男の方と話したり、また昨夜誰とでも話を交したやうな證據が御座いますなら、どうぞ私を捨て、憎み、死ぬほど苦しめて下さい、』と言つた。

『王子とクロオディオは何か妙な誤解をしてゐるに違ひない。』と牧師は言つて、それからレオナトに相談して、ヒアロは死んでしまつた事にして報告させる事にした、恰度二人はヒアロが死んだやうになつた倒れて居た時行つてしまつたので、それを容易に信じるだらうと言つた。牧師はレオナトに勸めて、彼に喪服をつけるやう、また令嬢のため記念碑を立て、埋葬の儀式は残らず舉行するやうにと申し添へた。

『するとこれは何う云ふ結果になりませう。何の爲めにさうするのですか。』とレオナトは訊ねた。

『令嬢が死んだといふ報告は悪意を憐憫に變へるでせう。それも結構な事ではあるが、私が望んでゐる事はそれ許りではないのです。クロオディオが、令嬢は自分の言葉の爲めに死なれたのだと聞いたならば、彼の女の生前の面影が彼の思ひの中に、徐々と楽しく忍びこんで行くでせう。かつて彼の中に本當の愛があつたのなら、假令自分の非難は正しいと考へてもあれ程までに責めなければよかつたと歎くでせう。』

そこでベネディツクも口を開いて、

『レオナトさん、牧師さんの仰有る通りになさい。貴方も御存じのやうに私は王子とクロオディオを

非常に愛して居りますけれど、此の秘密は誓つて洩らしませぬから。』

レオナトはこのやうに説かれたのでとうとう承知して、悲しさうに言つた。

『私は悲しくてたまりませんので、どんな事にも従ひませう。』

親切な牧師はレオナトとヒアロを慰める爲めに伴れて行つてしまつたので、後にはピアトリスとベネディツクだけ残つた。此の二人切りの會合は、面白い計畫を立てた友人達に楽しみにされて居たものであるが、今はもう此の友人は苦惱に壓倒されてしまつてゐたので、楽しみ考へなどは其の心から永久に消え失せたやうに見えた。

ベネディツクが先づ口を切つて言つた。

『ピアトリスさん、貴女はずつと泣いてゐられたのですね。』

『え、私もつと泣きますわ。』

『全くですね。私も貴方の美しい従妹はきつと何か酷い目に逢つてゐるのだと思ひます。』

『あゝ、ヒアロの罪を晴らして呉れる人があつたら、私は其の人にどんなに御禮をするでせう！』

『そのやうな友情を示す方法がありませんか。私は此の世であなた程愛してゐるものはありません。妙ちやありませんか。』

『それは出来ることですわ。私だつて、此の世に貴方ほど愛してゐるものはありませんわ。でも信じないで頂戴、ですが虚言を言つてゐるのでありませんよ。私別に白状もしないし、それかと云つて何も否定しないのよ。私は従妹が氣の毒でたまらないの。』

『私の劍に誓つて言ひます。貴女は私を愛してゐるし私も貴方を愛してゐると云ひます。さあ、貴女の爲めなら何でもします故言つて下さい。』

『クロオディオを殺して下さい。』

『えッー それ許りは廣い世界を貰つても出来ません。』とベネディツクは答へた。それは友人のクロウディオを愛してゐたし、また彼が何か欺かれてゐる事を信じてゐたからであつた。

『私の従妹を譏り罵り、辱かしたクロウディオは悪人ではありませんか。』とピアトリスは續けて『あゝ私が男だつたら！』

『まあ御聞きなさい、ピアトリス』とベネディツクは言つたが、ピアトリスはクロウディオを辯護するやうな言葉は少しも聞かうとしなかつた。そして頻りにベネディツクを促して、従妹の不當の罪の復讐をしてくれと言つた。

『窓から男の人と話したつて、ふん馬鹿な云ひ草だ！ 可愛いヒアロ！ あの人は酷い目に逢つてゐるのだけ。悪口を言はれ、人柄を踏み潰されてゐるのだけ。あゝ私はクロウディオの爲めに男であり

たかつたわ！ 私の爲めに男となつて呉れるやうな友人がありたかつたわ！ 勇氣は禮儀作法に變つてしまつたのだけ。私は希望をもつ男になれないんだから、悲しみを持つ女として死にませう。』

『御待ちなさいピアトリスさん。此の手に誓つて私は貴女を愛します。』

『私を愛して下さるなら、誓つたりなどなさる事より他の事に其の手を使つて下さい。』

『あなたは心からヒアロはクロウディオの爲めに酷い目に逢はされたと御考へですか。』とベネディツクは念を押した。

『さうですとも。私に考や魂があるのと同じやうに確かですわ。』

『それで十分です。私は引き受けました。私はあの男と決闘をさせよう。貴女の手に接吻して、それではまゐりませう。此の手で以てクロウディオに高い價を拂はせてやります。私から便りがあつたら私の事を思つて下さい。さあ行つて貴女の従妹を慰めて上げなさい。』

こんな風にピアトリスが心をこめてベネディツクを説き、荒々しい言葉の強さで彼の勇敢な性質を動かして、ヒアロの味方をするやうに、そして親友のクロウディオとさへも戦はせるやうにつとめてゐる時分、レオナトの方では、王子とクロウディオに向つて、娘に加へた損害の爲めに劍を以て答へよと決闘を申込んでゐた。そして娘は悲嘆の爲めに死んでしまつたと斷言した。しかし王子とクロウディオはレオナトの年齢と悲嘆とを尊敬して言つた。

『御老人どうか我々と喧嘩することは止めて下さい。』

そこへベネディックがやつて来て、クロウディオに、彼がヒアロに加へた非行を劍を以て償へと決闘を申し出た。

『これはピアトリスが唆かしたのだわい。』と王子とクロウディオは言ひ合つた。しかし若し此の瞬間に、決闘などと云ふ不確かな運定めよりも、ヒアロの無實を證するに更によい證據が神の審きによつてもたらされなかつたならば、クロウディオは此の決闘の申出を受けなければならなかつた。

王子とクロウディオが尙ほもベネディックの決闘の事に就いて話し合つてゐる時、奉行が王子の前にボラチオを囚人として伴れて来た。ボラチオはドン・ジョンに雇はれて悪戯をやつた事を仲間の一人に話してゐたのを聞かれてしまつたのである。

ボラチオはクロウディオも聞いてゐる前で、王子に遂一白状した。そして窓から自分に話しかけた女は令嬢の着物を着てゐたマアガレットであること、彼等は其の女をヒアロと間違へたこと等を話した。最早クロウディオも王子もヒアロの無實を疑ふ余地はなかつた。假令多少の疑念が存しても、それはドン・ジョンの逃走によつて一掃された事であらう。ドン・ジョンは自分の悪事が暴れたと知るゝ兄の正義の怒を恐れて早速メシナから逃げてしまつた。

罪なくしてヒアロを責め、自分の殘酷な言葉によつて彼女を殺したと思つてゐるクロウディオは、

これを知つたとき心から嘆き悲しんだ。愛するヒアロの懐しき思ひ出の面影が、初めて戀した頃の稀なる美しさで彼の心に浮んで来た。そして王子に、此の話を聞いて腸を刳れるやうではなかつたかと聞かれて、ボラチオが話してゐる間は、恰も毒でも吞まされたやうであつたと答へた。

後悔したクロウディオは、レオナト老人に娘に加へた害を許して呉れるよう歎願した。そして婚約の妻に對する無實の非難を信じた罪に對しては、如何やうなる刑罰を課せられても、彼女の爲めに忍ぶ故、決して苦しくないと言束した。

レオナトが彼に命じた罰といふのは、今は彼の相続人であり、またヒアロに非常によく似たヒアロの従妹と、明朝結婚式を擧げることであつた。クロウディオはレオナトとの嚴かな約束を尊重して、假令其の女が黒奴であるとしても未だ見ぬ婦人と結婚しようと言つた。しかし心は重く悲しく、其の夜は、レオナトがヒアロの爲めに立てた墓石の邊りで、悔いにくれ涙にあかした。

翌朝王子はクロウディオを伴つて教會へ行つた。其處には既に例の親切な牧師と、レオナト、及び其の姪が第二の婚禮を祝ふために待ち設けてゐた。レオナトは約束の花嫁をクロウディオへ引き合せた、花嫁は顔を見られないやうに假面を被つてゐた。クロウディオは假面のままの婦人に向つて、

『神聖な牧師の前で婚約を致しませう。若しあなたが結婚して下されば、私はあなたの夫です。』

『私は生きて居りました時分、あなたの妻でございました。』と未知の婦人はかう言つて、假面をかな

ぐり捨てた、それはレオナトの姪（と思はれてゐた）ではなく、實にレオナトの娘、ヒアロ令嬢其の人であつた。これは令嬢は死んだものと許り思つてゐたクロウディオにとつて、最も喜ばしい驚愕であつた。彼は嬉しさの餘り容易に其の眼を信じる事が出来なかつた。王子も此の有様を見て同じやうに驚いて叫んだ。

『これはヒアロではないか、ヒアロは死んだ筈だが。』

『殿下、娘は誹謗が生きて居ります間は死んで居りました。』とレオナトは答へた。

牧師は式が終つたならば、此の奇蹟に思はれる事柄の説明をすることを一同に約束した。そして式を始めようとしてゐた時、ベネディツクは突然これを遮つて、自分も同時にピアトリスと結婚したいと申し出た。ピアトリスは此の結婚に少々異議を唱へたので、ベネディツクはヒアロから聞いたが彼女は自分を戀してゐるからと云ふ事を楯にとつて挑むので、ここで愉快な説明がなされた。そこで二人は初めて、欺かれて有も爲ない戀を信じ合ひ、出鱈目の冗談から眞實の戀人同志になつた事を知つた。しかし愉快な造り事で出来上つた愛情は、眞面目な説明でも破られない程力強いものになつてゐた。ベネディツクも一旦結婚を申出たからは、世の中が何と反對しようも此の目的を遂げる爲めにはそれを氣にかけまいと決心した。彼は此の冗談を愉快さうにとり上げて、ピアトリスに、彼女は自分を戀して焦れ死にさうになつてゐるとの事で、只可哀想な許りに彼女を容れてやつたのだと言へば、

ピアトリスはピアトリスで自分は非常に口説かれ、彼が肺病だといふ事で半ばは彼の命を救つてやるつもりで承知したのだと抗議した。そこで此の二人の剽軽な皮肉家は全く和解がなつて、クロウディオとヒアロが結婚した後で夫婦となつた。此の物語の完結として記せば、例の悪事の張本人、ドン・ジヨンは逃走中捕へられてメシナに伴れ戻された。この陰氣な不平家の彼にとつては、自分の計畫がまんまと破れて、メシナの邸宅で舉行される喜びの祝宴を見ることが丈でも適當な刑罰であつた。



御意のまま

フランスが各州に分れてゐた時分（それは公國とも云はれてゐた）一人の掠奪者が現はれて、正當の公爵である兄を追放して其の國の領主となつた。

自分の領地を追放された公爵は、僅か許りの忠義な家臣と共にアーデンの森に引退してしまつた。そして自分の爲めに進んで家出をしたこれらの家臣と共に日を暮らした。で一同の土地や収入は専ら横道な掠奪者の懐を肥す事となつた。しかし馴れるにつれて、この森の心配のない氣樂な生活は、派手な、不安な宮廷生活の華やかさより却つて楽しいものとなつた。此處で一同は昔の英國のロビン・フツドのやうな生活をした。宮廷からは毎日のやうに若い貴族が此の森を訪れて来て、恰度黄金時代の青年のやうに香氣に時を過した。夏には、森の大木の美事な樹蔭に横はつて、野鹿の楽しい戯れを見たりした。一同は前から此の森に住んでゐたらしい斑の可憐な鹿を非常に愛したので、此の鹿肉を食事に供給する爲めに餘儀なく殺してしまふ事が憐れでたまらなかつた。冬になつて寒い風が、公爵に變る逆境を痛感させる時、公爵は忍耐深くそれに耐へて言つた。

『自分の體に吹きつける此の刺すやうな風は眞の顧問官だ。追従もせず、ありの儘の状態を知らして呉れる。風は鋭く刺すけれど、其の齒は不親切や恩知らずの齒のやうに鋭くはない。人間は艱難を嫌

ふけれども、艱難からも何か知ら大切な利益が得られると云ふ事が分つた。恰度藥用の高價な寶石が有害の下賤な墓の頭から取れるのと同じ事ぢや。』

忍耐深い公爵は、このやうな風にして眼に觸れるあらゆるものから、有益な教訓を學んだ。そしてこの周圍の事柄から教訓を得る性僻のお蔭で、身は都に遠い所に生活して居乍らも、樹には言葉を、流るる川には書物を、石には説教を、あらゆるものに有益な事を見出すことが出來た。

追放された公爵にはロザリンドと呼ぶ一人の娘があつた。掠奪者の現公爵フレデリックは、兄公爵を追放した時にも、此の娘だけは自分の娘のシリアの相手として宮廷に留めて置いた。そして此の二人の令嬢の間の堅い友情は、互の父親の不和の爲めに少しも掻き亂される事はなく、シリアは、自分の父親が不法にもロザリンドの父親を追放した事の償ひとして、出來る丈けの親切を盡すことに努めた。ロザリンドが折にふれて、自分の父親の追放の事や、不法な掠奪者の許に厄介になつてゐる自分の事など考へて憂鬱になる事があると、シリアは全力をつくしてこれを慰め勞つた。

或る日シリアがいつもの親切な態度でロザリンドに向ひ、

『お願いですからロザリンド、氣を引き立ててね。』と言つてゐる時、恰度公爵からの使が遣入つて来て、今相撲の競技が始まるところであるが、若し見たいと思ふなら直に宮殿の前の廣場に來るやうにとの事を傳へた。シリアは、ロザリンドの氣を引き立てるかも知れぬと考へたので、行く事を承知し

た。

今でこそ相撲は田舎人しかやらないが、其の當時は宮殿に於ても、また美しい貴婦人、王女達の前に於てさへも、非常に好まれた競技であつた。それ故シリアとロザリンドもこの競技を見物に出かけたのであつた。しかし彼等は、この相撲はどうやら悲劇に終りさうに思つた。と云ふのは、相撲道に長い経験をもち、これ迄競技で幾度も人をあやめた事のある大男の力持が、今や非常に若い青年と取組を始めようとしてゐたからであつた。見物人は青年の若さと無経験から押して、青年は屹度殺されるに違ひないと考へた。

公爵はシリアとロザリンドが這入つて來たのを見て聲をかけた。

『やあ娘と姪か、何うだね。相撲を見にそつと遣つて來たのか。しかし面白くもあるまいよ。相手が不釣合だからね。若者が可哀さうでならぬから私は相撲を止めさせたいと思ふのぢや。何うだ御前達若者にさう言つて、止めさせる事が出来るかどうか試してごらん。』

二人はこの親切な役目を果すことを非常に喜び、先づシリアが若者に向つて競技を止めて呉れと願つた。續いてロザリンドも今若者が遭遇しようとしてゐる危険を深く思ひやつて非常に親切に言葉をかけて遣つたので、それは却つてロザリンドの優しい言葉で目的を止めさせる代りに、此の美しい令嬢の眼の前で勇氣を抜ん出て名をなさうとの決心をさせたのであつた。若者はシリアとロザリンドの

願ひを非常に上品な謙遜な言葉で辭退した、で二人は一層彼の身の上を案じた。彼はかう言つて辭退の言葉を結んだ。

『美しい立派な御嬢様方の御言葉に背くのは誠に御氣毒で御座いますが、どうか御嬢様方の美しい御目と、優しい御希望とを私の勝負に注いで下さい。假令負かされたにしても人から尊敬を受けた事もないやうな人間が一人恥を搔く丈けの事でございます。假令殺されたにしても、それは死にたいと願つてゐた人間が一人死ぬ丈けの事です。私には嘆いて呉れる者も一人もないのですから、友達に迷惑を掛けることも有りますまい。私は無一物ですから世の中に損害をかける事も有りますまい。私は只世の中に生きてゐるといふ丈けの事で、私が居なくなりすれば、もつと立派な人間が其の空席を塞いで呉れるでせう。』

愈々相撲の競技は始まつた。シリアは此の見知らぬ青年に怪我がなければ宣いと願つた。ロザリンドは尙ほさらさうであつた。青年が物語つた孤獨の身の上や、死ぬことを希望してゐる事などから押して、ロザリンドは彼も自分のやうに不幸な身の上であらうと思つた。ロザリンドは彼に深く同情して、相撲を取つてゐる間の其の心配は非常なものであつたので、それは此の時既に戀に陥つたと云つてもいい位であつた。

美しい高貴の令嬢が示した此の親切は、未知の若者に勇氣と元氣を與へたので、彼は人間業とも思

はれぬ力を現はし、遂に見事に相手に打ち勝つた。相手は酷い怪我をしたので暫くの間はもの言ふ事も動くことも出来なかつた。

フレデリック公爵は、此の未知の若者の勇氣と技倆を嘉して自分の臣下にしてやらうと思ひ、家系と姓名を訊ねた。

若者は自分の名はオウランドと云ひ、ロウランド・ダ・ボイズ従男爵の末子であると言つた。

ロウランドの父親のロウランド・ダ・ボイズ従男爵は數年前に死んだが、生きてゐる折は追放された公爵の親友で、忠實な臣下であつた。そこでフレデリックは若者が、追放した兄の友人の息子であると知ると、この勇敢な青年に對する好意は忽ち變つて不興となり、非常な不機嫌で其の場を出てしまつた。

しかし公爵は、兄の友達の名を聞くことは厭だつたが、若者の勇氣には感心してゐたので、オウランドが誰か外の者の子供であつたらよかつたと言つた。

ロザリンドは此の新らしい氣に入りの若者が父の舊友の息子であると知ると非常に喜んで、シリアに向つて言つた。

『私の父はロウランド・ダ・ボイズ従男爵を愛して居りましたわ。此の若い方が従男爵の御子さんである事が分つて居ましたら、勝負をなさる前に涙を流してでも御止めしたんでせうに。』

二人の令嬢は彼の方へ歩みより、若者が突然の公爵の不機嫌に當惑してゐるのを見、氣を引き立てるやうな親切な言葉をかけた。そして去り際に、ロザリンドはも一度振り向いて、父の舊友の勇ましい息子に親切な言葉をかけ、其の頸飾を外して言つた。

『あなた、どうか是をかけて下さいまし。不自由な身の上で御座いませんでしたら、も少しは値のある物を差し上げる事が出来たでございませうけど。』

令嬢達は二人切りになつた後で、シリアは、ロザリンドがまだオウランドの話で持ちきつてゐるのを見て、従妹はあの立派な若い力士に思ひを掛けて居るのではあるまいかと考へ、ロザリンドに言つた。

『そんなに急に戀するやうになれるものか知ら。』

『私の父の公爵はあの人の御父さんをそれは愛して居ましたもの。』とロザリンドは答へた。

『だけど、それで貴女も其の人の息子さんを愛しなければならぬといふ法が有つて？ それなら私はあの人を憎まなければならぬわ、私の父はあの人の父を憎んだんですから。でも私オウランドは憎まないわ。』

フレデリックはロウランド・ダ・ボイズ従男爵の息子を見て、兄の前公爵が貴族仲間によくの友人を持つてゐた事を思ひ出し非常に立腹した。加ふるに人々が自分の姪の貞淑なことを賞め、善良な父親

の爲め常に同情を表してゐるのを快からず思つてゐたので、公爵の悪心は急にむら／＼と起つた。そこでフレデリックは、シリアとロザリンドがオウランドの事を話し合つてゐた部屋へつか／＼と這入つて行つて、怒りの色を面に浮べ、ロザリンドに速刻宮殿を去つて追放されてゐる父親の許に行くやうに命じた。公爵は、ロザリンドを留めて置いたのは只娘の爲めを思へばこそ我慢したのであると言つて、シリアの辯解も聞き入れなかつた。

『私は其の時御父様にお願ひして従妹を引き留めて戴いたのでは御座いませぬ。私は未だ小さう御座いましたので、従妹の價値も分りませんでした。今は其の價値も分りますし、それに長い間寝るも起きるも一緒、勉強するのも遊ぶのも一緒でございましたので、私は従姉なしでは暮らす事が出来ません。』

するとフレデリックは、

『あれは仲々猾いのだよ。おとなしくして黙つて居り、辛抱強いので、人民どもが感心して同情をしてゐる。あの女の辯護をするなんてお前も馬鹿だよ。あの女が居なくなつたらお前の光もまして、もつと立派に見えるやうになる。だから辯解するやうな口をきいては不可ない。一旦あれに申し渡した罰は取り消すことは出来ぬのぢや。』

シリアは、とても父親を説いてロザリンドを引き留める譯に行かない事を知り、義侠心から彼の女

と一緒に行くことを決心した。そして其の夜父の宮殿を抜け出て、其の友と共にアーデンの森に、追放された公爵のロザリンドの父を尋ねに出かけた。

出立する前に、シリアは今着てゐるままの立派な服装で若い女二人が旅することは、危険と考へたので田舎娘のやうな装ひをして身分を隠さうと申し出た。ロザリンドはそれよりも、二人のうちどちらかが男の服装をしたならもつと安全だらうと言つたので、早速その相談が纏り、ロザリンドはシリアよりも脊が高いので、田舎の若者のやうな服装をし、シリアは田舎娘のやうな装ひをすることにした。そして二人は兄妹といふ事にして、ロザリンドはガニミイドと呼ばれることにし、シリアはエーリエナといふ名前を選んだ。

二人はこのやうに姿を變へ、路用の足しにもと金錢や寶石を身につけ、長い旅にと出かけた。と云ふのはアーデンの森は、公爵の領地を超へたすつとかなたに在つたからである。

ロザリンド令嬢は（今はガニミイドと呼ばなければならぬが）男の着物をつけて、男らしい勇氣さへ加つたやうに見えた。シリアは疲勞にみちた長い道中の間も、伴れのロザリンドに種々と友情を示したので、なり立ての兄のロザリンドは此の眞實の愛に報ひる爲め元氣を振り起して、恰もやさしい田舎娘の、質朴な丈夫な心を持つ本當の兄のやうに振舞つた。

とう／＼二人はアーデンの森までやつて來た。ここではもう便利な旅舎も、これまで道中で受けた

便宜も何もなくなつた。道々楽しい事や愉快な話をして妹の氣分を引き立てて来たガニミイドも、飢と疲労の爲め全く弱り果て、心の中では男の着物を辱かしめ、女のやうに泣いてしまいたいと白状した。エーリエナはもう一步も動けぬと言つた。するとガニミイドは、弱い者として女を慰め勞はるの  
は男の義務であつた事を思ひ出し、強いて元氣を出して言つた。

『さあ元氣におなりよ、エーリエナちゃん。もうアーデンの森まで来て、旅も終りなんだからね。』  
しかし乍ら見せかけの勇氣や附元氣はさう長く續かなかつた。アーデンの森まで来るには来たが、何處に公爵が居るのかは分らなかつた。二人は道に迷ひ、飢死しさうになつたので、此の二人の疲れ切つた令嬢の旅は或は悲しい終りを告げたかも知れなかつた。が幸な事には、飢と絶望の爲めに始んど死にさうになつて草の上に座つてゐた時、一人の田舎男が其處を通りかかつたので、ガニミイドはも一度男らしい大膽さで話しかけた。

『おい羊飼、此の淋しい場所で食物を買へるところがあつたら、又好意で貰へるところが有つたら、お願いだから休めるやうな所へ伴れて行つて呉れ給へ。此の若い娘は僕の妹だが旅の疲れで弱つて、食物がなく息も絶え絶えになつてゐるのだ。』

其の男は、自分は只羊飼の召使であり、しかも其の主人の家は賣られる事になつてゐるので、つまらない食物の外は何もないであらうが、若し自分と一緒に来て呉れば、有り合せのもので待遇は上げて上げるだらうと言つた。やつと助かる見込がついたので、二人は新たに元氣を振り起して、其の男について行つた。其處で羊飼から家と羊を買ひとり、羊飼の家へ案内して呉れた男を下男に雇ふことにした。このやうにして幸にも小綺麗な家が手に入り、食物も十分にあつたので、二人は此處に一先づ落付いて、公爵が森の何處に住んでゐるかを探すことにした。

ここで旅の疲れを休めて落付いてゐるうちに、二人は此の新らしい生活が好きになつた。そして自分達でも初は、其の眞似をしてゐた羊飼の男と女に本當になつてしまつたやうに思はれた。唯時々ガニミイドは、自分がかつてロザリンドと呼ぶ令嬢であつて、父の親友のロウランド従男爵の息子であるといふ故で勇敢なオウランドを非常に愛してゐた事など思ひ出した。そしてガニミイドは、オウランドは遙かかなたに、物憂い旅をして来た遠い遠いかなたに居るものと許り考へて居たが、オウランドも亦此のアーデンの森に居る事が間もなく分つた。かくしてこの不思議な出来事が起つた。  
オウランドはロウランド・ダ・ボイズ従男爵の末子であり、彼が死んだ時は未だ非常に幼かつたので父は長兄オリヴァに其の世話を頼み、オウランドに立派な教育を施し、古い家名の威嚴を汚さぬ者に仕立てて呉れるやう託したのであつた。しかしオリヴァは頼み甲斐のない兄であつた。亡き父の命令に背いて、オウランドを決して學校にやらず、只家に置いて教育も施さず放任して置いた。しかし乍ら生れつき、其の性質の氣高いところが優れた亡き父そつくりで、教育の恩恵は少しも受けずに係

はらず、非常に注意深く育て上げられた若者のやうに思はれた。オリヴァは何の嫉もない弟の立派な人柄と威厳のある態度を嫉ましく思ひ、遂にこれを亡きものにしようと考えた。そこで人々を唆かして弟を有名な力士と勝負をするやう説き付けさせた。此の力士は前にも述べた如く多くの人を殺めた相撲取りであつた。オウランドが孤獨の身の上故死にたいと言つたのは、此の残酷な兄が少しも彼の事を世話せぬからであつた。

計畫した陰謀が破れて、弟が勝利を得たといふ報知を受けとつた時の兄の嫉妬と憎悪は、とどまる所を知らなかつた。彼は罵つて、オウランドが寝る居間を焼き拂つてやると言つた。生憎と此の罵詈雑言は、昔から仕へてゐた忠義な老僕で、オウランドを先殿のロウランドに似てゐるからといふので非常に愛してゐる男に聞かれてしまつた。此の老僕はオウランドが公爵の宮殿から歸るのを出迎へに出で其の姿を見ると、此の若主人が非常な危険に陥つて居るのに心急ぎ、興奮して叫んだ。

『おゝ優しい／＼旦那様！ 先殿ロウランドのお忘れ形見の旦那様！ 何うしてさう御立派なのです何うしてさう優しく、強くて、勇敢でいらつしやるのです。何うして名高い相撲取りを負かすやうな馬鹿な眞似をなさつたのです。貴方が御戻りになる前にもうちやんと其の評判はまゐつて居ります。』  
オウランドには此の意味がさつぱり分らないので何うしたのかと尋ねた。すると老人は、あなたの悪い兄上が平常から貴方の人望を嫉んで御出でになるが、今度公爵の宮殿で勝利を得た評判を聞いて

今夜居間に火を放つて焼き殺す積りであると話した。そして速刻逃亡して危険をのがれた方が良いと忠告し、尙ほオウランドに金がない事を知つてゐたので、アダムは（此の善良な老人の名前である）僅か許りの貯金を持ち出して來てオウランドに言つた。

『ここに五百クラウン御座います。これは先殿に御仕へしてゐた時分氣をつけて溜めましたもので、老齢で御仕へが出来なくなる折の用意に貯へて置きました。何うかこれを御取り下さい。鴉をさへ御養ひになる神様、わが老後を御慰め下さい！ さあ此の御金はそつくり差し上げます。私を貴方の召使にして下さい。齡こそ取つてゐるやうで御座いますが、若い者並にどんな御用でも勤めますから』  
『あゝ忝けない！ 昔の家臣の忠義さが御前にそつくり現はれてゐる。お前は當世風に合はないのだ、それでは一緒に出かけて、お前の若い時分の貯へがなくならないうちに、我々二人の暮らしの手段を講じよう。』

そこで敬愛されてゐる主人と忠義な家臣は一緒に出かけた。何處へ行くといふあてもなくオウランドとアダムは旅を續けて行つて、遂にアーデンの森に來た。そしてガニミイドとエーリエナが陥つたと同じ食物の窮乏に陥つて困惑した。二人は人の住家もないかと探しまわつてゐる中に、飢と疲労の爲めに殆んど動けなくなつてしまつた。アダムはとうとう言つた。  
『おゝ御主人様、私はもう飢死しさうです。もう一步も動かせぬ。』

かう言つて倒れた其の場所を墓場にするつもりで、愛する主人に別れを告げた。オウランドは弱りて果た老僕を見て、氣持の良い木陰に抱いて伴れて行き、彼に向つて、

『おいアダム、元氣を御出しよ、そして暫く此處で休んでお出で。もう死ぬことなど言つて不可ないよ。』と言つた。

それからオウランドは尙も食物を探しに出かけたが、偶然にも公爵が住んでゐる森の處へ來た。恰度公爵と友人達は食事を攝らうとして、公爵はある大木の樹蔭に外ならぬ天蓋の下の草の上に座つてゐた。

飢のために絶望的になつたオウランドは、劍を抜いて暴力で食事を奪はうと考へて言つた。

『待て、其の食物を食べてはならぬぞ。此の方が取らなければならぬ！』

そこで公爵は彼に窮迫の爲めさう不作法になつたのか、それとも禮儀作法を輕蔑する亂暴者であるか何うかと訊ねた。オウランドは飢で死にさうになつてゐる事を話すと、公爵はそれでは何うか座つて食事を取つて呉れと言つた。オウランドはかう優しく言はれると、食物を請求した自分の無作法に赤面して、劍を鞘に收めて言つた。

『何うか御赦しを願ひます。かう云ふ所ですから何事も野蠻だらうと思ひまして、嚴しい命令の態度に出たのでした。しかしかう云ふ淋しい場所で、陰氣な木の下蔭で、空しく時を過して御出でになる

貴方がたは、何う云ふ方か知りませんが、若し貴方がたにもかつては榮華の時代があり、鐘の音が人々を誘ふ教會へも行かれた事があり、立派な人々の宴會へも待し、あなた方の目蓋から流れ出る涙を拭いて憐れみ、また憐みを受ける事がどんな事であるかを御存じで御座いましたら、どうか御赦しになつて私を親切になすつて下さう。』

すると公爵はそれに答へて、

『成程、仰せの如く我々もかつては榮華の日を送つた事もあり、今こそ荒れ果てた森の中に住居はしてゐるものの、都や町に住んだ事もあり、聖い鐘の音に誘はれて教會へ行つた事もあるれば、立派な人々の宴會へ招かれた事もあり、清い憐憫の情から流れ出る涙を拭いた事もあります。それ故何うか席について、必要な丈け食物を召し上つて下さう。』

『實は可哀さうな老人が一人居ます。本當の忠義な心から疲れた足を曳きすつて私の供をして來たものですが、今は一時に齡と饑の悩みにおかされて居ます。彼に食はせた上でなくては私は一口でも戴いてはなりません。』

『それでは行つて伴れて御出でなさい。貴方が歸るまでは、我々も手を付けない事にしませう。』

そこでオウランドは食物を與へる爲めに仔鹿を探しに行く牡鹿のやうに飛んで行つて、臆てアダムを腕に抱へて戻つて來た。公爵は、



『あなたの大切な重荷を下しなさい。二人とも何うか召し上つて下さい。』と言つた。老人は食物を與へられ、氣を引き立てられたので、漸く元氣づいて、元通りの力と健康を回復した。公爵はオウランドの身分を訊ねて、彼が自分の舊友ロウランド・ダ・ボイズ従男爵の息子であることを知つたので、自分の部下にして世話する事にし、ロウランドと老僕は公爵と共に森の中に住むことになつた。

ロウランドが此の森に住むやうになつてから幾日も経たぬうちに、(前にも述べたやうに)ガニミイドとエーリエナがやつて来て、羊飼の家を買ひとつた。

ガニミイドとエーリエナは、ロザリンドの名が樹々に彫られてあり、またロザリンドに宛てた愛の小唄が樹々に結び付けてあるのを見て非常に驚いた。これは何うしたのだらうと訝つてゐるうちに、二人はロウランドに出逢つた。彼の頸には、ロザリンドが與へた首飾がまだ掛けてあつた。

ロウランドはガニミイドが美しい令嬢のロザリンドであるとは思はなかつた。彼は令嬢の氣高い謙遜と愛護に非常に心を惹き付けられてゐたので、かうしていつも樹に其の名を刻んでみたり、令嬢の美しさを讃める小唄を作つてみたりして時を過してゐるのであつた。ロウランドは此の美しい羊飼の若者の上品な態度が氣に入つたので、言葉をかけて見た。そして此の羊飼には愛するロザリンドの倂があると考へたが、氣高い令嬢の威嚴のある舉措は少しも見えなかつた。ガニミイドは幼い時段

方や男の子供の中にあつて見聞きした不遜な態度を眞似てゐたので、オウランドに向つてある戀人の話をばふさげた滑稽交りで話してきかせた。

『其の男はね。』と彼女は續けて、

『此の森に住んでゐて、立木の皮へもつて行つて無暗にロザリンドの名を彫るものですから、若木が駄目になつてしまふのです。お負けに、矢張り其のロザリンドといふのを讃めましてね、山楡に小唄をぶら下げてみたり、木苺に嘆きの歌をかけたりますのでさあ。私に其の憶れてゐる先生が見付かつたら、旨い意見をしてやつて早速戀息ひを治してやりますがね。』

オウランドは、今の話の其の馬鹿な戀人は自分であるといふ事を白狀して、ガニミイドに旨い意見をして呉れと頼んだ。ガニミイドが申し出た治療法、即ち旨い意見をするといふのは、彼に毎日、妹のエーリエナと一緒に住んでゐる自分の家に來なければならぬといふのであつた。

『そしたら。』とガニミイドは續けて、

『私はロザリンドの眞似をしますから、貴方は私が本當のロザリンドだつたら爲ると同じ仕方で私を口説く眞似をしなさい。私は氣紛れな令嬢が戀人へ對してするやうな馬鹿な事許りしますから、とう／＼貴方は戀をするのが恥かしくなるのです。これが貴方の病氣を治して上げる方法です。』

オウランドは此の治療法に大して信用も置かなかつたが、それでも毎日ガニミイドの家へ行つて、

戯れの求婚をする約束をした。そこでオウランドは毎日ガニミイドとエーリエナを訪問して、羊飼のガニミイドをロザリンドと呼んで、若い男が娘達に求婚する時喜んで使ふ美しい言葉や御世辭を繰り返した。しかし乍らこれは、ロザリンドに對するオウランドの戀を癒す効果があるやうには見えなかつた。

オウランドはこれを唯の遊戯とは知つてゐたけれども（ガニミイドがロザリンド其の人であるとは夢にも知らず）心の中に秘めて置いた愛の言葉を囁く機會を得たので、此の美しい愛の言葉が戀してゐる當人に語られてゐるといふ秘密の戯れに喜んでゐるガニミイドと同じやうに其の空想を満足させて喜んだ。

若い人達は楽しい幾日かを過した。人の良いエーリエナは、ガニミイドが幸福になつてゐるのを見て少しもそれに干渉を加へず、戯れの求婚を面白く思つて、ガニミイドに令嬢ロザリンドとして父公爵に逢ひに行くやうにとは決して勧めなかつた。公爵の森の住家はオウランドから聞いて知つてゐたのである。ガニミイドは或る日公爵に出逢つて、暫く話をした。其の時公爵に家柄のことを聞かれたので、ガニミイドは貴方と同じやうな立派な家柄のものであると答へた。公爵は微笑した、可愛い羊飼の少年が王家の血統のものであるとは思へなかつたからである。ガニミイドは公が幸福で健康さうに見えたので、此の上の説明は二三日延ばして置くことにした。

ある朝、オウランドがガニミイドを訪ねに出かける途中で、一人の男が地上に横はつて眠つてゐるのを見た。大きな緑色の蛇が其の男の頸に巻き付いてゐた。蛇はオウランドが近づくのを見て、茂みの中に滑りこんだ。オウランドは尙ほも近づいて見ると、其處にはまた一頭の雌獅子が蹲まつてゐて獲物を狙ふ猫のやうに頭を地に付け、眠つてゐる男の目醒めるのを待つてゐた。（獅子は死んだものや眠つてゐるものは決して食はないと云はれてゐる）恰もオウランドは天意によつて此の男の蛇と獅子の危難を救ふ爲めに送られたもののやうであつた。そしてオウランドが、此の二重の危険の中に眠つてゐる男の顔を覗き込んでみると、それは實に、自分を酷い目に合はせ、火で焼き殺さうとまでした兄のオリヴァであつた。で彼は兄を此の儘雌獅子の餌食によつほと残さうかと考へたが、兄弟のよしみと善良な性質は、彼を直に最初の怒りに打ち勝せた。オウランドは劍を抜いて雌獅子に打ちかかり、それを殺して、兄の命を毒蛇と恐ろしい獅子の危難から救つた。がオウランドは獅子と戦つてゐる間に、鋭い爪で片腕を引き裂かれた。

オウランドが獅子と戦つてゐる間に、オリヴァは目を醒まし、酷い目に逢はした弟のオウランドが自分の爲めに生命を投げ出して恐ろしい獅子を防いで呉れてゐるのを見て、恥と悔いの念に駆られ、今までの不法行爲を後悔し、涙を流してこれまで弟に加へた罪惡を赦して呉れるやうに願つた。オウランドは兄がこれ程までに後悔してゐるのを見ると、早速彼を許してやり、二人は抱き合つた。オリ

ヴァは弟を亡きものにしようと思つて此の森にやつて來たのであるが、此の時からは眞の兄弟の情でオウランドを愛するやうになつた。

オウランドの腕の傷は出血が甚しく、もうガニミイドを訪問する元氣もなくなつたので、兄に行つて貰つてガニミイドに、其の人の事を自分は戯れにロザリンドと呼んでゐるが、思ひがけない出來事を話して呉れるやうに頼んだ。

オリヴァはガニミイドの家へ行つて、彼女とエーリエナに、自分がオウランドに救はれた事を話した。オウランドの勇敢な行爲や、天の助で自分が救はれた事を話したあとで、自分はオウランドをこれまで酷くして來た兄である事を白状し、今はもう弟とも仲直りが出來た事を附け加へた。

オリヴァが冒した罪を眞心から悔い悲しんでゐるのを見て、親切な心持のエーリエナはそれを深く感じ、突差に彼を戀するやうになつた。オリヴァの方でも、犯した罪に對する惱みに深く同情して、ける彼女を見て、矢張り同じやうに直に彼女を戀するやうになつた。かくしてエーリエナとオリヴァの心の中に、戀心が忍び寄つてゐる間にも、彼はガニミイドの介抱で忙しかつた。ガニミイドはオウランドが危険に陥つて雌獅子の爲めに怪我をしたといふ事を聞いて氣絶したからであつた。ガニミイドはやつと氣が付くと、ロザリンドの心持になつて卒倒の眞似をしてみたのだと言ひ譯をして、オリヴァに向つて言つた。

『私がどんなに巧く卒倒の眞似をしたかといふ事を弟さんに話して頂戴ね。』

しかしオリヴァは、ガニミイドの顔色の悪いのを見て本當に氣絶した事を知り、若者が餘りに弱々しいのを訝しく思つて、

『さう、若し眞似をしたのなら、元氣を出して男になる眞似をなさい。』

『さうします。しかし私は當然女であつた方がよかつたのです。』とガニミイドは(偽りなく)答へた。オリヴァの訪問は長いことかかつた、そしてやつと男の許に戻つて來た時には、話す事が澤山あつた。オウランドが怪我をしたといふ事を聞いてガニミイドが氣絶したといふ話の外に、オリヴァは、美しい羊飼女のエーリエルと戀に落ちた事、初めて會つた許りであるけれど、女も自分の申込みを快よく聞いてくれた事、それからもう殆んど確定した事のやうに、自分は彼女を非常に愛してゐるからエーリエナと結婚して、此處に羊飼となつて止る故、故郷の領地や邸宅はオウランドに與へることにすると話した。

『私も賛成です。明日婚禮をなさい。私は公爵や友人達を招待しますから。さあ女羊飼のところへ行つてそれを承知させて御出でなさい。今は一人で居ますよ、御覽なさい。兄さんが此處へやつて來ましたから。』とオウランドは言つた。そこでオリヴァはエーリエナの所へ出かけた。オウランドが目疾く見附けたガニミイドは、怪我した友人の見舞に來たのであつた。

オウランドとガニミイドの話が、オリヴァとエーリエナの突然の戀の話に移ると、オウランドは、兄に明日婚禮を擧げるやう、美しい女羊飼を説くやうに勧めたと話し、尙ほ自分も同じ日に、ロザリンドとどんなに結婚をしたい事だらうとつけ加へた。

ガニミイドは此の取りきめに非常に賛成し、又若しオウランドが其の言葉通りに真にロザリンドを愛してゐるのならば、其の希望を叶へてやると言つた。明日になれば屹度ロザリンドを其の儘の姿で伴れて來よう、ロザリンドもオウランドとの結婚を非常に望んでゐるからと言つた。

此の一見不思議に思はれる事柄も、ガニミイドがロザリンド令嬢であるのだから譯なく出来る事であつたが、彼女は自分の叔父である有名な魔法遣ひから教へて貰つたといふ魔法の力を借りるのだと言つた。

愚な戀人のオウランドは、これを聞いて半ば迷ひ、半ば信じ、それは本氣で言つてゐるのかとガニミイドに尋ねた。

『誓つて本當です。ですから貴方は晴着を着て、公爵や友人方を婚禮に招いて御置きなさい。あなたが明日ロザリンドと結婚する氣であれば、ロザリンドは必らずまゐります。』

オリヴァはエーリエナの承諾を得て置いたので、翌朝二人は公爵の前に出た。オウランドも一緒にやつて來た。

一同は此の二つの結婚を祝ふ爲めに集つた。しかし花嫁は一人しか見えなかつたので、一同は訝かつたり、種々な想像を巡らしてみたりした。結局ガニミイドがオウランドを揶揄つたのだらうと考へる者が多かつた。

公爵はこの不思議な方法で伴れて來られる花嫁が、自分の實の娘であると聞いて、オウランドに、羊飼の少年が約束した事は本當に遣れると思ふかと訊ねてみた。オウランドが私はどう考へて良いか分りませぬと答へてゐる所にガニミイドが這入つて來て公爵に向ひ、若し令嬢が來たらオウランドとの結婚を御許し下さるかと言つた。

『許さう。假令余に娘と共に與へる王國が有るとしても。』と公爵は答へた。ガニミイドは次にオウランドに向つて、

『令嬢をここに御伴れ致したら、貴方は結婚すると仰有いましたね。』

『結婚します。假令私が多くの王國の王であるとしても。』とオウランドは答へた。

ガニミイドとエーリエナは一緒に出て行つた。ガニミイドは早速男の着物を脱ぎすて、も一度女の着物に装ふて、魔法の力を借りることもなく直ぐロザリンドになつた。エーリエナも田舎風の着物を元の高價な衣服と着變へ、苦もなく令嬢シリアとなつた。

二人が出て行つたあとで、公爵はオウランドに向ひ、羊飼のガニミイドはどうも自分の娘ロザリン

ドに似てゐたと思つたと云へば、オウランドも、私もそれに気が附いてゐましたと答へた。

一體これは何うなることかと一同が心配する間もなく、ロザリンドとシリアが元の令嬢の服装で現はれた。もはや魔法の力によつて此處に來た等といふ言ひ譯はしないで、ロザリンドは父親の足もとにひれ伏し、祝福を賜はるやうにと願つた。皆は彼女が突然現はれた事を非常に不思議に思つたので、それは魔法だと云つても十分に通つたであらう。しかしロザリンドはもう父親を愚弄するやうな事はなく自分が追放された事から、森の中の住家で羊飼の少年となり、従妹のシリアを妹として暮らして來た事など話した。

公爵は既に與へた結婚の承諾をまた新にして、オウランドとロザリンド、オリヴァにシリアと二組の夫婦が同時に出來上つた。この婚禮はかう云ふ淋しい森の中の事ではあり、かう云ふ場合につきものの華麗さはなかつたけれども、これ迄にない幸福な結婚の日であつた。涼しい氣持の良い樹の下蔭で一同が鹿肉を食してゐる時、善良な公爵と眞の戀人達の幸福をこれ以上全くするものは外にないかのやうに、思ひもかけぬ使者が到着して、公爵の領地が彼へ返されたといふ吉報をもたらした。

掠奪者の公爵は娘シリアの逃亡で非常に腹を立て、又立派な人間が毎日のやうにアーデンの森を訪れ、追放されてゐる正當な公爵の部下になる由を聞き、逆境にあつてもそれ程までに尊敬を受けてゐる兄が嫉ましくならず、兄と其の忠義な家臣達を悉く劍にかけるつもりで、大軍を率ひてアーデンの

森を指して進んだのであつた。しかし不思議な神の攝理で、此の悪心の弟は改心をしてしまつた。恰度淋しい森の一端に這入つたとき、一人の老宗教家である隠遁者に出逢ひ、それと種々話をするうちに、とう／＼自分の悪い計畫を全く放棄してしまつた。これ以後彼は心から後悔して、先づ不當の領地を棄て、後半生を僧院で暮さうと決心した。で新たに思ひついた悔悟の第一番の行爲として、兄の許に使ひを送り（前に述べたやうに）これ迄長い間横領してゐた公國を返し、同時に逆境の折の忠義な家臣達の土地及び歳入をも元通りに戻すといふ事を申し出た。

思ひも寄らなかつた爲め尙更喜ばれた此の吉報は、折よくも王女達の結婚の幸福と喜びを一増高めた。シリアはロザリンドに、父公爵の得た幸運の祝ひを述べ、また自分の父が公國を返した爲め自分も早や其の領土の相續者ではなくなつたけれど、ロザリンドが新たに其の相續者になつた事を、心から喜び祝つた。此の二人の従姉妹の間の愛情は實に立派なものであつて、嫉妬や美望などは露ほども無かつた。

今公爵は、追放されてゐる間共に居て呉れた忠義な家臣たちに其の報ひを與へる時を得たのである。そして此の忠義な家臣達も、公爵の逆境に辛棒して仕へた甲斐があつて平和と繁榮のうちに正當な公爵の宮殿へ戻れることを非常に喜んだ。

ヴェロウナの二紳士

ヴェロウナの市に二人の若い紳士が住んで居て、その名をヴァランティン及びプロウチューズと云つたが、二人の間には堅固な不断な友情が取交はされて居た。彼等は勉強を共にし、又暇な時間は常に、話して過したが、さうしなかつたのはたゞ、プロウチューズがその戀して居る婦人を訪問する時のみであつた。かうした彼の戀人訪問と、美しいジューリアに對する熱情とが、この二人の友人の意見が會はぬ只一つの話題であつた。と云ふ譯は、ヴァランティンは、自分自身は戀をして居なかつたので、時々、彼の友が間斷なしにジューリアの事を話すのをきゝ飽きる事もあつて、引いてはプロウチューズを笑ひ、又やゝ皮肉な言葉を用ゐて、熱情的な戀を嘲弄し(彼の言葉で云へば)プロウチューズのやうに戀をして希望や懸念のためにやきもきするよりも、自由に幸福に日を送る方がはるかによいから、さやうな馬鹿らしい思は決して自らの頭へ入れないと斷言した。

或朝ヴァランティンは、自分はミランに行くつもりであるからとて、暫くの別れを告げに、プロウチューズのところへやつて來た。プロウチューズは友達と別れるのを好まなかつたので、自分を捨てゝ行かないやうヴァランティンを説服しようと種々議論をした。しかしヴァランティンは云つた。

よゝゝ 念の次 君も 一ツガリ 書き 給へ

『僕を説きつけようとするのはやめて呉れ。プロウチューズ。僕は懶惰者のやうに、うちに居て青年時代を無駄に過したくない。故郷に執著する青年には常につまらぬ知識しかない。もし君の愛情が、君の尊敬して居るジューリアの美しい姿に縛られて居なかつたら、僕は君に懇願しても、他國の耳目を驚かすものを見に僕と一緒に持つて貰ふのだ。だが君は戀をして居る人であるから戀を続け給へ。そしてその戀が益々發展せん事を祈るよ!』

彼等はお互に變らぬ友情の言葉を述べて別れた。

『なつかしいヴァランティン、左様なら!』とプロウチューズは云つた。『君の旅行中に何か注意に價する珍らしいものを見る時には、僕の事を思ひ出し、僕も居て君の幸福を分てばよいと思つて呉れ。』ヴァランティンはその日ミランに向つて、その旅行を始めた。そして友が自分を後にして行つてしまふと、プロウチューズは腰を下してジューリアへの手紙をかき、それを御主人に差しあげて呉れるやうにと、ジューリアの召使ルセッタに渡した。

ジューリアも、プロウチューズが彼女を愛して居たのと同様に彼を愛して居たが、しかし彼女は雄々しい氣性の婦人であり、又易々と口説き落されるのは處女の氣位を落す事だと考へた。そこで、彼女は彼の愛情に對して冷淡な風を装ひ、愛を得ようとして居るプロウチューズに多くの不安を與へた。でルセッタがその手紙をジューリアに差出した時、彼女はそれを受け取らないで、プロウチューズから

手紙など受取つてはいけなと召使を叱り、部屋を立ち去れと命じた。だがどう云ふ事が手紙に書いてあるか見たくて仕方がなかつたので、彼女は直ちに再び召使を呼んだ。そしてルセッタが再び現れた時、彼女は云つた。

『今何時なの！』ルセッタは、御主人は時刻を知りたいといふよりも寧ろ、手紙が見たくて仕方ないのだといふ事を知つて居たので、彼女の問には答へず、再び前に彼女が拒んだ手紙を差し出した。ジュリアは、かやうに召使が、失禮にも彼女の眞に欲して居る事を知つて居るやうな様子をするのを怒つて、手紙を寸々に裂いて、それを床の上に投げ、再び召使に部屋を立ち去れと命じた。ルセッタは立ち去る時に、屈んで裂かれた手紙の片々を拾ひ取らうとした。しかしジュリアはそれを手離したい積りは無かつたので、怒つたやうな風をして云つた。

『出てゐらつしやい。さつさと出てゐらつしやい。紙片などその儘にして置けばよいぢやないか。お前は私を怒らせるためにそんなものをいぢつて居るんだね。』

それからジュリアは、裂かれた手紙の断片を出来るだけうまく糺合せ始めた。彼女はまづ『戀に傷づけるプロウチューズ』といふ言葉を認めた。それから、手紙は全く切れ切れになつて居たけれども、彼女の言葉をかりて云へば（それは『戀に傷づけるプロウチューズ』といふ言葉が彼女に思ひつかせたのであるが）傷づいて居たけれど、この言葉や、かうした種類の言葉を見つけて、彼女は嘆きにく

れ乍ら、これらの深切な言葉に向ひ、お前達の傷がいえる迄は、床に就かせるやうに自分の胸にねかせ、傷づけた償ひに一片一片にキスしてあげやうと云つた。

こんな風にして、彼女は可愛い、婦人らしい子供らしさで話し続けたが、遂に手紙の文字を全部読む事が出来ず、又彼女の言葉で云へばかやうな優しい愛情のこもつた言葉を殺した自分の忘恩を悲んで、是迄に書いた事のないやうな深切な手紙をプロウチューズに宛てて書いた。

プロウチューズは自分の手紙に對するこの首尾のよい返事を受取つて大變に喜んだ。彼はそれを讀んで居る間に思はず聲をあげて叫んだ。

『楽しい戀！ 楽しい手紙！ 楽しい人生！』彼が夢中になつてかう呼んでゐる時、彼は入つて來た父によつて、それを遮られた。

『おい／＼！』とその老紳士は云つた。『お前はそこでどうした手紙を讀んで居るのだ。』

『父上！』とプロウチューズは答へた。『ミランに居る友人ヴァランティンから手紙が來たのです。』

『手紙をかして御覽。』と彼の父は云つた。『どんな便りがあつたか見たいから。』

『何も變つた事はありません、父上。』とプロウチューズは大變驚いて云つた。『たゞ友人がミラン公に非常に愛されて、日々その恩寵を蒙つて居るといふ事、又その幸福をわかつ友として、どんなにか私と一緒に居ればよいと思ふといふ事が書いてあるだけです。』



『でお前は友人がさう云つて呉れるのをどう感ずるか。』と父親はたづねた。  
『それはお父さんの御心次第で、友達の望みできまる事ではありません。』とプロウチュースは云つた。  
ところが偶然にもプロウチュースの父は、外ならぬこの問題で、友人の一人と相談をして居たのであつた。その友人は、多くの人々はその子息の榮達をはかつて外國にやつて居るのに、なぜ彼は彼の子息を家に置いて青年期を過させるのか了解に苦しむと云ふのであつた。

『或者是運命を試すために子供を戦争に出し、或者是島を發見するために子供を遠くにやり、或者是外國の大學で研究するために子供を送つて居ます。又御子息の友人ヴァランタイムもさうで、彼はミラン侯の宮廷に行つて居ます。あなたの御子息は、かうした事のいづれをなさるにも恰好な方です。青年時代に旅をさせてお置きにならなければ、後年になつて御子息の大きな不利益となるでせう。』と友人は云つた。

プロウチュースの父は、その友人の勸告は大層結構であると思つて居たので、『自分の幸福をわかつために、君と一緒に居て呉れるとよいと思ふ。』とヴァランタイムが云つてよこしたといふ事をプロウチュースから聞いた時、彼は直ちに息子をミランにやらうと決心した。そして、息子と相談しないで命令をするといふのがこの勝氣な老紳士の常の習慣だつたので、この急な決心に關する理由は何も話さずにプロウチュースに向つて云つた。

『私の意志もヴァランタイムが願ふところと同じだ。』そして、息子がびつくりして居るのを見て、彼はつけ加へて云つた。

『私がお前をミラン公の宮廷に暫くやつて置かうと急に決心したからとて、何もさう驚く事はない。私がしたいと思ふ事をする、たゞそれだけだ。明日立つやうに用意をせよ。とやかく云つてはならぬ。私は斷乎としてさうするのだから。』

プロウチュースは、決してその意志に逆ふ事を許さない父に對し異議を申し立てるのは無駄であると云ふ事を知つて居た、そして、ジューリアの手紙の事で、よぎなく彼女を後に行かねばならぬ悲しい場合に立ち至るやうな虚言を父に向つて云つた事を後悔した。

さてジューリアは、そんなに長い間プロウチュースと別れて居なければならぬ事になつて見ると、最早無頓着を装ふては居られなかつた。そこで二人は幾度も愛の誓や、いつ迄も變らぬと云ふ誓やをして、お互に悲しい別れの言葉をかはした。プロウチュースとジューリアは指環を交換し、それをお互のかたみとしていつまでも持つて居ようとして約束した。かやうにして、悲しい別れを告げ、プロウチュースはミランの友人ヴァランタイムの宿へ向つて旅立つた。

ヴァランタイムは實際、プロウチュースがその父に拵へて話した通りに、大層ミラン公に寵愛されて居た。そしてプロウチュースが夢にだも思はないやうな今一つの事件が彼に起つて居た。と云ふのは

ヴァランタインは、いつもあんなに自慢して居たところの自由をすて、プロウチュースと同様に熱烈な戀をする人となつて居たのである。

ヴァランタインに此の不可思議な變化をさせた乙女は、ミラン公の娘シルビヤ姫であり、彼女もまた彼を愛して居た。しかし二人は自分達の戀の事を公爵には祕して居た。公爵はヴァランタインに大層深切にし、日々彼を宮殿に招待はしたけれど、自分の娘は、その名をツリオと呼ぶ若い侍臣と結婚させるつもりだつたからである。シルビヤは此のツリオをさげすんで居た。といふのは、彼はヴァランタインのやうな立派な知識もなく、またすぐれた素質も持つて居なかつたからである。

これら二人の戀の競争者、即ちツリオとヴァランタインとが、或日シルビヤを訪れ、ヴァランタインは、ツリオの云ふ事々を笑ひ物にしてシルビヤを喜ばせて居ると、その時外ならぬ公爵がその室に入つて来て、ヴァランタインに、その友プロウチュースがやつて来たといふうれしい知らせをした。ヴァランタインは云つた。

『もし私が一事でも望んで居たことがあつたとすれば、彼に此處で會ひたいと云ふことで御座いました。』それから彼は公爵に向つて、プロウチュースの事をほめたてた。

『閣下、私はこれまで懶惰に過して参りましたが、私の友人は時を徒らに過す事なく、大層勉強して、人格に於ても精神に於ても、又紳士を飾るあらゆる品位に於ても、まことに申分のないもの

でございます。』

『では彼の徳にふさはしい歓迎をなさい。』と公爵は云つた。『シルビヤ、私はお前に云ふのだよ。それからツリオ君、君にもだ。ヴァランタインにはさうせよと云ふには及ぶまい。』彼等の話はこゝで、プロウチュースの入來によつて遮られた。そしてヴァランタインは、

『姫君、私同様あなた様に忠實に仕へる人間としてこの友を御待遇下さいませ。』と云つてプロウチュースをシルビヤに紹介した。

ヴァランタインとプロウチュースとが彼等の訪問を終つて二人きりになつた時、ヴァランタインが云つた。

『さあ聞かせて呉れ給へ。君が後にして来た故郷では皆變りはないか。君の戀人はどうして居るか。君の戀の發展はどんな具合だ。』プロウチュースはこれに答へて、言つた。

『僕の戀物語は君を困らせたものだつた。君が戀の話を好まないのはよく知つて居る。』

『さうだ、プロウチュース。』とヴァランタインが云つた。『あゝした生活は今も變つた。僕は戀を呪つた事を後悔して居る。といふのは僕が戀を輕蔑した復讐として、戀は僕の閉ぢて居る眼から眠を追ひ出してしまつた。おゝなつかしいプロウチュース、愛の神は偉大な力をもつて居る。そして僕を非常に謙遜にさせたので、僕は戀の神の徴戒ほど怖ろしいものはなく、戀の神に仕へる程うれしい事は此

の世にはないと告白する。僕は今は戀以外の話は好まない。今は三度の食事も、眠も、愛の神の名によつてのみする事が出来る。』

戀がヴァランタインの性質に與へた變化についての此の告白は、その友プロウチューズに大なる勝利を感じしめた。その友と云つたが、もはやプロウチューズは友と呼ばれる資格はなかつたのである。何故なれば、外ならぬ偉大な力をもつた愛の神が、その事を二人が話して居る間にも（さうだ、その神がヴァランタインに與へた變化を話して居る間にも）プロウチューズの心の中で働いて居た。そして眞實の愛情と完全な友情との化身であつた彼は今、シルビヤを只一度一寸見たばかりで、不實な友人となり、まことの無い戀人となつてしまつたのである。と云ふのはシルビヤを一目見ると、ジューリヤに對する戀は忽ち夢のやうに消え去り、ヴァランタインに對するながい友情も、彼がヴァランタインに取つて代つてシルビヤの愛情を得ようとする努力を止める事は出来なかつた。そして、天性善良な性質の人間が不正を冒すやうになる時いつもするやうに、彼もジューリヤを棄て、ヴァランタインの競争者となることを随分躊躇はしたけれども、それでも遂に義務の觀念にうち勝ち、殆んど何等悔恨することなく、彼の新しい不幸な情熱に身を委ねてしまつた。

ヴァランタインはプロウチューズに、その戀の始終や又如何に二人が注意深く、この事を父侯爵に秘して居るかを打明け、それから、到底その承諾を得る見込はないので、シルビヤを説きすゝめて、その夜

父の宮殿を去り、彼と共にマンチューアに行く事に取り定めし事を語り、また、日暮後、シルビヤが宮殿の窓の一つから遁れ出るのを助けるために用ゐる積りだと云ふ繩梯子をプロウチューズに見せた。

友人が大切な秘密を、自分を信じて精しく話してきかせたのを聞いた時、プロウチューズは侯爵のところへ行つて、始終の秘密をあげかうと決心した。それは殆ど信じられぬやうな事ではあるけれども、しかし實際さうであつた。

この不實な友人は、友情の律をもつてすれば自分が今申しあげて居るやうな事は秘すべきが當然であるけれど、侯爵が自分に與へられた厚遇と、自分が侯爵に對して盡さねばならぬ義務とが、他の世間的利益のためならばどうしてもしないやうな事を自分にさせずにをかかない、といつたやうな巧妙な辯舌をもつて、その物語を始めた。それから彼はヴァランタインからきいた事をすべて、繩梯子の事もまたヴァランタインがそれを長い上衣の下にどんな風にして隠さうとして居るかと云ふ事も、すつかりもれなく話した。

侯爵は、プロウチューズが不正な行を秘して置くよりもむしろ、その友人の秘密を語る事を選んだと云ふ點からをして、彼をこの上もない完全無缺な人間だと思つた。それで侯爵は大いに彼を賞揚しヴァランタインには誰から秘密をきいたかを知らせないで、ヴァランタインに自ら秘密を曝露させるやうに何とか工夫しやうと約束した。この目的のために、侯爵はその夜ヴァランタインの來るのを待つて

居たが、やがて彼が大急ぎで宮殿の方へ来るのを見、かつその上衣の中に何か包んで居るのを認めてそれは繩梯子であると断定した。

侯爵はそれを見ると、彼を呼びとめて云つた。

『そんなに急いで何處へ行くのか。ヴァランタイン。』

『閣下。』とヴァランタインが云つた。『私の手紙を父のところへ持つて行く使者が待つて居りますからその者に手紙を渡しに参るので御座います。』さてこのヴァランタインの偽も、プロウチースがその父に向つて云つた嘘言同様首尾よく行かなかつた。

『重大な手紙かね。』と侯爵は尋ねた。

『閣下。』とヴァランタインが云つた。『私が無事にかつ幸福に、閣下の宮廷で過して居ると云ふ事を知らせてやるだけで御座います。』

『あゝ、ではかまはない。』と侯爵が云つた。『一寸私の處へ來給へ、私一身の上に重大な関係のある或事件のことで君に相談したい事があるから。』それから侯爵は彼の秘密をひき出す序言として作り話をし、ヴァランタインも知つて居る通り、彼は娘をツリオにめあはせたいのであるが、娘は片意地で、彼の命令に従はないと云つた。

『娘は、私の子供らしく私を尊敬もしなければ、また私を父として怖れもしない。で私は君にかう申

しあげてもよい。娘のこの高慢のために私の娘に對する愛情が消え去つたと。私は老後を娘の孝行によつて楽しく過さうと思つて居た。だが今は私は妻を迎へ、娘は誰でも娘を貰ひたい人にやつてしまはうと決心して居る。美しさが娘の持参金だ。娘は私も私の財産も重じては居ないのだから。』と侯爵は云つた。

ヴァランタインは、一體此の話はどういふ結末になるのか知らとあやしみ乍ら答へた。

『で閣下は此の事件に關して私にどうせよと申されるので御座います。』

『なに、』と侯爵は云つた。『私の結婚したいと思ふ婦人は美しく、内氣で、私のように年をとつたものがいくら巧に説いても、大してそれを重じない。その上に求婚の習慣も、私が若かつた頃から見れば大層變つて居る。で私は君を師として、どうして求婚すべきかを、教はりたいと心から思つて居るのだ。』

ヴァランタインは、當時の青年が美しい婦人の愛を得ようとする時に、實際にやつて居る求愛の一般的な様式、即ち贈物をする事とか、度々訪問をする事とかいふような事を話した。

それに對して侯爵は、その婦人が自分の贈物を受けなかつたと云ふ事、又彼女はその父親に非常に嚴重にされて居るので、晝は如何なる男でも彼女に會へないだらうと云つた。

『では、』とヴァランタインは云つた。『閣下は夜御訪ねにならなければなりませんね。』

『然し夜は。』と抜目のない侯爵は云つた。彼は今その話の中心點に接近しつゝあるのであつた。『彼女の室の扉は錠がをろしてあるのだ。』

すると、ヴァランタインは不幸にも、侯爵は夜繩梯子を用ゐて婦人の室に忍び込まれたがよいと提議し、その目的に適する繩梯子を彼のために手に入れて差上げようと云ひ、最後に、その繩梯子は、自分が今着て居るような上衣の下にかくすがよいと忠告した。

『では君の上着を貸し給へ。』と侯爵は云つた。彼はその上衣を脱がせる口實を得るために、わざと此の長い話をこしらへたのであつた。でかう云ふや否や、彼はヴァランタインの上着を捕へ、それを後に投げて、繩梯子を發見した計りでなく、シルピヤからの手紙をもみつめて、直にそれを開いて讀んだ。此の手紙には二人がもくろんだ墮落の事が詳細にかいてあつた。侯爵は自分の示した厚遇に酬ゆるに娘を盗み去らうとするような忘恩をもつてしたヴァランタインを責めた後、宮廷及びミランの市から永遠に彼を追放した。でヴァランタインは、シルピヤに逢ふ事すらも出來ずに、その夜よぎなく出發しなければならなかつた。

プロウチースがミランに於て、かやうにヴァランタインを苦しめて居る間に、ヴェロウナでは、ジュリアがプロウチースの居ないのを悲しんで居た。そして彼女の彼を思ふ心は遂に、その女らしい分別をも失はせてしまひ、彼女はヴェロウナを後にして、ミランに居る戀人を探しに行かうと決心した。で、

途中で危険がないようにと、召使のルセッタに男装せしめ、自分も男装した。そして二人はこのやうに變装して出發し、ミランに到着したのは、ヴァランタインがプロウチースの裏切によつて、その市から追放されて間もない時であつた。

ジュリアは正午頃ミランに入り、一つの旅舎にやどをとつた。そして彼女はなつかしいプロウチースの事計り考へて居たので、プロウチースの便りを知るよすがともならうと思つて、宿の經營者、即ち主人と談話を始めたのであつた。

主人は、その様子から判斷して、身分のある人だと思つたこの美しい若い紳士（彼は彼女を紳士だと思つて居たのである）からかやうに隔てなく話しかけられて大層喜んだ。それに人のよい人間だつたので、紳士の様子が愁はしげなのを見て氣の毒に思ひ、この年若い客人を慰めるつもりで、或る結構な音樂をきくに連れて行かうと申し出た。彼の話によると、その音樂は或る紳士がその晩彼の戀人をもてなすために奏する事になつて居たのである。

ジュリアがかくも憂愁に沈んで居るように見えた理由は、彼女がした無謀な舉動を、プロウチースがどう思ふだらうかとそれが分らなかつたからである。といふのは、彼女は、自分のりつばな處女としての氣位と上品な性格とのために、プロウチースが自分を愛して居たのだといふ事を承知して居り、またこんな事をしたために彼の自分に對する尊敬の念を弱くはしないかと心配したからである。

彼女に愁はしげな、思ひに沈んだ顔付をさせたのはこの事であつた。

彼女は喜んで、共に行つて音楽をきかうと云ふ主人の申出をうけいれた。それは彼女がそのついでにプロウチューズに逢へるかも知れないと、心ひそかに思つたからである。

しかし彼女が主人に案内された宮殿についた時に、深切な主人が考へて居たのとは全く異なつた結果が現れたのである。といふのは、其處で、彼女の心を悲しましめた事には、彼女は自分の愛人、無節操なプロウチューズが窓の下で音楽を奏してシルビヤ姫をもてなし、姫に向つて愛の言葉や讚美の辭を述べて居るのを見たのである。それからジューリアはシルビヤが窓からプロウチューズに言葉をかけて彼がその眞實な戀人を見棄て、又その友ヴァランタインを賣つた事を責めて居るのをもれきいた。そしてシルビヤは、彼の音楽や巧妙な辯舌には耳もかさなないで、窓のところを去つた。彼女は追放されたヴァランタインに忠實な婦人であり、かつ彼の不實な友人プロウチューズの義理をわきまへない行爲を忌み嫌つたからである。

ジューリアはかうした事を目撃して失望はしたけれども、それでも尙ほ不實なプロウチューズを愛して居たので、彼が近頃召使に暇を與へたと云ふ事をきくと、深切な宿の主人の助力をうけて、小姓としてプロウチューズに雇うて貰ふように運びをつけた。でプロウチューズは、それがジューリアであること云ふ事に氣付かなかつたので、彼女に手紙や贈物をもたせて、彼女の戀の敵であるシルビヤの處へやつた。彼は、ヴェロウナで再び遇ふまでのかたみとして彼女の與へた指輪さへも彼女に持たせてやつたのである。

彼女が指輪をもつてその婦人のところへ行つた時、彼女の大變嬉しかつた事には、シルビヤはプロウチューズの求婚を全然拒絶したのであつた。そしてジューリア、彼女が呼ばれて居たやうに云へば小姓のシバスチャンは、プロウチューズのはちめての戀人、すてられた婦人ジュアリアの事に就て、シルビヤと話を始めた。ジューリアは、時には（誰でもする事であるが）彼女自身を辯護し乍ら、自分はジューリアを知つて居ると云つた。それはその筈で噂をして居る彼女自らがジューリアなのだから。でジューリアが如何にその愛人プロウチューズを愛して居たか、又如何に彼の不眞實な行爲が彼女を悲しませるであらうかといふ事を話し、それからかなり意味の複雑した言葉を使つて續けて云つた。

『ジューリアは私くらひの背格好で、私の様な目鼻たちで、その眼や髪の色も私と同じなんで御座います。』又實際少年の服装をして居るジューリアは、この上もなく美しい若者に見えたのである。シルビヤはその話にうごかされて、愛する男にかく悲しくも見棄てられたその美しい婦人を慙んだ。そしてジューリアがプロウチューズの贈つた指輪を差出した時、彼女はそれを拒絶して云つた。

『その指輪をよこすなんて、ます／＼恥知らずと云ふものです。私はそれを受取りません、ジューリアがそれをあの人に與へたのだとあの人自身が云つてゐるのを度々きいた事があるのです。私はあなた

が気に入りました。あなたは可愛相なその婦人に同情してゐらつしやるから。こゝに御金入がありません。ジューリアのために、あなたにそれをあげませう。』彼女の深切な戀の競争者の口から出たこれらのあたくさい言葉は、この變装した婦人のしほれた心をひきたてた。

話かはつて、追放されたヴァランタインは、名譽を失ひかつ追放された人間として、故郷の父の許へ歸る事も好まなかつたので、いづれの方向に行つていゝかも殆ど分らなかつた。彼が、彼の心の大切な寶であるシルピヤ姫を後にして來たミランからさう遠くない淋しい森をさまよひ歩いて居ると、山賊が現れ出て金を出せと要求した。

ヴァランタインは、彼が逆境に苦しんで居る人間である事、追放されて居るところだといふ事、金はもつて居ず着て居る着物が持物のすべてだといふ事等を彼等に告げた。

山賊共は、彼が困つて居る人間であるといふ事をきき、又彼のりつばな様子と男らしい態度に感じて、もし彼等と共に住み、彼等の首領、即ち指揮者となるならば、彼の部下となつてその命令に従はう。もし彼が彼等の申出を拒絶するならば、彼を殺してしまふと云つた。

自分がどうならうとかまはなかつたヴァランタインは、彼等が婦人や貧しい旅人達に對して暴行を加へないといふ條件ならば、彼等と共に住み、彼等の首領にならうと云つた。

かやうにして氣立の立派なヴァランタインは、吾等が歌謡で讀むところのロビン・フッドのように、

山賊及び法外人等の一團の首領となつた。かうした状態に居る時彼はシルピヤに發見されたのであるが、それは次に述べるような方法で起つたのである。

シルピヤは、父に強ひられて、も早拒絶する事の出来ないやうになつたツリオとの結婚をさけるために、遂にヴァランタインの後を追うてマンチュアに行かうと決心した。そのマンチュアに彼女の戀人は假の住家を求めて居ると彼女はきいたのであつた。しかしこの話は誤聞で、彼は尙ほ山賊に交つて森の中に住み、彼等の首領といふ名前ももつて居たけれど、彼等の奪掠には加はらず、彼等が彼に與へた權力を、彼等に掠奪された旅人に對して、彼等に憐れかけさせるようにする以外には用ゐなかつたのである。

シルピヤは身分のある老紳士を一人件につれて父の宮殿を通れ出た。その老紳士の名はイグラマアと云つたが、彼女は彼を途中の護衛のために一緒に來させたのである。彼女はヴァランタインとその部下の山賊の群が住んで居る森を通らなければならなかつた。そして盜賊の一人はシルピヤを捕へ、更にイグラマアをも捕へたかつたのであるが、彼は早くも逃げ去つてしまつた。

シルピヤを捕へた盜賊は、彼女が大層恐怖して居るのを見て、彼は只彼女を彼の首領が住んで居る洞窟へ連れて行くだけだから、驚く事はない。又彼の首領は立派な心をもつて居り、婦人に對してはいつも情をかけるのだから何も心配する必要はないと云つた。シルピヤは捕虜として無法な山賊の首

領の前に連れて行かれるのだといふ事をきいて、少しの慰めもを發見する事は出来なかつた。

『おゝ、ヴァランタイン。』と彼女は叫んだ。『あなたゆゑに私はこの艱難をするのです。』

しかしその盜賊が彼女をその首領の洞窟に連れて行き、あつた時、彼はプロウチューズによつて遮りとめられた。プロウチューズはシルビヤの遁走をきき、小姓に變装して居るジューリアを連れて、シルビヤの後を追うて此の森にやつて來たのであつた。彼は今シルビヤを盜賊の手から救うたが、彼女が自分に對して盡して呉れた事の禮を彼に向つて云ふ間もあらず、又もや彼の求愛で彼女を困らせ始めた。そして彼女に彼と結婚せよと亂暴に強ひて居り、彼の小姓(へみすてられたジューリア)は、プロウチューズがいまシルビヤに對して盡した大なる奉公が、シルビヤを動かして彼に何かの厚意を示させるようになりはしないかと懸念し乍ら、大層やきもきして彼の傍に立つて居る時、突然ヴァランタインが現れたので彼等は皆ことの不思議に驚愕した。ヴァランタインは彼の部下が婦人を捕へたといふ事をきいて、その婦人を慰め且つ放免しようと思つてやつて來たのであつた。

プロウチューズはシルビヤに求婚して居たのであるが、友人にそれを見付られた事を非常に恥ぢたので、悔悟の念が起り良心の呵責を感じた。で彼はヴァランタインに向つて、毀害を與へたことを心から謝したので、物語めいて居るといつてもよい程に高潔で寛大な性質をもつて居るヴァランタインは、彼を赦し、以前の友情を恢復したのみならず、急に妙な義氣を出して云つた。

『僕は喜んで君を赦す。また僕がシルビヤに對してもつて居たあらゆる權利を君にゆづらう。』

主人の傍に小姓として立つて居たジューリアは此の風變りな申出をきき、またかように云はれては、プロウチューズもシルビヤを斷念する事は出来ないだらうと心配して、氣絶してしまつたので、彼等はみな彼女の介抱にとりかゝつた。でなければシルビヤは、かやうにヴァランタインが自分をプロウチューズに譲つたのをきいて、氣を悪くして居た事であらう。かうした過激な寛大すぎる友情行爲を、ヴァランタインがさうなく辛棒する事は出来ないだらうと思ひはしたけれども、ジューリアは氣絶を恢復した時に云つた。

『私は忘れてゐました。主人から此の指輪をシルビヤに渡すように申しつかつて居ました。』プロウチューズはその指輪を見て、それがジューリアから貰つた指輪、即ちそれを小姓だと思つて居るジューリアに持たせてシルビヤに贈つた、あの指輪の返しとして自分がジューリアに贈つたものであると云ふことを知つた。

『これはどうした事だ。』と彼は云つた。『これはジューリアの指輪だ。どうしてお前はこれを手に入れたんだ。』

『ジューリアが自分でそれを私に呉れたのです。そしてジューリアが自分でそれをこゝへもつて來たのです。』



するとプロウチューズは熱心に彼女をながめて、小姓のシバスチャンが外ならぬジューリヤ自身であることを明かに認めた。そして彼女の示した節操と眞の愛情の證據とが、ひどく彼の心を動かしたので、彼女に對する愛情が彼の胸によみがへり、再び彼自らの戀人をむかへ、シルビヤに對するすべての要求權は彼女に最もふさはしいヴァランタインに譲つたのである。

プロウチューズとヴァランタインが和解し、また眞實な婦人達の愛を得て、その幸福を語り合つてゐると、その時シルビヤを追つてそこにやつて來たミラン侯とツリオの姿が見えたので二人はびつくりした。

ツリオが先づ近づいて來て、

『シルビヤはわがものだ。』と云ひ乍ら彼女を捕へようとした。これをきくと、ヴァランタインはきつとした態度で彼に向つて云つた、

『ツリオ退つて居れ。シルビヤが汝のものだぞと今一度云はうものなら、汝の命はないぞ。さあシルビヤは此處に立つてゐる。指一本でもかけて見よ、わが戀人に息一つかけられるならかけて見よ。』この脅迫をきいて、元來が大層憶病者のツリオは、しりごみをし、そしてシルビヤなんか欲しくはない。又自分を愛しても居ない女の爲めに決闘するなんて馬鹿者でなくて誰がするものかと云つた。自らも又すぐれて勇敢な人間である侯爵は、かうなると大變に怒つて云つた。

『御前の性質中にあるもつと卑しい、もつと随落したものが、娘に對して今のやうな態度をとらせ、又あんな薄弱な條件で娘を棄てるやうにしたのだ。』それからヴァランタインの方に向つて彼は云つた。『あなたの勇氣には心から感心した、ヴァランタイン。あなたは女王の愛をも得る資格がある。あなたにシルビヤを差しあげよう。君は娘を得るにふさはしい働をしたのだから。』それでヴァランタインは大層謙讓に侯爵の手にキスをし、ふさはしい感謝をあらはして、侯爵が彼に與へた姫と云ふ尊い贈物をうけた。そしてこの喜ばしい機會を利用し、氣嫌のよい侯爵に、彼が森で共に住んで居た山賊共を赦されん事を懇願し、もし彼等に行をあらためさせ、再び社會に出してやれば、彼等の中にはたしかに、善良で重大な任務に適する人間が澤山あるであらう。といふのは彼等の多くは、その犯した邪惡な罪のためといふよりはむしろ、國事にふれて、彼自らのように追放されたものであるからといふことを告げた。この懇願を侯爵は直ちに承諾した。これで殘されて居る事とはたゞ、不實な友人であつたプロウチューズが、戀ゆえに犯した罪の懺悔として侯爵の前に出で、彼の戀のいきさつや虚偽の事やをすつかり物語らなければならぬ事であつた。そしてその物語をする事は良心に目醒めた彼にとつては實に恥かしい事であるから、それが十分の懲罰だと判斷された。それがすむと、戀人達は四人連でミランに歸つた。そして彼等の結婚は侯爵出席のもとに、盛大な祝典と饗宴を催して舉行されたのである。



シャイロックといふ猶太人がヴェニスに住んでゐた。彼の商賣は高利貸で、基督教徒の商人達に高利の金銭を貸して莫大な財産を貯めてゐた。シャイロックは無情な男で、貸した金は厳しく取り立てるの  
 で、善人からは皆嫌はれてゐた。就中ヴェニスの若い商人のアントウニオから激しく嫌はれてゐた。シャ  
 イロックも同じやうにアントウニオを憎んでゐた。と云ふのは、アントウニオはよく困つてゐる者に金  
 錢を貸してやつて、決して利息を取らなかつたからであつた。そこで此の貧愁な猶太人と義侠心に富  
 んだアントウニオとの間にはいつも甚しい敵意があつた。アントウニオがリアルト(市場のこと)でシャ  
 イロックに出逢へば、きまつて彼の高利と酷い取引を非難した。猶太人はそれを表面上は堪へて聞  
 いてゐたが、心の中ではいつか仇を打つてやらうと思つてゐた。

アントウニオは世にも稀な深切な心と、善良な性質を持つた男で、人に深切を盡すのに倦きると云ふ  
 事がなかつた。實に彼は當時の伊太利に於て如何なる人よりも最もよく古の羅馬人の尊敬すべき精神  
 を現はしてゐた。彼は仲間の市民からも非常に愛されてゐたが、彼が心から深く愛してゐた親友は、  
 パッサニオと呼ぶヴェニスの貴族であつた。此のパスサニオは親から譲り受けた財産は僅かであつた  
 が、金のない若い貴族の例に漏れず其の尠い収入の割に非常に派手な生活をしたので、今はもう殆んど

多くもない其の財産を使ひ果してゐた。それでパスサニオは金が必要な時にはいつもアントウニオの  
 助けを借りた。二人の間には一つの心と一つの財布しかないやうに見えた。

或る日パスサニオはアントウニオを訪れて、自分が非常に愛してゐる金持の令嬢と結婚して、傾いた  
 財産の整理をしようと思ふと話した。其の令嬢の父は最近亡くなつて、彼女は今は大財産の唯一の相  
 續人となつた譯であるが、父親が生きてゐた時分はよく訪ねて行つた事もあるし、又時々令嬢の眼  
 の中に、彼が決して好ましくない求婚者ではないといふ無言の意味を讀んだ事もあると思つた。しか  
 し乍ら大金持の令嬢の戀人に相應しいほどの身なりを飾る金もなかつたので、重ね々（一）の恩恵を受け  
 ることにはなるが、何うか三千ダカ（一）だけ借して貰へまいかとアントウニオに頼  
 んだのであつた。  
（一）ダカットは約一  
 千七百五十錢

アントウニオは生憎と、其の時貸すだけの金を持ち合せて居なかつた。しかし間もなく商品を積ん  
 だ商船が幾許か入港することになつてゐたので、其の船を抵當にして、金持の金貸、シャイロックの所  
 に行つて借らうと言つた。

そこでアントウニオとパスサニオは一緒にシャイロックを訪ねて、この猶太人に、利子は好み次第、  
 金は今航海してゐる船の商品で支拂ふから三千ダカ（一）程貸して呉れと、アントウニオが頼んだ。これ  
 を聞いて、シャイロックは心のうちで、

『一度奴を不利の位置に陥れて置けば、積る恨みを思ふ存分晴らす事が出来るわい。奴はわれ／＼猶太人を憎んでゐる。そして無利息で金を貸すし、商人が大勢ゐる前で俺の悪口や、克く働いて儲ける取引を高利だと云ひやがつて悪く云ふ。若し奴を赦さうものならわが種族の名折れだ！』

アントウニオは、彼が考へこんで返事をしないのを見ると、待ち切れなくなり、

『シャイロック、聞いて呉れるかね。金を貸して呉れるだらうね。』

この質問に猶太人は答へて言つた。

『アントウニオさん、あなたは幾度も幾度も市場で私の金の事や利子のことと悪口を云ひなすつた。だが私は忍耐深く知らぬ振りで我慢して來ました。苦しみに耐へるのはわが種族の特徴ですからね。がそれ許りでなくあなたは私を不信者だの、人殺し犬だのと仰有つて、私のこの猶太服の上に唾を吐きかけたり、まるで野良犬かなどのやうに足蹴にしたりなすつた。そこでですよ、今度あなたは私の助けが御要りになる様子、私の所へやつて事て、これシャイロック、金を借せと仰有る。犬に金が有りませうかい。野良犬が三千ダカット用立てる事が出来ませうかね。それとも私はべこ／＼御辭義をして、はい貴方様、先週の水曜日に貴方様は私に唾を吐きかけなさいました。又いつぞやは私の事を犬と仰有いました。かういふ禮義に報ひる爲めにお金を御貸し申し上げますと云ふものですかね。』

『僕は君のことを矢張りさう云ふよ。唾もひつかけよ。足蹴にもするよ。若し金を貸して呉れるつ

もりなら、友人のつもりで貸してくれては不可ない。敵に貸すつもりで貸して呉れ給へ。僕が違約すれば大威張りで罰金をとつてもいゝからね。』とアントウニオは言つた。

『まあ／＼氣を御付けなさい。』とシャイロックは、

『亂暴な事を仰有いますね。私はこれから貴方に友達になつて戴きたいのです。それで貴方から受けた恥辱も忘れてしまひませう。そして御入用だけ御貸しませう。利子は一文も要りませぬ。』

此の外見上の深切はアントウニオを非常に驚かせた。シャイロックは尙も深切を装うて、自分の爲る事は皆アントウニオによく思はれたい許りなのであるから、三千ダカットをお貸して、利子は一文も申し受けませぬと繰り返した。唯、アントウニオに辯護士の所へ一緒に行つて貰つて、ほんの冗談に、若し一定の期日まで金を返すことが出来ぬ場合、アントウニオの身體からシャイロックの好きな所の肉を一ポンドだけ没收してもいゝといふ證書に署名して貰ひたいといふのであつた。

『よろしい、其の證書に署名をし、猶太人も仲々深切だと云はふ。』

パッサニオはアントウニオに、そんな證書に署名をしてはならぬと言つた、がアントウニオは期日迄には其の金額の幾層倍かの品物を積んで船が歸る筈だからと其の言葉を聞き入れなかつた。

此の争を聞いたシャイロックは叫んだ。

『おゝ父エイブラハムよ！基督教徒は何て疑ひ深いのでせう。自分達がひどい取引をしてゐるものだ

*Christ*

から、人の心も疑ふやうになるのですね。パッサニオさん、何うか仰有つて下さい、アントウニオさんが期日を破つたとして、私が無理に其の没收をしても、それが私の爲めにどんな利益になるのですか？人間から一ポンド肉を取つても、それは牛肉や羊肉と違ひ何の値もなければ役に立ちません。これから最良にして頂きたい許りに、かう云ふ好意の申出をします。受けて下さればそれでよし、お受けにならなければそれまでです。』

パッサニオは、猶太人が好意づくから爲るのだと言つたに係はらず、自分の爲めに友人がそんな怖ろしい罰を受けるやうな危険を冒すことを好まなかつたので、止めるやうに忠告したがアントウニオは聞き入れないで、(猶太人が言つたやうに)ほんの冗談のつもりで、其の證書に署名してしまつた。

パッサニオが結婚したいと望んでゐる金持の相続人は、ヴェニスから程遠からぬベルモットと云ふ所に住んでゐた。名をポウシヤと呼び、容貌と云ひ心立てと云ひ其の立派なことは、誰も讀んで知つてゐる古のケイトウの娘であり、ブルウタスの妻であるポウシヤにもおさおさ劣らなかつた。

パッサニオはアントウニオが命を賭けてまで調べて呉れた金を以て、立派な供揃へをし、グレンシアノと云ふ紳士を従へてベルモットへ出發した。

パッサニオは此の求婚に成巧した、ポウシヤは直に彼を自分の夫として迎へる事を承諾した。

そこでパッサニオはポウシヤに向つて、自分には何等の財産もない事、唯誇るに足るものは貴族の

生れと立派な祖先だけであるといふ事を告白した。パッサニオの立派な人格を愛し、また夫の富を當てにする必要のない程の富を持てゐたポウシヤは、夫を辱かしめない爲めに自分をもつと美しく、更にもつと金持であればよかつたにと、優しく謙遜して答へた。それから才藝優れたポウシヤは、可なりひどく自分の缺點をあげて、羨もなく、教育もなく、訓練もない者であるが、これから勉強しても遅くはないと思ふので、自分の素直な心は夫へ任せる故萬事につけ指導、教育して貰ひたいと述べ、尙ほ續けて、

『私も私のものも、今はもうすつかり貴方のもので御座いますわ。昨日まで私は此の立派な邸宅の主人であり、他から支配を受けぬ自身の女王であり、大勢の召使どもの女主人でございましたけど、今はこの家も、召使も、私自身も貴方のもので御座いますわ。此の指環と共に差し上げませう。』と言つてパッサニオに指環を渡した。

パッサニオは富裕な氣高いポウシヤが財産もない自分をこれほど迄に優しく受け入れて呉れた事に對する感謝と驚愕の念に壓倒されて、自分を崇めてくれた愛する婦人に對して、唯とぎれ／＼の愛と感謝の言葉より外に喜びと尊敬の情を云ひ表はすことが出来なかつた。彼は指環を取り上げて、決してこれは身を離さぬと誓つた。

ポウシヤの侍女であるネリッサと、グレンシアノの兩人は各々の主人の傍に控へてゐたが、ポウシヤが

パッサニオの柔順な妻になる事を優しく誓つたとき、グレシアノは進み出てパッサニオと令嬢に喜びを述べてから、どうか自分も同時に結婚する許しを頂きたいものであると願つた。

『よろしいとも、グレシアノ。相手さへあれば。』とパッサニオは言つた。

するとグレシアノは、ポウシヤ令嬢の美しい侍女のネリッサを自分は愛して居り、彼女も、令嬢がパッサニオと結婚されるれば妻にならうと約束してゐることを述べた。ポウシヤはネリッサに其は本當の事かと訊ねた。するとネリッサは、

『さやうで御座います。御嬢様さへ御許し下さいますれば。』

ポウシヤは喜んでこれを許し、パッサニオも愉快さうに言つた。

『われ／＼の婚禮の祝宴は、君達の結婚によつて一層光榮あるものとならう。』

戀人達の幸福は、此の時突然這入つて來た使者で痛ましくも破れた。使は、怖ろしい報知を書いてあるアントウニオからの手紙を持つて來たのであつた。パッサニオは其の手紙を読むと眞青になつたので、ポウシヤは誰か親友の死去を知らせて來たのではないかと心配した。そしてそれ程まで彼を悲しませた報知が何であるかを訊ねた時、パッサニオは言つた。

『おゝ愛するポウシヤ。ここに書いてある言葉は、これ迄書かれた事もない程不愉快な事なんです。私が最初あなたに愛を打ち開けた時、私は包まずに、私の財産といふのは、唯私の血管を流れてゐる

血統だけだと云ふ事を申しました。併し私は、無一物よりもつと悪いといふ事を御話しなければならなかつたのです。私は借金をしてゐます。』

パッサニオはポウシヤに向つて、これ迄述べたやうな事を、即ちアントウニオから金を借りた事、アントウニオは猶太人のシャイロックから其の金を融通して貰つた事、一定の期日まで金を返さぬ時は、アントウニオは自分の肉を一ポンド罰に出すといふ證文を入れた事など話した後、アントウニオの手紙を読んできかせた。それはかうであつた。

なつかしきパッサニオ様。僕の船はみな沈んでしまいました。僕は猶太人の證書に書いてある罰を受けなければなりません。罰を受ければ生きてゐる事は不可能ですから、死ぬ前に一度御目にかかりたいと思ひます。併しそれは勝手にして下さい。私を思つて來たいと思はれるのでなければ、此の手紙の爲めに來ては下さらないやう願ひます。

『おゝ愛するあなた、出来る丈け早く用事を片付けて、御出かけなさいませ。此の深切なお友達が私の愛するパッサニオの落度の爲めに髪の毛一筋でも失はれぬうちに、其のお金を二十倍にして上げますから早く御支拂ひなさいまし。そんなに高いお金で買つた貴方ですから猶のこと愛して差しあげます。』

ポウシヤは彼女の財産に對する法律上の権利を與へる爲め、パッサニオが出發する前に結婚をしよう

と言つた。そこで其の日二人は結婚をし、グレンシアノウもネリッサと結婚をした。此の婚禮が済むとパッサニオとグレンシアノウの二人は大急ぎでヴェニスに向つて出發した。着いてみるとアントウニオは既に牢に入れられて居た。

支拂の期日は切れてゐたので、残酷な猶太人は、パッサニオが提供した金は受け取らず、何うしてもアントウニオの肉を一ポンド取ると主張した。ヴェニスの公爵の前で此の怖るべき事件の裁判の日が取り定められた。パッサニオは居たゝまらないやうな不安の裡に此の裁判の結果を待つた。

ポウシヤは夫を送り出すとき、快活さうに、歸りには其の愛する友人を伴れて来て呉れと頼んだが或はアントウニオにとつて不利な立場になりはしないかと心配した。で一人になると、どうかして愛するパッサニオの友人の命を救ける工夫はないものかと、いろ／＼思ひ巡らした。ポウシヤはパッサニオを崇めようとする時には、彼の優れた智慧に萬事を任せ、其の支配を喜んで受けるほど柔順に妻らしい優しさを以て話したのであつたが、今大切な夫の友人の危難に際して振ひ立つて活動をしようとする、彼女は自分の力を少しも疑はず、全く自分一人の正しい完全な判断の導くままに、直にヴェニスに行つてアントウニオの辯護の爲めに盡さうと決心した。

ポウシヤには辯護士をしてゐる親戚があつた。此のベラリオと呼ぶ紳士に手紙を書いて、事件を悉しく述べ、其の意見を求め、忠告と共に辯護士の着物を送つて呉れるよやうに頼んだ。使者は、如何に處置すればいいかといふベラリオの忠告の手紙と、彼女の支度に必要な一切のものを持つて歸つて來た。

ポウシヤとネリッサは共に男の風を装ひ、辯護士の上衣を纏うて、ネリッサを書記のつもりにして伴れることにした。二人は早速出立して恰度裁判が開かれると云ふ日にヴェニスに到着した。裁判はヴェニスの元老院で、公爵や元老達を前にして將に開かれようとしてゐた。此の時、ポウシヤはこの高等法院に這入つて、ベラリオからの手紙を差し出した。それは博學の辯護士が公爵に當てたもので自身でアントウニオの辯護に行くつもりであつたが、病氣の爲め其の意を果さぬので、自分の代りに博學の若い博士バルザア(彼はポウシヤをさう呼んだ)に辯護の許可を與へて頂きたいと云ふ趣きが書いてあつた。公爵はこれを許可して、見知らぬ男の若々しい姿を訝かしさうに見遣つた。彼女は辯護士の服と大きな鬘をもつて可なりよく變装してゐた。

今この重大な裁判が始まつた。ポウシヤは四邊を見廻して無情な猶太人を見た。パッサニオをも見た。併し彼は彼女の變装に氣が附かなかつた。友人を思ひ、不幸と恐怖の苦惱にみちてアントウニオの傍に立つてゐた。

ポウシヤは自分が従事した困難な仕事が非常に重大なるを知ると、女乍らも勇氣を震ひ起し、大膽に自分のなすべき義務に突進した。彼女は先づシャイロックに向つて口を開いた。シャイロックはヴェニ

ス法律によつて、證文に書かれた抵當を受け取る権利がある事を是認し、其の後で、如何なる心をも和げるやうな巧みな言葉で、シャイロックの無情な心だけは例外であるが、慈悲の氣高い性質に就いて述べた。それは、慈悲は慈雨の如く天より地にしたり落ちる。慈悲を與ふる者も、受くる者も共に恵みを受くる故、慈悲には二重の祝福がある。慈悲は神そのものの屬性である故王にとつては其の冠よりも更に似つかはしきものである。慈悲によつて正義の厳しさを和らげ得るにつれて、地上の力あるものは神に近づくのである、と述べ、更にシャイロックに向つて、われ／＼はみな神の慈悲を祈るものであるから、其の同じ祈によつて慈悲を施すべき術を又學ぶべきであると言つた。しかしシャイロックは唯證文に書いてある抵當を取りさへすればいいと答へた。

『アントウニオは金を支拂ふことが出来ぬか。』とポウシャは尋ねた。そこでパッサニオは猶太人が望む丈の三千タカットの幾倍にても支拂はふと申出たが、シャイロックは其を拒絶して頑固にアントウニオの肉の一ポンドを取ると言ひ張つた。パッサニオは博學の若い辯護士に、アントウニオの命を助ける爲め何とか少々法律の手加減をしてくれと嘆願した。しかしポウシャは嚴かに一度定められた法律は決して枉げる事はならぬと答へた。シャイロックはポウシャが法律は枉げることはならぬと言つたのを聞いて、自分の有利な辯護をして呉れるものと思ひ、

『ディニエル様のやうな御方が裁判に御出でになつた。あゝ賢明な若い裁判官様、私は實に推服いたします。あなた様は見かけよりも仲々老巧で御出でになります。』

ポウシャはシャイロックに其の證文を見せてくれと言つた。彼女はそれを讀み終へてから、

『此の證文は罰金を支拂はせてもいゝ事になつてゐる。即ち猶太人は正當に、肉の一ポンドをアントウニオの胸のあたりから自身で切り取ることを請求しても宜しい。』と言つて、シャイロックに、

『慈悲をかけてやれ。金をとつて私に此の證文を裂かして呉れ。』

残酷なシャイロックは少しも慈悲を示さうとはしなかつた。そして言つた。

『私は誓つて申します、人が何と云はうと此の決心を變へることは出来ません。』

『それではアントウニオ。』とポウシャはアントウニオの方に向いて、

『胸を開いて小刀を受ける用意を致せ。』

シャイロックは一ポンドの肉を切り取る爲めに、非常な熱心さで小刀を研いでゐると、ポウシャはアントウニオに言つた。

『何か言ひ残すことは無いか。』

アントウニオは、死ぬる覺悟はとくに定めてゐたので、別に言ひ残すこともないと靜かな諦めを以て言つた。そしてパッサニオに向ひ、

『握手をしてくれ給へ、パッサニオ！御機嫌よう！君の爲めこんな不幸なことになつたと嘆かないで呉



れ給へ。どうか奥さんに宜しく。僕がどんなに君を愛したかといふ事を話してあげて下さい。』

パッサニオは苦痛にみちて言つた。

『アントウニオ、僕は生命よりも大切な妻を娶つてゐる。しかし僕の生命も、妻も、全世界も僕にとつては君の命ほど大切でない。僕はそんなものを皆なくしても可い、君を救ふ爲めには。ここにゐる悪魔に總てを犠牲に供してもよい。』

深切な心をもつたポウシヤは、夫が強い言葉でアントウニオのやうな眞實な友人に對して愛する心持を云ひ表はしてゐるのを見て、少しも腹は立てなかつたが、かう言はずには居られなかつた。

『あなたの奥さんが若しこゝに居て其の申出を聞かれたら、あまり有難くは思はれないでせうよ。』

すると、主人の爲ることを眞似るのが好きなグレンシアノウは、自分もパッサニオの言つたやうな事を言はなければならぬと考へ、ポウシヤの傍で、書記の服をつけて頻りに書きものをしてゐるネリッサに聞える所で、

『私にも妻があります。そして非常に愛してゐるのです。ですが若し此の犬のやうな猶太人の残酷な性質を變へる力を、神に願ふ事が出来るなら、妻は天國へ行つてくれても宜いと思ひます。』

『さう云ふ事は、奥さんの居ないところで仰つた方がいゝですよ。でなければ家に風波が起りませう。』とネリッサが言つた。

シャイロックはもう耐へ切れずに、

『時間が無駄になります。早く宣告を下して頂きたく御座います。』と言つた。法廷にゐるものは皆怖ろしい事を待ち受けた。そしてアントウニオの爲めに悲しんだ。

ポウシヤは猶太人に向ひ、肉を量る秤器は用意してゐるかと思つた後で、

『シャイロック、お前はアントウニオが出血の爲め死ぬるやうな事があると不可ないから、外科醫を呼んで来て置かなければならぬ。』

シャロックの目的はアントウニオが出血の爲め死ぬることであつたから、

『證書には左様な事は書いて御座いませぬ。』とシャイロックは答へた。

『證書には書いてはないが、それが何うしたのだ。その位の情けをかけることは、良い事ではないか。』

ポウシヤにかう云はれても、シャイロックは唯、

『私には見付かりませぬ。證書に書いて御座いませぬ。』と答へただけであつた。

『それではアントウニオの肉の一ポンドは汝のものである。法律はこれを許す、法廷はこれを審判して與へる。お前はアントウニオの胸から肉を切りとつて宜しい。法律はこれを許す、法はこれを與へる。』  
シャイロックは再び叫んだ。

『おゝ賢明な、正しい裁判官様！ デイニル様のやうな裁判に御出でになつた！』

シャイロックは再び長い小刀を研いで、鋭くアントウニオを眺めて言つた。

『さあ覺悟をしろ！』

『暫く待て、猶太人。』とポウシャは制し、

『まだ言ふことがある。此の證書には血は一滴たりとも與ふるとは書いてない、只明らかに肉一ポンドと記してある。若し肉一ポンド切り取る際、基督教徒の血を一滴にても流すに於ては、汝の地所も家財も法律によつてヴェニス州のものとなる。』

アントウニオの血を少しも流さないで一ポンドの肉を切り取ることは、シャイロックにとつて全く不可能のことであつた。證書に書かれてゐるのは唯肉であつて血ではないといふポウシャの此の賢い發見が、アントウニオの生命を救ふた。一同は、幸にも此の妙案を思ひ付いた若い辯護士の驚くべき才能に感嘆し、喝采は元老院の隅々まで鳴り響いた。グレンシアノウはシャイロックが言つた通りの言葉で叫んだ。

『おゝ賢明な正しい裁判官様！猶太人よ、よく聞け、デイニル様のやうな方が裁判にお出になつた！』  
シャイロックは自分が残酷な計畫に破れたことを知ると、失望の色を浮べて、金を受け取らうと云ひ出した。パッサニオは思ひがけないアントウニオの命拾ひに狂喜して、

『さあ金を受けとつて呉れ。』

しかしポウシャはこれを遮つて、

『靜かに。急ぐには及ばぬ。猶太人は罰の肉より外に何も受取ることとは相成らぬ。それ故、シャイロック、肉を切り取る用意をいたせ。しかし血を流さぬやう注意をせよ。又肉は一ポンドより多くも少くも切り取つてはならぬ。假令それが僅か二三分の超過、不足であつても、否髮の毛一筋の相違で秤皿が傾くとも、汝はヴェニスの法律によつて死刑に處せられ、汝の財産は悉く政府に沒收される。』

『金を頂きたい。そして私は歸らせて貰ひます。』とシャイロックが言つた。

『金はここに支度してある。さあ取れ。』とパッサニオが言つた。

シャイロックが金を受け取らうとすると、ポウシャは再びこれを遮つて言つた。

『待て、猶太人。其の方には未だ用がある。汝は此のヴェニスの一市民の生命を奪はうと計つたので汝の財産は當然政府に沒收される。又汝の一命は偏へに公爵閣下の御慈悲のもとにある。それ故跪いて閣下の御慈悲をお願ひ申せ。』

公爵は其の時シャイロックに向ひ、

『われ／＼基督教徒の精神が他のものとどんなに異なるかを示す爲め、汝の願ひを受けるまでもなく一命を赦して遣す。しかし汝の財産の一半はアントウニオに遣し、他の一半は政府で沒收する。』

しかし恵み深いアントウニオは、若しシャイロックが死後其の財産を、娘と娘の夫に譲り渡すといふ

證書に捺印するならば、シャイロックの財産の分け前には與らないと言つた。アントウニオは、猶太人に獨り娘があつて、最近アントウニオの友人ロウレンゾウと云ふ若い基督教徒と、親に背いて結婚し、シャイロックは其の爲めに非常に腹を立て、娘を廢嫡してしまつた事を知つてゐたからであつた。

猶太人はそれを承知した。そして復讐には破れる、財産は奪はれるしたので、

『私は病氣になりました。家に歸らせて下さい。證文はあとで送つて下されば、娘に財産の半分を渡すことに署名しますから。』

『それでは歸つて宜しい。』と公爵は言つて、尙ほ、

『證書には署名をいたせ。若し汝が残酷であつた事を後悔して、基督教徒になれば、政府は汝の財産の一半を没収する罰を赦して遣はす。』

そこで公爵はアントウニオを放免して法廷を閉ぢた。そして若い辯護士の賢明と機智を非常に賞讃して、是非食事を共にしたいと招待した。ポウシヤは、夫の歸らぬうちにベルモットへ歸らなければならぬと考へたので、

『御好意を感謝いたします。しかしこれから直ぐ歸らなければなりませんので。』

公爵は一緒に食事を取る暇のないのを残念がつて、アントウニオに向ひ、附け加へて言つた。

『此の紳士に御禮をなさい。私の考ふる所では、貴方は此の御方のお蔭で助かつたのぢや。』

公爵や元老達は法廷を去つた。そこでパッサニオはポウシヤに向つて、

『實に有難く存じます。私と私の友人のアントウニオは、御蔭を持ちまして今日怖ろしい刑罰を免かれる事が出来ました。猶太人に遣はす筈の此の三千ダカットを何うか御納め願ひたく存じます。』と言つた。

アントウニオも、

『私共は、此のお禮以上に閣下の御恩を永久に感じまして、敬愛の意を表したいと存じます。』と附け加へた。

ポウシヤは金を受けとる事を何うしても承知しなかつた。がパッサニオに何か報酬を取つて呉れと頻りに説かれたので、

『それでは貴方の手袋を下さい。あなたの記念にはめますから。』と言つた。パッサニオが手袋を外すと、彼女は自分が與へた指環を彼の指に見た。此の技巧たつぷりな夫人が、わざ／＼手袋を脱がせて彼から得たいと考へたものは、實に此の指環で、今度パッサニオと逢ふとき冗談の種にしようと思つたからであつた。

『それから御好意に甘えて此の指環を頂きませう。』

パッサニオは、手離してならない只一つのものを辯護士に乞はれて、非常に當惑し、この指環は妻

が呉れたもので、決して身を離さぬと誓つたものであるから、これ許りは差し上げられないと、どきまぎし乍ら答へた。其の代りにヴェニス中で最も高價な指環を廣告によつて探し求めて差し上げるからと言つた。これを聞くとポウシヤは態と立腹の態で、法廷を去り乍ら言つた。

『お陰様で乞食がどんな挨拶をされるかを教えて戴きました。』

『パッサニオ君。指環を差し上げなさい。奥さんの不興を招くでせうが、それは僕の愛と閣下の御盡力とで以て償つて下さい。』とアントウニオは言つた。パッサニオは恩知らずと思はれることを恥ぢ、それに同意してグレシアノウに指環を持たせてポウシヤの後を追はせた。書記になつてゐるネリッサも、グレシアノウに指環を與へてゐたので、彼に指環を頂きたいと願つた。(主人に負けず寛大さを示したかつたので)彼も指環を與へた。二人の夫人は、家に歸つてから夫達が指環を失くしたのを攻め、誰か外の女に與へたのであらうと言つて非難すること等考へ、笑ひ合つた。

ポウシヤは歸路に就いたが、善行をしたといふ自覺に必ずともなふ幸福な氣分にひたつてゐた。楽しい心持で見れば、見るもの皆樂しかつた。月はこれ迄にない程輝やかしく見えた。月が雲間に隠れると、ベルモットの彼女の家から燈火が洩れるのが見えた。それは同様に彼女の楽しい想像を喜ばせた。そしてネリッサに向つて言つた。

『あの燈火は私の客間に點火つてゐるのだわね。あの小さな蠟燭の光がどんなに遠くまで届くことだらう。それと同じやうに、此の悪い世界に遠くまで善行が輝くわけなのね。』

又家から聞えて来る音楽を聞いて、

『音楽は晝間より夜聞いた方がいゝやうね。』と言つた。

ポウシヤとネリッサは家の中に這入つて、各自の着物に着變へ、互の夫の歸りを待ち受けた。二人は間もなくアントウニオを伴つて歸つて來た。パッサニオは愛する友人をポウシヤ夫人に紹介し、ポウシヤは歓迎と祝ひの挨拶を述べたが、それがまだ終らないうちに、ネリッサと夫が部屋の一角で喧嘩を始めてゐるのを見た。

『もう喧嘩なの。どうしたの。』とポウシヤが訊ねた。

『奥様、それはかうなんです。ネリッサが私に呉れました安物の鍍金の指環のことで、それには、恰度ナイフに製造者が彫り付ける詩みたいに、「われを愛して見捨てたまふこと勿れ」と彫つてあるので』とグレシアノウが答へた。

『指環の文句や値段の事を云ふ必要はありません。私が貴方にあの指環を差し上げましたとき、死ぬまで離さないと誓言なすつたのぢやありませんか。それにあなたは辯護士の書記にやつてしまつたつて云ふんですもの。分つてますよ、女に遣つたんですよ。』とネリッサは言つた。

『此の手に誓つて云ふが、未だほんの子供のやうな若者に、背の高さもお前位しかないちびに遣つた

んだ。素晴らしく賢い辯護でもつてアントウニオ様の命を救つた若い辯護士の書記をしてゐた男だ。そのお喋りの小僧が禮代りに呉れと云ふものだから、どうしても断る譯に行かなかつたのだ。」とクレシアノウは答へた。

『妻の最初の贈物を手離すのは、それは貴方の方が悪いのね、グレシアノウ。私も夫のパスサニオ様へ指環を上げてあるが、あの方はどんな事があつても手離しはなさらないと思ふわ。』とポウシヤが言つた。グレシアノウは自分の落度を辯解するつもりで、

『御主人のパスサニオ様も、あの辯護士の方へ指環をお上げなすつたのです。それで書き物をして多少骨を折つた書記の小僧が、私にも指環を呉れと云つたのです。』

ポウシヤはこれを聞くと非常に立腹した様子で、指環を失くした事でパスサニオを責めた。そしてネリッサに確かなところを聞いたが、或る婦人が其の指環を持つてゐたそうであると言つた。パスサニオは愛する妻を立腹させたので非常に悲しくなり、熱心に言つた。

『いや／＼私の名譽に誓つて云ふが、決して婦人へ遣つたのではない。法律の博士にやつたので、其の博士の辯護士は、三千ダカットを贈らうとしても何うしても受け取らず、只指環を呉れと云つたのです。それを断ると非常に不興さうにして出て行きました。私にどうする事が出来たらう。ねえポウシヤ。私は忘恩と思はれては恥辱だと氣も顛倒し、餘儀なく指環を持たせてやつたのです。どうか許

して下さい。若しあなたが居合せたなら、吃度私に願つてあの指環を立派な博士に送つた事だらうと思ふ。』

『あゝ！』とアントウニオは吐息して、

『僕が此の不幸な喧嘩の原因なのだ。』と言つた。

ポウシヤはアントウニオにそんな事を心配しては不可ない、貴方はあく迄歓迎するのだからと言つた。するとアントウニオは、

『私はパスサニオの爲めに此の體を一旦は抵當に入れた事のある身です。私は貴女の御主人が指環を與へた方の御蔭がなかつたなら、今頃はもう死んでゐるでせう。ですから今度は御主人が決して約束を破られないやうに、私の魂を抵當に入れる事に致しませう。』

『それでは貴方を保證人に致しませう。此の指環を夫に渡して、以前より大切にするやう仰有つて下さいませ。』

パスサニオは此の指環を見ると、自分が人にやつた指環と同じものだつたので非常に驚いた。そこでポウシヤは始めて、彼女が若い辯護士に、ネリッサが其の書記になつた事を話した。アントウニオの命を救つたのは、自分の妻の氣高い勇氣と智慧の爲めであると知つて、パスサニオは云ひ知れぬ驚きと喜びに打たれた。

ボウシヤは再びアントウニオに歓迎の言葉を述べ、それからある偶然の機會で手に入つた手紙をアントウニオに渡した。此の手紙には沈んだと許り思はれてゐたアントウニオの船の消息が書いてあつて船は皆無事に港に着いたとの事であつた。この富裕な商人の悲劇的な物語は、思ひがけなく引き續いて起つた幸運の爲めに、すつかり忘れてしまつた。そして指環の喜劇的な冒險や、夫が妻を見知らなかつたことなど話して悠々と笑ひ興じた。グレシアノは楽しさうに、言葉に一種の節をつけて誓つた。

——ながらへて他に苦勞はあらざりき  
心こめて、ネリッサの指環守るほど。

シムベリン

オウガスタス・シイザアが羅馬の皇帝であつた時分、シムベリンと呼ぶ王が英國を（其の當時はブリテンと云つた）治めてゐた。

シムベリンの最初の後は、まだ極めて幼い三人の子供達（二人は王子で、一人は王女であつた）を残して亡き人となつた。三人のうちで一番年長のイモウゼン姫は父の宮殿で育てられたが、他の二人の王子は不圖したことから、上の王子が三歳、下の王子が赤ん坊の時、育兒室から盗まれてしまつた。シムベリン王は、王子達は誰に連れて行かれたのか、また何うしてゐるか、如何しても知る事が出来なかつた。

シムベリンは再婚した。二度目の妃は奸悪な陰謀にたけた婦人で、シムベリンの最初の妃の王女のイモウゼンに對しては残酷な繼母であつた。

妃はイモウゼン姫を憎んでゐたけれども、それでも猶ほ、自分と先きの夫との間に生れた息子にこれを娶らせたいと望んでゐた。（妃も亦再婚したのであつた）さうして置けば、シムベリンの死後、ブリテン國の王冠はわが息子クロウツンの頭上に落つるからであつた。と云ふのは王子達が見出されない限り、イモウゼン姫は當然王の嗣子になるべきであつた。しかし此の計畫は、イモウゼン姫が父母

にも計らず、其の許可も得ないで、密かに結婚した事によつて破られた。

ポスチューマス（イモウゼン姫の夫の名である）は、當時の偉い學者であり、立派な紳士であつた。父親はシムベリン王の爲め戦争で戦死し、母親は彼を産み落して間もなく、夫の死を嘆くあまり死んでしまつた。

シムベリン王は此の孤兒の頼りない身の上を憐れに思ひ、ポスチューマスを（父親の死後生れたので、王がさう名づけた）引き取つて、宮廷で教育を施してやつた。

イモウゼン姫とポスチューマスとは同じ教師に就いて學び、幼い時からの遊び友達であつた。二人は子供の時から深く愛し合つてゐたが、其の愛情は年と共に深くなり、遂に内密に結婚してしまつたのである。

妃はまましいなかの娘に絶えず見張りをつけて其の行動を探らせて置いたので、直ぐに此の事を知つて非常に失望した。そして直ぐ様、王にイモウゼンとポスチューマスの結婚を報告した。

王女が尊い身分を打ち忘れ、一臣下と結婚したといふ事を聞いた時のシムベリンの激怒は譬へやうもない程であつた。王はポスチューマスを命じてブリテン國を去らしめ、永久に故郷から追放することにした。

妃は、夫を失ふイモウゼン姫の嘆きに同情するやうに見せて、ポスチューマスが追放中の假の住居

と定めた羅馬に向つて旅立つ前に、密かに會はせてやらうと申し出た。妃が示した此の深切さうな行爲は、己の息子のクロウツンの事に就いて、これから先きの計畫を旨く進めるに都合の好い爲めであつた。そしてイモウゼンの夫が出立したら、姫の結婚は王の承諾を得ないで結ばれたものであるから正當なものでないと説き付けるつもりであつた。

イモウゼンとポストチューマスとは盡きぬ名残の別れを惜しんだ。イモウゼンは母から貰つたダイヤモンドの指環を夫に與へた。ポストチューマスはどんな事があつても此の指環は手離さないと約束して妻の腕に腕環をはめてやり、自分の愛の標として、これを大切に保存して呉れと願つた。それから二人は、永遠に變らぬ愛と信實との誓ひを幾度か繰り返して別れを告げた。

イモウゼンは一人父の宮殿に残つて、淋しく鬱々として暮らし、ポストチューマスは追放の地である羅馬に到着した。

ポストチューマスは羅馬で、夫々異つた國から來た快活な若者達と交際を結んだ。若い人達は婦人のことも遠慮なく話し合つた。誰もかも自國の婦人を、とり分け己の戀人を褒めた。心にいとしい人を持つポストチューマスは、美しきわが妻イモウゼンこそ、此の世に稀な賢い、操堅い、貞節の婦人であると斷言した。

此の若人の中にアイアキモといふ紳士があつて、ブリテンの婦人が、己の同國人、即ち羅馬の婦人

以上に賞讃されるのを快く思はず、ポストチューマスが口を極めて褒めた其妻の節操を疑ふやうな口吻を漏らして、ポストチューマスを怒らせた。二人は散々口論した揚句、ポストチューマスはとうとうアイアキモの申出に承諾を與へることになつた。それは彼(アイアキモ)がブリテンへ行つて、人妻であるイモウゼンの愛を求めてみると云ふ事であつた。二人は賭をして、若しアイアキモが此の悪い計畫に成巧することが出来なかつたならば、莫大な金を沒收することとし、萬一アイアキモが愛を獲ることが出来たならば、そして彼女を説き伏せて、ポストチューマスが愛の記念として大切に置いて置くやうに願つた腕環を貰ふ事が出来たならば、彼女が夫と別れる際愛の標として送つた指環を、アイアキモに與へて、此の賭を終ることにしようとした。ポストチューマスはイモウゼンの節操を堅く信じてゐたので、彼女の名譽を試してみても何等の危険はないと考へてゐた。

アイアキモはブリテンに着くと、宮廷に招かれ、夫の友人として、イモウゼンから町重な接待を受けた。しかし彼が愛の言葉を述べ始めると、イモウゼンは輕蔑にたえぬやうにそれを斥けたので、アイアキモは直に此の不名譽な劃策に成巧することは覺束ないと悟つた。

しかしアイアキモは何うかして此の賭に勝ちたいと思ひ、ポストチューマスを騙すために或る謀計を用ゐることにした。此の爲めに彼はイモウゼンの召使共に賄賂を遣つて、自ら大袍の中に入り、イモウゼンの寢室に運び入れて貰つた。彼は此の中に、イモウゼンが寢床に這入つて眠りに就くまで隠れ



て居り、其の後大袍の中から這ひ出て、部屋の中を仔細に観察し、見たことを皆書きとめて置いた。とり分けイモウゼンの頸にある黒子に注意の眼を向けて書きとめ、それからポストューマスが彼女に與へたといふ腕環を靜かに抜き取つて、再び袍の中に隠れた。翌日、彼は太急ぎで羅馬に向け出發した。そしてイモウゼンが腕環を呉れたといふ事、また其の寢室に一夜を過させて呉れたといふ事をポストューマスに吹聴して自慢した。アイアキモは其の偽の話を次のやうに述べ立てた。

『寢室には。』と彼は言ひ出した。

『絹と銀糸で織つた綴織の壁掛がありました。主題は「高慢なるクレオペイトラがアントニイに逢へる時」といふので、實に立派な作品でした。』

『實際だ。しかし君は見ないで、話を聞いたのかも知れぬ。』とポストューマスが答へた。

『それから煙突ですが、これは部屋の南方にあつて、爐額には「ゆあみするダイナア」の繪がありました。あれ程生々と描かれてゐる人物を今まで見た事がありません。』

『それも矢張り人に聞いた話かも知れないね。それは評判の繪なんだから。』

アイアキモは出来るだけ精確に部屋の屋根のことを述べてから、猶ほつけ加へて言つた。

『私は危く、爐の薪架のことを忘れるところでした、それは銀製の目ぐはせしてゐる二人のキュービッドで、各々片足で立つて居ました。』それから例の腕環を持ち出して言つた。

『貴方はこの寶石を御存じですか。あの婦人が私に呉れたのです。自分の腕から脱して呉れました。』

其の姿が未だ眼に見えるやうです。其の様子の美しさは、贈物に立ち優つてゐましたが、しかも其の贈物を美しくしました。彼女は私に其を手渡して申しました、かつては秘藏したこともありませんと。』

彼は最後に、彼女の頸にあつた黒子のことを話した。

ポストューマスは此の言葉巧みに語られた虚構の物語を、疑惑の苦惱にみちて聞いて居たが、とう／＼堪りかねてイモウゼンを罵つた。そしてアイアキモが若しイモウゼンから腕環を得たならば、遣るのに異存のなかつた例のダイアモンドの指環をば、彼に呉れてしまつた。

ポストューマスは嫉妬の怒に燃え乍ら、ブリテンの紳士でイモウゼンの侍臣の一人であり、また彼の長い間の親友の一人であるピザニオに手紙を書いて、それに妻の不義の證據を悉しく述べ、イモウゼンをウエイルズの港のミルフオウド・ヘイヴンまで伴れ出して、殺して呉れるやうにと願つた。それと共にイモウゼンの方へも偽の手紙を書いて、自分は彼女を見ないでは最早一日も生きることが出来ぬので、ブリテンに歸る事は死の刑罰を以て禁ぜられて居るけれど、ミルフオウド・ヘイヴン迄行くからどうか其處で會つて呉れるやう、ピザニオと共に待つて呉れと書いた。

善良で、少しも人を疑ふ心のないイモウゼンは、何よりも夫を愛してゐたので、又生命を賭けても夫に逢ひたいと願つて居たので、ピザニオと共に出發を急ぎ、手紙が着いた其の晩出立した。

其の旅も終に近づいた頃、ピザニオは、假令ポスチューマスには忠實であつても、不法な行爲を果すことには忠實でなかつたので、ポスチューマスから受けた残酷な命令をすつかりイモウゼンに打ち明けてしまつた。

イモウゼンは、愛し愛されてゐる夫に逢へるものと計り思つてゐたのに、其の夫に殺される運命になつてゐると知つて、非常に悲しんだ。

ピザニオは彼女に、氣を取り直して、ポスチューマスが自分の悪かつた事を悟り、後悔する時が来る迄辛抱して待つやうに説き勤めた。かう云ふ間にも、イモウゼンは悲しみの餘り、もう父の宮殿には歸らぬと言ひ出したので、ピザニオは、旅をするのに安全な爲め男子の服装をするやうに忠告した。彼女もこの忠告に賛成した。そして其の變装のままに羅馬に渡り、夫に會はうと考へた。残酷な取扱ひをした夫ではあるけれども、夫を愛せずには居られなかつたのである。

ピザニオはイモウゼンに新らしい服装をせさ終ると、宮廷へ歸らなければならぬ事情があつたので、彼女を不安な運命の手に残して出發した。彼は出かける前に、あらゆる病氣に非常によく利くと言つて妃から渡された強壯劑の一瓶を彼女に與へた。

妃はかね／＼ピザニオを、イモウゼンやポスチューマスの友達であるといふ譯で憎んでゐたので、動物に試して効果を見るのだと云つて、醫師に命じて造らせた毒藥が其の中に這入つてゐると計り思つ

てゐる藥の壘を彼に與へたのであつた。しかし醫師は、妃の邪惡な性質をよく知つてゐたので、本當の毒藥を與へるやうな事をせず、唯それを飲めば數時間全く死んだやうになつて眠るといふ他に、何の害も及ばぬ藥劑を與へたのであつた。ピザニオは此の調劑を此の上ない良藥と思つてゐたので、イモウゼンに、若し途中で病氣に罹るやうな事があつたら吞むやうにと言つて渡した。彼は彼女の安全と、不當の困難から早くのがれる事を祈つて、彼女と別れた。

神の攝理は不思議にもイモウゼンを導いて、赤ん坊時代に盗まれた二人の弟の居る住家の方へ行かせた。王子達を盗んだ男はベラリウスといふシムペリンの朝廷の貴族であつたが、無實の叛逆罪に問はれ、朝廷から追放されたので、其の復讐のつもりでシムペリンの二王子を盗み出し、彼が隠れ住む森の窟の中につれて来て育てたのであつた。最初は仇打ちの爲めに盗み出して來た王子達であつたけれども、彼は間もなく自分の實子でもあるかのやうに愛するようになり、注意深い教育も施してやつたので、二人は立派な若者になつた。若者らしい精神は二人に大膽な勇敢な行動をさせるやうにした。彼等は獵をして生計を立ててゐたので、二人とも活潑で、大膽で、いつも己等の親だと思つてゐるベラリウスに向つて、運命を開拓する爲めに戦争にやつて呉れと願つた。

此の若者達が住んでゐる岩窟へ、イモウゼンは運命が導くままに遣つて來る事になつた。彼女はミルフオウド・ヘイヴンへ行く途中（其處から羅馬行きの船に行くつもりであつた）大きな森の中で道

に迷つた。食物を求める場所も見附からなかつたので、彼女は飢と疲労の爲めに殆んど死にさうになつた。唯單に男の着物をつけたといふだけで、優しく育てられた若い令嬢が、男のやうに淋しい森の中を彷徨ひ歩く疲労に耐へられるといふ筈がない。恰度此の時洞穴が見附かつたので、中には誰か居るかも知れない。食物も得られるだらうと思つて這入つてみた。岩窟の中には誰も居なかつた。しかし四邊を見廻すと冷肉が置いてあるのが見附かつたので、彼女は餘りの飢しさに、招待をも待たず座つて食べ始めた。

『ああ。』と彼女は獨言を始めた。

『男の生活つて本當に詰らないものだわ。何て疲れた事だらう。二晩も地上に臥たんだもの。私にちやんとした決心が無かつたなら、病氣になつてゐるところだわ。ビザニオが山の上でミルフオウド・ヘイヴンを指して呉れた時は、ほんの眼の下だと思つたのに！』それから夫の事と其の残酷な委任のことが胸に浮んで來た。彼女は言つた。

『あゝ、ボスチューマス、あなたは不實な方ね！』

父だといふペラリウスと共に獵に出かけたイモウゼンの二人の弟達が、恰度此の時家に歸つて來た。ペラリウスは二人にポリドア及びカドウォールといふ名前をつけてやり、二人は何も知らなかつたので、ペラリウスを父だとはかり思つてゐた。しかし此の二王子の本當の名前はギデリウスとアーヴィ

ラガスであつた。

ペラリウスが先づ最初に岩窟に這入つた、そしてイモウゼンを見ると、子供達を止めて言つた。

『一寸這入らずに居て呉れ。われ／＼の食物を食べてゐる者がある。妖精かも知れないぞ。』

『どうしたんです、御父さん。』と若者達が訊ねた。

『これはしたり。』とペラリウスは叫んで。

『洞穴の中に天使が來てゐるぞ。天使でなければ地上の逸品だ。』

少年の服装をしてゐるイモウゼンはそんなに美しく見えたのであつた。

彼女は話聲を聞くと洞穴の中から出て來て、次のやうな言葉で話しかけた。

『深切な旦那様方、どうか私に害を加へないで下さい。此の洞穴の中に這入ります前には、私が今食べましたものを戴くなり、買ふなりしようと思つて居ました。本當に私は何も盗みは致しません。床の上に金貨が散ばつてゐるのを見ましたけれども、盗まうとも思ひませんでした。これは頂きました食物の代價に差し上げます。實は食事を終りましたら、此の金を卓子の上に乗せて、施し主の方に祈を捧げて行くつもりでございました。』

彼等は決して金などは要らぬと辭つた。

『怒つていらつしやるのですね。』と憶病なイモウゼンは言つて、

『ですが、皆さん、假令あなた方が私が悪いと云つてお殺しになつても、私はそれを戴かなければ死んでゐたと云ふ事を覚えて居て下さい。』

『貴方は何處へ行くのですか。して名前は何と云ひます。』とベラリウスが尋ねた。

『フィディリと云ひます。伊太利へ出かける親類が有りました、ミルフオウド・ヘイヴンから船出しましたので、それを尋ねてまゐる途中飢に迫つて、つい悪い事をしてしまいました。』

『美しい若い方、どうかわれ／＼を無作法者と思つて下さいませ。粗野な場所に住んでゐるからと言つて、深切な心持がない者と思つて下さいませ。よくこそ御出でになりました。もう直に夜です。貴方は出發なさる前にもう少し潤いで、ゆつくりと食物を御食へなさい。子供達、もてなして御上げなさい。』

そこで彼女の弟である若者達は、いろ／＼と深切な言葉をかけて洞穴の中に招じ入れ、彼女をば(彼等は彼をばと言つた)兄弟のやうに愛すると言つた。一同は岩窟の中に這入つて、(獵をしたとき鹿を殺したので)そこでイモウゼンは器用な主婦振りを見せて、夕飯の仕度の手傳をして皆を喜ばせた。

今では高貴の生れの姫君は料理を理解する習慣にはなつてゐないが、當時はさうでなく、とり分けイモウゼンは此の様な藝に秀でてゐた。彼女の弟達が感心して言つたやうに、彼女はまるでジュノウの女神が病氣になつて、フィディリが其の料理番でもあつたかのやうに、それ／＼の特質に野菜を切り

汁の味をつけたりした。

『それに。』とポリドウアは弟に向つて。

『まるで天使のやうに歌ふぢやないか。』と言つた。

二人はまた互に、フィディリはあんなに可愛く微笑するけれども、悲しい陰鬱なかけが美しく顔にかゝるのを見る、悲しみと忍耐とが彼を全く捕へてゐるに違ひないと話した。

若者たちは、イモウゼンの優しい性質の爲めに、(或は、それとは知らないが姉弟の深いえにしの故に彼女を非常に愛するやうになつた。彼女もそれに劣らず若者達を愛した。そして若し愛するポスチュ・マスの思ひ出さへなかつたならば、此の洞穴の中で荒々しい森の若者と共に生死を共にしてもいとさへ考へた。彼女は喜んでここに留まること承諾し、旅の疲れが全く癒えてミルフオウド・ヘイヴンへ行けるやうになるまで待つ事にした。

とつて来た鹿の肉もみな食べ盡したので、一同は更に獵に出かけることになつた、が彼女は體が優れなかつたので、皆と一緒に行くことは出来なかつた。たしかに、夫につれなくされた悲しみと、森の中を彷徨ひ歩いた疲労とが、病氣の原因であつた。

一同はイモウゼンに別れを告げ、獵に出かけたが、其の途々でも、若者イモウゼンの立派な才能と優雅な舉動とを賞讃した。

イモウゼンは一人になると直ぐにピザニオに貰つた強壯劑のことを思ひ出した。彼女はそれを呑むと忽ち、深い、死んだやうな眠りに落ちた。

ペラリウスと彼女の弟達は獵から歸つて來ると、ボリドウアが先づ最初に岩窟の中に這入つた、そしてイモウゼンは眠つてゐるものと思つて、靴音を立てて起しては悪いと思つて、自分の重い靴を脱いだ。かうして高貴な獵人の心にも眞の優しさが湧いたのであつた。しかし聽て、どんな音を立てても彼女の眠りの醒めない事を知つて、彼女は死んだのだらうと定めた。ボリドウアは、幼い時から一緒に育つた兄弟でもするやうな悲嘆を以て、彼女の死を悲しんだ。

ペラリウスも亦彼女の屍を森の中に運んで、當時の習慣通り、歌や嚴かな挽歌を以て葬式を営まうと申し出た。

そこでイモウゼンの二人の弟達は、彼女を小暗らい森蔭に運んで行つて、草の上にそつと臥かし、去り行く魂に安息の歌を歌ひ、木の葉や花を以て彼女の上一面を覆うた。ボリドウアは言つた。

『夏が續く限り、私が森に住むかぎり、フィディリよ、私は汝の悲しい墓の上に毎日撒いてあげる、汝の顔の色のやうな青白い櫻草の花、汝が清い血官のやうな風鈴草、汝の呼吸ほど香はしくないけれど薔薇の葉を。これを皆汝の墓に撒いてあげる。汝の美しい屍を覆ふ花がない冬には、柔かな苔をもて覆うてあげよう。』

葬式をすませると一同はしほく〜と其處を離れた。

イモウゼンは長くさうしては居なかつた。魔睡藥の効果が消えると目を醒まして、自分の上に撒いてある花や木の葉の軽い覆ひを振り落して立ち上り、自分は夢を見てゐたのではないかと思つた。そして言つた。

『私は洞穴の番人になつて、正直な人達へ料理をして上げてゐると思つたのに。何うしてここに來たんだらう、花なんか覆はれて。』

岩窟へ歸る道も分らず、知り合ひになつた仲間の姿も見えなかつたので、矢張り何もかも夢だつたに違ひないときめた。彼女はいつかはミルフオウド・ヘイブンに着いて、そこから伊太利行きの船に乗りたいたいものだと思ひ乍ら、再び詫しい旅路に就いた。彼女は未だ夫ポチューマスの事許り思つめてゐたので、小姓に姿を變へても彼を探したいと思つた。

しかし此の時イモウゼンが少しも知らない大事件が起つてゐた。羅馬の皇帝オウガスタス・シイザアとブリテンの王シムベリンとの間に突然戦争が起つた。羅馬軍はブリテンに上陸し侵入して來て、恰度イモウゼンが旅をしてゐた森を目掛けて進んで來た。此の軍隊の中にポチューマスも加つてゐた。ポスチューマスは羅馬軍に加つてブリテンに上陸はしたけれども、自國人を相手取つて羅馬の爲めに戦ふつもりはなかつた。寧ろブリテン軍に加つて、自分を追放した王のために戦ひたいと思つてゐ

た。

彼はあく迄イモウゼンの不貞を信じてゐた。しかしあれほど愛したイモウゼンの死は、しかも自分の命令によつて殺させた事は、(ピザニオは彼に手紙を書いて、彼の命令通りに行つたこと、イモウゼンは死んだことを報告した)心の悩みの種になつた。そこで彼は戦争に加つて戦死するか、或は追放中故郷へ戻つて来たといふかどでシムベリンに殺されるか、其の何れかを望んでブリテンに歸つて来たのであつた。

イモウゼンはミルフオウド・ヘイヴンに着かぬうちに、羅馬軍の手に捕へられた。が彼女の風采や態度が優れてゐた爲めに、羅馬軍の大將ルウシアスの小姓にされた。

シムベリンの軍隊も此の時、敵と接戦する爲め此の森の中に進軍した。ポリドウアとカドウォールは共に王軍に投じた。此の二人の若者は、父王の爲めに戦ふのだとは夢にも知らなかつたけれども、唯勇ましい働きをすることが好きで参加したのであつた。老ベラリウスも亦若者等と共に軍隊に這入つた。彼は長い間シムベリの王子を盗み出した罪を後悔してゐたので、また青年の頃には武士であつ事實もあるので、今まで王に加へた危害の償ひに、喜んで王軍に投じたのであつた。

今や兩軍の間に激戦が始まつた。ポストューマスとベラリウス及びシムベリンの二王子の拔群の働きがなかつたならば、或はブリテン人は敗北して、王シムベリンさへも殺されたかも知れなかつた。

三人は王を守り、王の命を救ひ、戦局を全く一變させたので、ブリテン軍は大勝利を占めた。

戦ひが終つた後で、願つた死を得られなかつたポストューマスは、追放中戻つて来た罰として喜んで死刑を受けたいと思ひ、シムベリンの部下に其の身を降した。

イモウゼンとイモウゼンが仕へてゐた主人とは共に捕虜となつて、シムベリンの前に伴れて來られた。彼女の古い仇で、今は羅馬軍の士官となつてゐるアイアキモも亦捕虜となつて引き出されてゐた。これらの捕虜が王の前に並んでゐるところに、ポストューマスが死刑の宣告を受ける爲めに伴れて來られた。此の不思議な廻り合せのところへ、ポリドウアとカドウォールを従へたベラリウスが、其の勇敢な行爲によつて王の爲めに盡した勳功の褒美を受けに伴れて來られた。王の従者の一人であるピザニオも勿論此の場に居た。

それ故に今王の前には(それ〴〵異つた希望と恐怖を抱いて)ポストューマス、イモウゼン、彼女の新しい主人、即ち羅馬軍の大將、忠義の臣ピザニオ、不實な友人アイアキモ、シムベリンの盗まれた二王子、盗み主のベラリウスが並んでゐた。

羅馬軍の大將が先づ口を開いた。余の者は黙つて王の前に立つてゐた。其の中には胸をどぎつかせてゐる者もあつた。

イモウゼンはポストューマスを見て、百姓の變装をしてゐたけれども、それを知つた。しかし彼の

方では男装をしてゐるイモウゼンが分らなかつた。イモウゼンはアイアキモを見た。そして其の指に自分の指環の嵌つてゐるのを見たが、自分の艱難はすべて此の男が造つたものであるとは、まだ知らなかつた。彼女は實の父の前に捕虜として立つた。

ビザニオはイモウゼンがよく分つた。彼女を男装させたのは實に彼であつた。

『あれは御姫様だ。』と彼は考へ乍ら、

『生きて御出でになるからには、其のうち是非も分らう。』

ペラリウスも亦イモウゼンが分つたので、カドウォールへ密つと囁いた。

『あの少年は生き返つたのぢやないか。』

『あの可愛い紅顔の少年が、死んだフィディリに似てゐることは、全く瓜二つです。』とカドウォールが

答へた。

『死んだ少年が生き返つたのです』とポリドウアも言つた。

『靜かに、靜かに。』とペラリウスは制して、

『若しあの少年だつたら、屹度われ／＼に言葉かけるに違ひない。』

『死んだのを見たんですからね。』とポリドウアも再び囁いた。

『黙つてお出で。』とペラリウスは答へた。

ボスチューマスは嬉しい死刑の宣告を聞く爲めに黙つて待つてゐた。彼は戦争中にシムベリンの命を救つたのであるが、その事を云へば王は心を動かされて死を赦すかも知れなかつたので、決して其の事を語るまいと決心してゐた。

イモウゼンを小姓にして保護して遣つた羅馬の將軍ルウシアスは、(前に述べたやうに)先づ最初に王に向つて口を開いた。彼は勇氣に富んだ、立派な品位を持つた大將であつた。其の言葉はかうであつた。

『殿下は捕虜の賠償金を取られず、凡て死刑に處せられると聞き及びました。私も羅馬人です。羅馬魂を以て潔く死を受けます。しかし茲に是非御願ひしたいものが一つ有ります。』と言つて、イモウゼンを王の前へ出して、

『此の少年はブリテン生れの者です。彼の爲めに賠償金を取つて下さい。少年は私の小姓です。非常に眞實で、優しく、あらゆる場合に於てこんなに深切で、勤勉で、義理堅い者は他にありません。少年は羅馬人に仕へてゐましたけれども、ブリテン人には何の危害も加へませんでした。他に誰も赦されぬとしても、此の少年だけ助けて下さい。』

シムベリンは實の娘のイモウゼンを熱心に眺めた。變装してゐるのでそれとは分らなかつたが、萬能の神が彼の胸の中に囁いたと見えて、王は言つた。

「此の少年は確かに見たやうな気がする。其の顔には見覚えがある。何うしてか、又何處でかといふ事は分らないが、兎に角赦してやる。生命はそちに遣はさう。してまた願ひの筋があれば申し出よ、それも許してやる。いや假令それが予の最も大切な捕虜の生命乞ひであつても。」

『殿下、まことに有難く存じ上げます。』とイモウゼンは答へた。

願ひを叶へて遣るといふ事は、それがどんな事であつても、恩典を下された者が選ぶ好きなものを其の者に與へてやるといふ約束と同じであつた。一同は小姓が何を願ふかと耳を聳てた。彼女の主人であるルウシアスは言つた。

『予は予の生命を助けて呉れとは願はないが、お前はそれを願ふつもりだね。』

『いえ、いえ、残念ですけど！』とイモウゼンは言つて、

『他に致さなければならぬ事が御座います。閣下の命乞を致す譯にはまゐりませぬ。』

少年のこの思はずらしく見える言葉は、羅馬の大將をいたく驚かせた。

イモウゼンはアイアキモに其眼をきつと注いで、アイアキモが指に嵌めめてゐる指環は何處から得たものであるか告白して欲しいといふのが、他ならぬ彼女の願ひであつた。

シムベリンは彼女の願ひを許して、アイアキモに何うして其の指環を手に入れたかと云ふ事を告白しなければ拷問に附すると嚇かした。

そこでアイアキモは、彼の悪事をすつかり告白して、前に述べたやうに、ポスチューマスと賭をしたこと、彼をままと欺いた事などを述べた。

王女の無實の證を聞いたポスチューマスの心は何うであつたらう。彼は直に前に進み出て、ピザニオに命じて彼女を殺させた自分の残酷な申し渡しを、シムベリンに告白した、そして氣狂のやうになつて叫んだ。

『おゝイモウゼン、わが女王、わが生命、わが妻！ おゝイモウゼン、イモウゼン、イモウゼン！』

イモウゼンは、愛する夫が苦惱に沈んでゐるのを見兼ねて自ら名乗り出たので、ポスチューマスは非常に喜んだ。彼はかやうにして罪と悲しみの重荷から救はれ、かつてはあんなに残酷に取り扱持つたなつかしい妻の愛の手に返されたのであつた。

シムベリンも、失つた王女が不思議に見附かつたので、ポスチューマスにも劣らず喜び、父らしい情けをかけて以前の位置に戻し、また王女の夫ポスチューマスの生命を赦してやつた許りでなく、娘の聲として認めることも承知した。

ペラリウスは此の喜びと仲直りの時を見はからつて、懺悔の告白をした。そしてポリドウアとカドウォールを王の前に出して、これが王の失き王子ギデリウスとアーヴィラガスだと言つた。

シムベリンはペラリウス老人を赦した。誰でもがかう云ふ幸福になつてゐる時に、誰が罰のこと等



考へられよう。娘は無事で見附かる、自分を護る爲めに勇敢に戦つてくれた若い救ひ主が、失くなつた二人の息子であらうとは、實に思ひ設けぬ喜びであつた。

イモウゼンは今はゆつくりと、先きの主人、羅馬の大將に恩報じをすることにした。彼女の父である王は、娘に乞はれて即刻將軍の生命を赦した。

シムベリンの奸惡な妃は、計畫を遂行する望みも絶え、且つは良心の悔ひに攻められて遂に病氣に罷り死んでしまつた、がこれより先き彼女の愚かな息子のクロウツンが自ら招いた喧嘩の爲め殺された時はまだ生きてゐた。がかうした事の次第はあまりに悲劇的で、一寸書き記すだけに止めて置かねば、此の幸福な大團圓を妨げることになる。幸福になる資格のある者はみな幸福になつたといふ事だけで十分である。腹黒いアイアキモでさへも、惡事を成し遂げ得なかつたかどで、別に罰することなく赦されたのであつた。

## リ ア 王

ブリテンのリア王には三人の姫君があつた。ゴウネリルはアルバニの公爵の夫人となり、リイガンはコウンウォールの公爵の夫人となり、三番目のコウデリアだけが未だ若い乙女で、フランスの王とバアガンデイの公爵が競争で彼女の愛を求め、其の目的で二人は當時リアの宮殿に滞在してゐた。

老王は寄る年波と政治の煩雜さで疲れ切つてゐた。年齢もはや八十を超したので、誰か若い有力な者に政事を譲り、馳て遠からず迫つて事る死の用意を十分にする事が出するやうに、以後一切國政にたづさはる事をしまいと決心した。此の目的のため王は三人の姫達を呼び寄せて、各自の唇から誰が一番よく王を愛してゐるかを聞かうとした。其の愛に相當する割合で自分の王國を三人に分けようと思つたからであつた。

長女のゴウネリルは言葉に云ひ表はせぬ程父を愛してゐると云ひ、父は自分の眼の視力よりも、生命よりも、自由よりも大切であると、誠實のない言葉を澤山並べ立て、言つたが、眞實の愛がなくとも、只さう云ふ場合には、確信をもつてうまい言葉二つ三つ使へば愛のある振りは出来るのであつた。王は娘自身の口から此の愛の證の言葉を聞いて、其の心も本當にその通りだらうと思ひ非常に喜んだ。そして子の可愛さに目が眩み、廣大な領地の三分の一を娘と其の夫に與へた。

次に二番目の姫を呼び寄せて、どれ程自分を愛するか言つてみよと言つた。リイガンも姉と同じやうな不誠實な心を持つてゐたので、姉に少しも負けて居ず、否寧ろ進んで、姉の言つたやうな言葉は自分が父に對して抱いてゐる愛を表はすには不足するものであると言つた。そして懐かしき父王を愛する喜びに較べれば、他のあらゆる歡樂は亡きに等しいとまで言つた。

リアはこのやうな可愛い子供達を持つたと思ひこんで、非常に幸福に感じ、リイガンが述べた美しい愛の證を聞いたあとでは、前にゴウネリルに與へたのと同じ程の大きさの、領地の三分の一の土地をリイガンと其の夫に與へずには居られなかつた。

王は次に平素自分の喜びであると稱してゐる末子のコウデリアを呼んで、思つてゐる事を述べよと言つた。娘も吃度姉達のやうな愛の言葉を以て自分の耳を喜ばして呉れるに相違ない、否娘は平素自分の寵兒であり、姉達二人にもまして目をかけて遣つてゐたので、どんなにか強い愛の言葉をきかして呉れる事であらうと思つてゐた。しかしコウデリアは姉達の阿諛に愛想をつかしてゐたので、又姉達の心持は其の言葉と相去ること非常に遠く、父王に御世辭を使つたのは、唯父の領地を頂戴して、未だ父王存命中にさへ其の國を治めてみたいとの慾望からであつた事を知つてゐたので、唯父は自分の義務に従つて過不足なく愛するといふ答より外に返事が出来なかつた。

王は寵愛してゐる子供の此の恩知らずの言葉に胸をつかれて、これは彼女の幸運を傷けることにな

るかも知れないから、とくと考へ直して言葉を改めたがよからうと注意した。

そこでゴウデリアは父親に向つて、あなたは父であり、愛し、育てて戴いた方であるから、其れ相應に、服従もし、愛しもし、最も深く尊敬して自分の義務を盡して来た、しかしながら、姉達が述べたやうな仰山な言葉を使つたり、他に愛するものは何もないと約束する事はどうしても出来ない。父より外に何も愛しないとすれば（姉達はさう言つたが）何故結婚したのだらう。若し自分が結婚するやうな事があれば、自分と結婚した男は必らず自分の愛の半分と、義務と心盡しの半分の要求するだらう。父のみを愛すると云ふのであれば、自分は決して姉達のやうな結婚はしないであらうと言つた。

心の中では、殆んど姉達が法外に愛する振りをした程度まで父を愛してゐたゴウデリアは、かうした場合でなければ、もつと娘らしい、愛をもつた言葉で、それにやゝ不遜に響くやうなあゝした性質の言葉も使はずに、自由に愛してゐる事を話したであらう。しかし狡猾な姉達が御世辭を使つて、莫大な報酬を得たのを見てゐたので、最も可い事は唯黙つて愛することだと思つたのであつた。此の事は彼女の愛情が利益に拘はらないといふ事と、何等物質上の報酬を目當てにしなかつたといふ事を語つた。彼女が言つた言葉は姉達のそれほど上手でなかつた丈、姉達の言葉よりも眞實と眞面目さとを多く含んでゐた。

此の露骨な言ひを、リアは不遜だと云つて非常に怒つた。王は若い時はよく腹を立てたり、

輕率な振舞をしたりしたもので、老年になつてからは、よくある慣ひの毫碌に陥り、理性もくらまされてしまつたので、眞實と阿諛の區別が付かず、美しく飾つた言葉と心から出た言葉の判別が付かなかつた。——そして腹立まざれに、ゴウデリアの爲めにと残して置いた王國の残りの三分の一を取り戻して、二人の姉と其の夫であるアルバニイとカウンウォールの公爵に等分して分ち與へてしまつた。そして二人の公爵を呼び寄せ、朝臣達の居並ぶ前で、二人に共通の王冠を譲り、あらゆる權力も歳入も政治の支配權も、唯王といふ名稱を残して置いただけで、二人に共同所有として與へた。其他王の權利も一切辭し、只百人の騎士を従者として残す事だけを保留して、姉達の宮殿で交る／＼一ヶ月宛養つて貰ふことにした。

理性には少しも導かれず只感情の赴くまゝに任せて、かく王國を不合理に處理した事に對し、朝臣はみな驚愕と悲しみに打たれた。しかし乍ら誰も進んで激怒してゐる王と其の怒の標的であるゴウデリアとの間を仲裁する勇氣ある者がなかつた。只一人ケント伯が進み出てゴウデリアの取りなしを始めたが憤怒してゐる王は止めねば死刑に處するぞと言つた。しかし善良なるケントはそんな事で手を引くやうな伯爵ではなかつた。彼はこれまでリア王に忠義をつくし、王として崇め、親のやうに愛し、主人として服従して来た。そして我が命は、主君の敵と戦ふ爲には將棋の歩以上には考へてゐず、又リアを護る動機からであれば生命を捨てる事も怖れなかつた。今リア王は自分の當の敵になつたけれど

も本来の主義を忘れず、王の爲めを思つて勇ましくも王に反対したのであつた。伯が禮を失したのは王の狂氣の爲めであり、王にとつてこれまで最も忠實な顧問官であつた伯は、王に、臣と同じ眼で以て見られて（これまでの重大事件に於てよくしたやうに）臣の忠告を取り上げらるゝよう、又とくと御熟慮の上怖るべき輕卒に御氣が附かれるやうにと哀願した。又王の末の姫のコウデリアは姉達に劣らず父王を愛してゐる事、決してやさしい聲で虚偽を隠すやうな不誠實な人間でないこと、これらの判断が間違つて居れば一命を賭してもいゝからと言つた。権力が阿諛に屈するとき、高潔は直言とならざるを得なかつた。既に一命を君の爲め捧げてゐる彼にとつて、リアの脅迫が何の役に立たう。彼は自分の義務を捨て直言を止めるやうな事はしなかつた。

此の善良なケント伯爵の正直な直言も、只王の怒を益々強めた許りであつた。王は恰度狂氣の患者が、醫者を殺し、不治の病氣を喜ぶやうに、此の眞實な家臣を追放して、僅か五日間を出發準備に與へた許りであつた。そして萬一此の厭はしい人間が六日目に、ブリテンの領土のうちに見出されるやうな事があれば、早速死刑に處すると宣告した。ケントは王に別れを告げて、好んで王の不興を蒙ることをした身は此處にゐても追放に外ならぬと云ひ、そして出發する前に、あのやうに正しい考へ方をし、慎しみ深く語つたコウデリアの上に神の庇護あらんことを祈り、又姉姫達の廣言が愛の行爲をもて償はれるやう、又自分は新しい國に行つても本来の主義を守らうと述べて出發した。

フランスの王とバアガンデイの公爵とは共に呼ばれて、末の姫に對する王の決心を話され、王の不興を蒙つてゐる今となつては姫の身體の外には何のとりへとすべき財産もないが、それでもまだ求婚を續けられるか何うかと尋ねられた。バアガンデイの公爵は求婚を謝絶して、そんな條件の下で姫を妻に貰はうとはしなかつた。併しフランスの王は、姫が王の愛を失ふに至つた過失の性質がどんなものであるかといふ事、それは口が拙くて、どうしても姉達のやうに詔ひを述べる事が出来なかつた事であるのを知り、若い姫の手を執り、姫の其の美しい徳こそ一國にもまして立派な持參金であると言ひ辛らくした父親ではあるけれど、父親と姉達に別れを告げて自分と共に出發し、美しいフランスの國の王妃となり、姉達のそれにも劣らぬ美しい領土を治めて呉れと言つた。また彼はバアガンデイの公爵を水くさい公爵だと見下げた。それは若い姫に對する彼の愛が一朝にして水のやうに流れ去つたからであつた。

そこでコウデリアは涙を流して姉達に別れを告げ、何うか後に孝養を盡して、前の言葉を反古になされぬやうにと懇願した。姉達は、自分達も義務は心得てゐるから其の御世話には及びませぬと意地悪く云ひ放つて、それよりも御情けで（と嘲笑して言つた）戴いた且那樣の機嫌をせいゝ損はないや、にせよと言つた。コウデリアは姉達の狡猾な心も知つてゐたので、父を姉達の手に乗せるのが耐えず、重い心を抱いて宮殿を去つた。